拾った女房/矢一筋

山手樹一郎

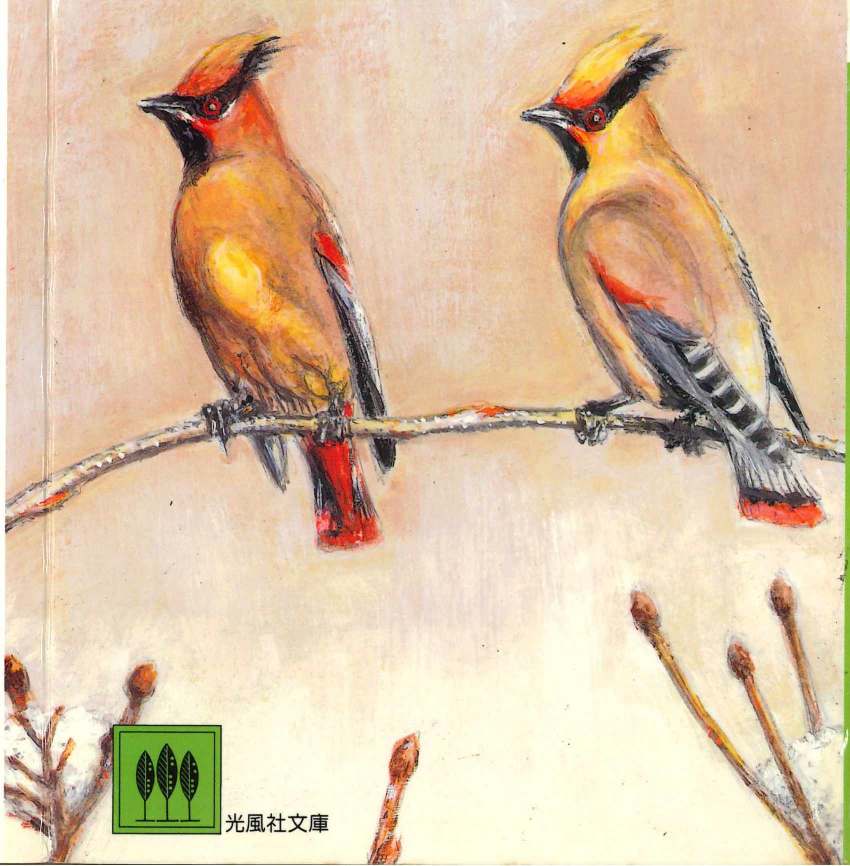


光風社文庫

イラストレイション：梶　鮎太

拾った女房/矢一筋

山手樹一郎



光風社文庫

や2-10
543

山手樹一郎

拾った女房/矢一筋

発行
光風社出版
発売
成美堂出版

9784415088334

1920193005431

ISBN4-415-08833-3

C0193 ¥543E

定価：本体543円＋税

発行　光風社出版
発売　成美堂出版

光風社文庫

拾った女房/矢一筋
山手樹一郎

侯の御前で一矢を的中させた多賀小弥太に、藩中切っての剣客溝淵半助が酒興にのって、矢面に立つ、と挑んだ結末は……。
青雲の志を抱いて故郷を出て江戸へ上った大吉だったが、相棒の岩鉄と二人札つきの悪となったが恋心は残っていて……。



●山手樹一郎・好評既刊●

いろは剣法/のっそりと参上
朝霧峠/紫忠兵衛
うどん屋剣法/おせん
腕一本の春/花の雨
振り出し三両/恋名月
めおと雪/春の虹
うぐいす侍/梅の宿
浪人まつり/恋の酒
喧嘩大名/木枯の旅
拾った女房/矢一筋

拾った女房/矢一筋
2002年４月１日　発行
定価　本体543円　＋税
著　者　山手樹一郎
発　行　光風社出版
発　売　成美堂出版
〒112-8533 東京都文京区水道1-8-2
TEL　(03) 3814-4351
FAX　(03) 3814-4355

山手樹一郎

拾った女房/矢一筋

光風社文庫

や2-10

山手樹一郎

拾った女房/矢一筋

光風社文庫

拾った女房／矢一筋

山手樹一郎

光風社文庫

目次

拾った女房／矢一筋

恋討手

一

「原、起きろ、——原」

なんど呼んでも一向通じない。まだ宵(よい)をすぎたばかりだ。早寝にも程がある。もっとも武(ぶ)骨(こつ)一遍(ぺん)の律義者で、日が暮れれば寝ることにきめているような男だが、——力一杯門の扉を叩きながら、戸田弥太郎は少し焦(じ)れてきた。

「門を乗り越しましょうか」

馬の轡(くつわ)を取っている従者がいった。

「まさか夜盗の真似もできまい。いっしょに叩け」

北陸の秋は早く、もう木枯(こがらし)めいた夜風が身にしみる。

「誰方さまでございますな」

やっと通じたらしく、中から寝呆(ねぼ)けたような小者の声がした。

「たわけ奴、いつまで門を叩かしておくのだ。早く開けろ、火急の用だ」
物具を鳴らして駈け込むと、さすがに物音を聞きつけたか、原新左衛門が押っ取り刀で玄関に立っていた。
「弥太ではないか」
「新左、出陣の用意、末森の城を佐々成政が囲んだのだ」
「やったか」
「我々は後巻きの先手を仰せつかった。遅れては一大事だぞ」
「おう」
原は襖を蹴仆(けたお)さんばかりに奥へ飛び込んで行った。急に屋敷内が騒然となる。
能登七尾から金沢へ封ぜられたばかりの前田利家は、隣国富山の佐々成政と事を構えたくなかった。そこへこの七月成政の方から、両家の誼(よしみ)を結ぶため妹娘を利家の二男利政に妻(めあわ)そうと申し込んできたので、篤実(とくじつ)な利家は大いに喜び、少しも成政を疑わなかった。
その実、成政はひそかに美濃の織田信雄と通じ、羽柴秀吉をほろぼしたら加賀能登越前を貰う約束が成立しているので、まず利家を大いに喜ばしておいて、ふいに兵を起し一万三千の大軍を以って、末森の城を囲んだのである。末森は金沢から九里あまり、加能の国境にある急所で、奥村助右衛門が三百ばかりの兵を以って守っていた。その助右衛門から、
「如何にもして夜明けまで死守すべし」
という悲痛な急使がきたのは、今日天正十二年九月十日の宵、急使は口がきけなくて、い

きなり文箱(ふばこ)を投げ出したという。
北の方は夫利家、嫡子利長の出陣に、
「末森を敵に取られるようなら討死なさいませ。私も人手にはかかりません」
と、今生(こんじょう)の別れを告げて励(はげ)ましたというから、前田家に取って実に危急存亡の秋(とき)だったのだ。
広間に立った利家は、
「敵の不意に出るには兵を整(ととの)えているひまはない。馬に鞍(くら)だけおいて一騎がけに打って出よ。一足でも疾く出た者を今宵の功とするぞ」
と、諸士に命じた。その主君から、
「弥太、原新左と共に津幡の不破(ふわ)彦三を起し、末森の後巻きの先手いたせ」
と、下知(げち)されてきたのである。
(新左奴、あわてくさって、かえってまごまごしているんじゃないかな)
すでに大分手間どっているのだ。
弥太郎は苛々(いらいら)しながら、しかしなにかを心待ちにしていた。
「戸田さま——」
ふっと忍ぶように玄関へ浮き出した白い顔、心待ちにしていた新左の妹、弓だ。
「おう」
やっぱり出てきたではないか。——弥太郎は急に満ち足りた胸を躍らして一足進みながら、

殊更(ことさら)槍の石突をとんと突いて見せた。照れるのだ。

「御出陣でございますそうで」

寝巻の上から小袖を羽織って、細っそりと両袖を胸乳(むなぢ)のあたりへ合わせながら、切れ長な目が大胆にじっと見詰めてくる。日ごろ内気らしい弓にしては初めてのことだ。

「さよう、乗るか反(そ)るか、殿にも討死のお覚悟です」

「どうぞ、お手柄を遊ばして」

「いや、負けはしません」

好い加減な出まかせばかりいっている。どうもうまい言葉が出ないのだ。

「あの――」

弓が急にうつむいた。

「私、凱旋(がいせん)の日を、お待ちしております」

うつむいたままその姿態に恥らいがくっきりと、たしかにこういったようである。声が小さく震えている。

「なに、大丈夫です」

いってしまってから、――馬鹿奴、なんて間の抜けた返辞をするんだと、弥太郎は自分に腹が立った。だが、なんといえばいいんだ。今なら、まだ間に合うぞ。見よ、恋人は待っているではないか。ぴんと胸に響く言葉がほしいのだ。早く。

「待遠であった」

どかどかと物具を鳴らして出てきた原が、

「馬だっ」

と、叫んだ。

(もういかん)

弓の淋しそうな白い顔をちらと見て、

「馬っ」

弥太郎も自棄に叫んだ。

二

金沢から津幡まで四里、月明りの街道を二騎まっしぐらに走りながら、

(そうだった。――きっと待っていて下さい。それで好かったんだ。たったそれだけで)

弥太郎はやっと気がついて苦笑した。

――そういえば、ちょうど好い折りだから新左に申込んでおくかな。いや好い折りではないかも知れんな。此奴は武骨一遍のわからず屋だから、自分の寝坊は棚にあげておいて、主家の大事を前に何事ぞとか、なんとかいいかねない男だ。まあ急ぐこともなかろう。恋人はお凱旋の日をお待ち遊ばしているんだから。

だが、津幡の不破彦三に急を告げて、再び街道へ乗出した弥太郎は、恋人もなにも一度に吹飛んでしまった。主君利家を先頭に金沢を立った五百騎が、揉(も)みに揉んですでに津幡へか

かるのへばったり出合ってしまったのだ。

「弥太、今ごろまでどこで眠っていたのだ」

「いや」

振り返ると、原が困ったような顔をしている。

「駈けに駈けつづけて、只今不破の物具つけるを確と見届け——」

「黙れ、そんな未熟な駈けようでは先手の物の役に立つか、たわけ奴」

以っての外の激怒である。言訳無用だ。くそ、未熟者の一番槍、後で驚くな。

「御免」

というと、弥太郎は火のようになって無茶苦茶に主君を追い抜いていた。

道々おいおいに加わる兵三千あまり、その夜のうちにひそかに今浜の地の利に陣を布いた利家は、手勢を二つに分け、一つは末森の寄手の背後から、一つは坪井山の成政の本陣へ、夜の引明けの霜を蹴散らして面もふらず突入った。その兵機を得た神速の援軍は見事に功を奏して、全くふいを食らった富山勢は一度に浮足立った。

危うく本丸を死守していた奥村助右衛門も鬨の声と同時に、はるか砂山に朝霧の晴間から前田の馬印が見えたので、得たりと城を打って出た。

その朝、城方の寄手へ意地ずくで一番槍を入れた弥太郎は、激戦一刻ばかり無我夢中で槍を振り廻していたが、気がついた時にはいつの間にかあたりに敵の影がなくなっていた。仆される者は仆されて退くものは退いてしまったものらしい。そこにもここにも霜解け道へ転がっている雑兵の屍に、明るい朝日が白々しかった。林の向うから遠く勝鬨の声が木霊してくる。

「もうすんだのかな」

いきなり林を駈け抜けると、ふっと見覚えの鎧が人の肩に縋って槍を突きながら街道を跛を引いて行くのが目についた。

「新左——」

「おう」

振り返った原の髭むしゃの顔は蒼ざめて、だがいつもの人なつこい微笑をしかめて見せた。

「やられたか、馬はどうした」

「馬諸共、股へ鉄砲玉を食ってのう」

「危ないところでござった。敵が槍をつけようとするところへちょうど拙者が駈けつけて——」

肩を貸しているのが、高慢な顔をする。武者修行として前田家へ身を寄せている須賀半兵衛、虫の好かん奴だ。

「痛むか」

「なんの、これしきのかすり傷」

痩せ我慢しているのが見えるので、

「連れて行こう、これへ乗れ」

弥太郎が鞍の後ろを叩くと、須賀が、

「戸田うじ、それどころではござるまい」

「――」

「見られい、佐々の本陣が引きはじめた。兵書に勝に乗るとはこの機、ただ無二無三に追落し給え。成政の首 掌にありだ」

なるほど、佐々勢は総くずれに坪井山さして引いて行く。鬨の声はそれを追っているのだ。

（風来軍師奴、いやに気取って利いた風なことを吐かすな）

弥太郎はむっとしたが、急に気のつくことがあったので、

「新左、すぐ迎えにくるぞ」

いい捨てるなり今浜の本陣へ取って返した。

「弥太、なにをまごまごいたしておる」

金の切裂の采配を取って、得意満面四方の勝利を睨んでいた馬上の利家が、いきなり一喝した。

「この時期をなんと心得るぞ」

「はっ、今こそ兵を収めるの好機」

「なにッ」

利家は鋭い目をくわっと見開いた。弥太郎も負けずに睨み返す。場合が場合、一瞬今にも斬って捨てまじき殺気が走ったが、

「ははは、此奴、利家を教える気か、大馬鹿者奴、そこに見ておれ。――又兵衛、鉦を打って兵を固めよ」

呆れている旗本に下知して、くるりと坪井山の方へ向いた時は、もう晴々とした日本一の顔をしていた。

三

「なにしろ兜首と見たから欲と道連れ、雑兵ながら相手も死物狂いだ。さっと槍を繰出そうとするところへ、ちょうど間に合った拙者が、卑怯者、と一喝躍りこんで――」

原の傷の全快祝いの席だった。上座に構えた須賀半兵衛が得々と新左救い出しの長講一席、――いやな奴だと弥太郎は外方を向いていた。

あれ以来須賀はよく原の家へ出入りして、弓に結婚を申込んだとも聞いている。律義者の新左のことだから、十分助けられた恩を被ているだろうし、また平気で恩に被せるような奴でもある。髭むしゃの新左に似合わぬ美貌の弓を見逃すはずはない。どこまで話が進んでいるか、せっかくお凱旋をお待ち遊ばしていてくれただろうが、――それを聞いては弥太郎、さすがに求婚する勇気が出なくなってしまった。今日までなるべく原の家へ近づかないようにしていたのである。

「どうぞ、お過ごし遊ばして」

そっと弓が寄ってきた。三度目である。

「はあ」

そばへ来るとなかなか立たない。その心根がいじらしくもあって、一番槍の勇士ますます

憂鬱(ゆううつ)である。

「しかし、早く全快してよかったのう」

「なあに、滅多(めった)に傷負けのする面ではない」

皆んな声を合せて笑った。そろそろ酒のまわる時分だった。思い思いの手柄話が出る。その人々の話をよそに、

「戸田さまは一番槍を遊ばしたそうでございますね」

と、弥太郎にだけ聞えるほどにいう。

「口惜しまぎれです。あの晩殿に怒鳴りつけられたものだから」

「でも、嬉しう存じますわ。どんなにお勇ましかったか」

弓は綺麗(きれい)な目を惜しみなく向けて、心持ち頬を染めた。白くこまやかな肌が水々しく匂うばかり、ふっくらと胸乳のあたりを憧憬にときめかして、この天女はあたりに人のあるのを忘れてしまったのではないだろうか。

「勇ましいというか、気狂いじみているというか、まあ無我夢中ですな」

「弓も男だとよろしかったのですけど」

「ほう、一番槍を入れますか」

「おからかい遊ばしてはいや。——ただ男ならごいっしょに戦場へまいられますもの」

溜息をついて伏目になる。その嬋妍(せんけん)たる姿態に、言葉より大胆な処女の熱情を感じて、弥太郎思わず初々しい弓の横顔を見つめた。

「戸田うじ——」

ふいに須賀が食ってかかるように呼びかけた、妙にぎらぎらと敵意の目を光らしている。

「拙者武者修行者として後学のため伺(うかが)いたいことがござるのだが」

あまり物々しいので、座談がぴたりと止んだ。軍師先生嫉(や)いたなと、弥太郎はすぐ気がついておかしかった。

「佐々の本陣が総くずれに坪井山へ引いたみぎり、たしか尊公は今が兵を収める好機と進言されたように聞き及ぶが、その意を承(うけたまわ)りたいものだな」

「いや、みぎりなど、改まってお尋ねにあずかるほどの意があったわけではない」

「その御謙遜(けんそん)では痛み入るが、あの折り無二無三に追落せば、成政の首はなかったものと拙者は愚考する。兵書に勝に乗るに如(し)かずとあるは、ちょうどあの節に当ると存ずるが、いかなものでござろう」

「なるほど、そういうものでござろうかな」

相手になろうとしない。

「尊公の進言も進言だが、戦上手といわれた前田侯がそれを容れて、あの采配はどうも拙者にはわからん」

「止められい。酒席で主君下知の評(ひょう)など恐れ多いことだ」

弥太郎は静かにたしなめた。

「そうだ。軍話は他日として、まあ今日は死に損ないの身祝いだ、大いに飲んでくれ」

取りなすように原が、この男としては精一杯のざれ言までまじえて仲へ入った。
「いや、拙者なにも御主君の下知を云々するのではないが、共に兵を談ずるの士として、戸田うじに糺したいのだ」
弓が冷たい表情をして、つと座を外して行った。それが一層見識を見ていて貰いたかった須賀の癪にさわったらしい。
「兵書を解せぬために、あたら好機を逸したのは実に惜しい。あの時は前田侯も魔がさしたのだな」
と、執拗に絡んでくるのだ。
「止さぬか、素浪人の料簡で殿の采配はわからぬ。置けおけ」
「なにッ、素浪人とは誰のことだ」
「貴公のことよ」
弥太郎もつい乗ってしまった。
「きこう、素浪人ではわからぬ采配の仔細――」
ここぞと、許すまじき顔を蒼白ませて詰め寄る。
「困った男だな。あの夜急使の往来から積って見ても、援軍の数は三四千と読めるはず、それと気がつかずに佐々勢が崩れ立ったのは全く神速の兵機にふいを衝かれてのことだ。勝に乗ってこれを追えば、破れたりとて敵勢は一万あまり、備えを直して総返しに盛返してくるのは、火を見るより明かではないか。なにも拙者が進言したからではない。殿はただ、勝を

残して師を全うするの機を待っておられたのだ。負けても勝っても身軽な素浪人根性では生きた采配は計れぬ。無用の言葉は口にせぬものだ」
弥太郎は冷然と嘲笑した。
「面白い、拙者の素浪人根性を見せよう。立て、刀を取れ」
「果たし合いか」
「おお、浪人たりとて面罵は許せぬ」
事の成行きに、一座ははっと固唾を呑んだ。
「御免をこうむろう」
「臆したな、此奴――」
「それが素浪人根性よ。主に仕える身が、私に刀が抜けるか」
「ははは、うまい口実、主君の袖に隠れる気だろう」
破れかぶれに悪罵する醜い顔を眺めながら、此奴娘にふられて八つ当りに出たと思うと、急に馬鹿らしくなった。
「新左、せっかくの酒席を騒がしてすまぬことをしたのう。許せ。――わしは中座した方がよさそうだ」

四

翌日、弥太郎が出仕して溜りの間に入ると、待っていたように昨日の一人が、

「弥太、須賀半兵衛のう、追放されたぞ」
と、話しかけた。
物好きな奴があるものだ。昨日の始終を主君に申上げたところ、――かかり人の身で、善かれ悪しかれ主人の采配を云々するのは僭越である、即刻追放せよと、使者を走らせたのだという。
「貴公が中座した後で、まだ彼奴が止めぬものだから、憎くなってのう、実は果たし合いの儀について殿の御意をきくつもりだったのだ」
「で、追放の使者はいつ出たのだ」
「今し方だ。殿には貴公をお待ちかねのようだぞ」
「そうか。まだ間に合うな。――おれは改めて出仕し直す。御前体よしなに」
なにを思ったか、弥太郎は愴惶として退出して行った。
(ありそうなことだ、あやつ奴)
と、呟きながら、
果たして旅仕度の須賀半兵衛は、無闇に興奮しながら原の玄関先で喚いていた。
「一体、どうしたというのだ。まあ上がってはどうだ」
原は怪訝な顔をしている。
「いや、どうしたもこうしたもない。加賀には共に語るに足りる奴がいないから、また修行に出るのだ。なに、天下にはまだ五指に余る名君が俺を待っている、待っているとも」

「しかし、急だな」
「急でもなんでもかまわん。ところで新左、約束だから妹御を貰って行きたいのだ」
「約束――」
「うむ、貴公にも異存がないと申したな。俺はぜひ弓どのを申受けて行く」
「しかし、困るのう。実はまだ妹にはなにも話していないのだ。そう急がれたところで」
新左は当惑する。
「すぐに話してくれ。貴公さえ承知なら、妹が兄の言葉に背くはずはあるまい」
「その御返事、私から申上げます」
襖があいて、弓が蒼い顔をあらわした。残らず聞いていたらしい。静かにそこへ坐って、
「私、須賀様のところへはまいりたくございません」
綺麗な目が意地悪く澄んで、一層男心を駆り立てる。
「拙者は、拙者は兄上の恩人でござるぞ。それでも、それでも――」
須賀は両眼を血走らせた。
「いやなのでございますもの」
弓がはっきりと、その紅を含んだ蕾のような可愛い口から冷たくいってのける。
「あなたは、恩知らずだ。武士の娘にあるまじき女だ。恥知らずだ」
「半兵衛」
つかつかと入ってきて、

「いやがる娘を口説くは恥知らずのうちに入らんかな」

と、弥太郎がぬっと立ちながら冷笑した。

「や、此奴、卑怯者、なにしに貴様ここへ」

「殿から果たし合いのお許しが出たのでな」

「よし、来い。ぶった斬ってくれる」

憎い恋敵だ。やり場のない鬱憤を一度に爆発させて、須賀は飛び退った。

「子供の喧嘩ではあるまいし、落着いて仕度をせい。――新左、庭内を借りるぞ」

「――」

事ここに至っては原も、うなずくより仕方なかった。

「戸田さま――」

今までの意地の悪い顔が、もう隠し切れぬ愛情をあらわに美しく、弓はおろおろと縋らんばかり目を絡んでくる。恋人の身を案じているのだ。

「来い来い」

それを見せつけられると支度ももどかしく、須賀がいきなり抜刀した。冬に近い陽が前庭一杯に弱く、さっと殺気が低迷して、――弥太郎も同時に抜き合わせた。

「くそ」

歯を食いしばって、ぎらぎらと異様に燃えあがる須賀の両眼、まるで悪鬼だ。女の見ている前で、叩き斬ってやるぞという火のような欲望が焦りとなったのだろう、静止していた切

先が見る間に少しずつ弾んできた。

(勝った)

わずかに優越を感じた弥太郎、すかさず、ぐいと押して出た。苛ってすぐに押し返そうとしたが、磐石のような気魄である。

圧倒されながらじりじり追詰められて、須賀はついに堪えられなくなってきた。

「おうッ」

一気に盛返そうと我武者羅に一刀を叩きつけて出るとたん。

「えいっ」

一太刀だった。須賀はわずかに強刀を振ったまま、したたか右肩に斬りこまれて、

「わあッ」

と、よろめく。

飛び退った弥太郎は、型ばかり青眼に取りながら、のめるようにぶっ仆れる相手をみた。それっきりだった。須賀は肩からこんこんと血を噴いて、だらりと握っている白刃がもう玩具のように白々しい。

「遊ばしました」

ふいに縋りついてきた柔い体が、ほのかな脂粉の香をただよわして、――興奮のあまり弓は人目もなくわなわなと弥太郎の背へ泣き伏した。

「弥太、余は半兵衛を追放はしたが、果たし合いを許した覚えはないぞ」
　お召しによって弥太郎が早々出仕すると、すでに仔細を聞いていたのだろう、利家はきびしい顔をしていった。
「なにッ」
「はっ、またしても手前の粗忽、追放は斬れとの謎かと早合点いたしまして」
「あの風来坊軍師、風次第でどこへ飛んでまいりますか、お家に取って怖くはありませんが、ただ、煩そうございます」
　弥太郎は恐縮したような顔をあげた。
「たわけ奴、怪我をしたらなんとする」
「全くの粗忽」
「ではあるまい。弥太、新左の妹は美人じゃそうだな」
　意外なことをいい出す。
「――」
「ははは、此奴余に恩を被せて、媒酌させるつもりだろう。知っているぞ、しぶとい大馬鹿奴」
　篤実な利家がおかしそうに、笑い出してなかなか笑い止まなかった。

矢一筋

一

　その日、高崎の城主松平左京亮は老臣藤田外記を相手に、初夏の日ざしに汗ばみながら、自慢の弓をあらそっていたが、妙に日ごろの調子がこじれて、殊に四寸の小的になってからは、少しも当りが出なかった。
　外記は外記で、
「やはり年には勝てませぬな。気ばかり強くても、もう視力がいうことをききませぬ」
　と、負け惜しみをいいながら、兜を脱いでしまった。
「一本も当らぬとは残念だのう。その方たち試みてみい」
　侯は諦めきれぬように、近習たちをかえりみた。言下に自信のある二三人が立って、意気ごんで、弓を取り上げたが、矢はいたずらに垜地に突っ立つばかりで、いずれも恐縮して引退がるほかはなかった。

「小弥太はおらぬか」

侯は、小姓に聞いた。

「今日は非番にござります」

「呼べ。彼なら当てるだろう」

不機嫌になった侯は、意地で、一本でも的に穴を開けなくては、虫がおさまらないように見えた。

とる物もとりあえず出仕した多賀小弥太は、用人から君命を聞かされると、手馴れの強弓をたずさえて的場へ急いだ。

「小弥太か、大儀であった。――今日は気色の悪い日でな、見い、的めがわろうておる。その方ならみごと射るであろう。さっそく鬱憤をはらしてくれ」

「はっ、承知仕りました」

小弥太は静かにすすみ出た。外れ矢は綺麗に片づけられて、垜地の中央にまだ矢傷を受けぬ四寸の的が、白々とおかれてあった。

人々は小弥太が、矢を一筋しか持っていないのに気がついて、互いに目をみはった。

藩中一の上手ときこえていたが、この場合見ようによっては慢心とも取れるし、まして人々がさんざん射外したあとだけに、ただ一筋で射抜くという自信はよいが、万一はずれた時には、引っ込みがつくまいと思われる。

しかし、当の小弥太はなんの懸念もないように、作法通り片肌を脱ぎ、矢を番えてきっと

的を見込むと、おもむろに打ち起して、八分の強弓をきりきりと引きしぼった。と見る間に、ひょうと切って放した矢は、光のように飛んで、はっし、物の見事、的の黒星の中央を射抜いていた。

「あッ」

と、人々は今さらのように感嘆の声をもらした。

「小弥太、さすがに見事だのう、あっぱれあっぱれ」

侯はその妙技にやっと胸がはれたとみえて、

「一同、まいれ」

と、機嫌よく御殿のほうへ引きあげて行った。

二

その事があって二三日すぎた夕暮から、馬廻り矢矧源一郎は、親しい友人を招いて賑やかな誕生の宴を催した。

小弥太も招かれた一人だったが、たまたまその話が出ると、

「弓はなんといっても多賀さんだな、ただ一筋の矢を持って出た覚悟は、ちょっと我々にはできぬ芸だ」

と、口々に称讃した。

「一献まいろう」

一人がいうと、一同がそれにならった。

酒席をとりもっていた源一郎の妹美矢（みや）は、酌（しゃく）に膝をすすめながら、

「本当におみごとに遊ばしたそうで、私も拝見しとうございました」

と、美しくほほえみかけた。

「いや、それほどでもないのですよ」

小弥太は真向（まっこう）に褒（ほ）めたてられて、多少かたくなって坐りなおった。その様子に一同は好意の目を向けながら賑やかに笑った。

一つには、主客六人のうち、三人まではすでに妻があり、主の源一郎は近く家老藤田外記に見込まれて、その末娘と話がきまっていたので、独身者は小弥太と、藩中切っての剣客者といわれている溝淵（みぞぶち）半助の二人だ。当然二人のうちの一人が評判の美矢の良人にえらばれるだろうと思われていたから、人々は一層なごやかな興味を感じていたのだった。

「——お流れを頂戴したいものだな、拙者はあの時の失敗組だから、ぜひ、少し貴公にあやかりたい」

酒興にのって、一人が大袈裟（おおげさ）に両手をかさねて御頂戴をしたので、一同は又どっと笑った。

「じつは拙者もあの時、的を射外した一人だから、負け惜しみのようにとられては困るが——」

不意に半助が意味ありげな口を切った。思う事はなんでもいうし、それだけ実行もする強気の半助は、日ごろ多少敬遠（けいえん）されている形があったので、場合が場合、また妙な事をいい出

さねばよいがと、人々は案じたが、果たして、

「多賀氏があの節、一本の矢を持って出たのは、どうも賛成できかねるな。覚悟のほどはよくわかるが、人には万一ということがある。拙者は、やはり作法通り命矢（いのちゃ）を添えて持つほうが、武士としての日ごろの心がけだと思うがどうだろう」

と、いい出した。

むろん、悪意ではないことはわかっているが、面と向っていわれてみると、小矢太はただ笑ってすますわけには行かなかった。

「いや、万一という不安があるうちは、まだ駄目なのだ。百本の矢が九十九本まで当って、一本だけ外れても、当った九十九本には万一の不安がともなうから、まだ本当とはいえない。百本が百本、必ず当るところまで行けば、一本持って出るのも、百本持って事にのぞむのも同じことになる」

「それは理窟だが、うごかぬ的ばかり射ることが弓本来の目的ではあるまい。もし人に向って矢を放つとして、その一本をはらい落されたら、どうだろう」

「そんなことはない。もし一の矢がはらい落されるようでは、二の矢もはらい落されることになるではないか。はらい落されるようではいずれにしても役にたたぬさ」

「ほう、えらい自信だな、よし、論より証拠（しょうこ）、それでは拙者が貴公の矢面（やおもて）にたって、ためしてみようではないか。鉄砲なら知らず、とんでくるのが目に見える矢の一筋ぐらい、はらい落せぬはずはあるまいと思う」

半助は自信ありげに、昂然といい放った。座談が座談ですまなくなりそうな空気になると、人々はちょっともてあまし気味で、席が妙にしらけてきた。

そこで主の源一郎が、気軽く口を出した。

「まあよいではないか。貴公の剣、多賀の弓はともに我藩の双璧とするところだ。弓のことは小弥太にまかせておけ、今さらためすまでもあるまい。各々自分の志す道に精進すればそれでよいので、今宵は身祝いの席だ。まあこころよくすごしてくれ。——美矢、酌をせぬか」

どうなるかと成行きを気づかって、固くなっていた美矢は、ほっとして銚子を取りあげた。

「溝淵さま、いかがでございます」

しかし、いい出したら中途で妥協のできる半助ではなかった。

「矢矧氏の話はよくわかるが、拙者はなにも多賀と腕を争おうというのが目的ではないのだ。ただ拙者にはたしかに矢が払い落せる自信が持てる気がするので、一度多賀の矢面へ立ってためしてみたいのだ。それでないと、今いったことが水掛け論になってしまう。迷惑でも同席の諸兄に見分役として立合って貰いたいな」

「しかし溝淵、それは命がけだぞ」

源一郎は眉をひそめた。手持ち無沙汰の美矢は、いたたまらなくなって、つと席を立って行った。

「武士が士道のために命を落すのは本懐だ。万一払い損じて射殺されても、もとより拙者に異存はない。多賀には決して迷惑はかけぬ。しかとここで誓うから、是非見分してくれ」

そうまでいわれると、酒気も手伝って、小弥太はつい半助の傲岸な態度が面憎くなり、

「よろしい、望みとあれば明朝、貴公の一命を申受けよう。きっと異存はないな」

と、殺気立ってしまった。

「ない。場所は柳の馬場がよかろう、寅刻半までに支度をして待っている」

半助は冷やかにいいきった。

「承知した。矢矧氏、方々も、御迷惑ながら見分を願い申す」

「うむ、行こう」

せっかくの酒席を乱されて、むらむらする不快を抑えながら、源一郎はきっぱりと承諾したので、他の者もいやとはいえなかった。

客はきまずくなった席をそのまま立つわけにも行かず、にがい酒をのみつづけた。席をはずした美矢は、二度と出てはこなかった。ただ溝淵半助だけが、けろりと談笑しながら痛飲するのが虚勢をはっているようにも、又本当に自信のあるようにもみえて、人々の心をいよいよ重くするばかりであった。

三

日の出前の空は紺碧に晴れわたって、馬場の青草はしっとり朝露にぬれていた。野末の

木々にはまだ狭霧が淡くただよっていた。

思い思いの心で一夜をあかした六人は、ほとんど同時に落合ったが、だれも口かずはきかなかった。

「じゃ、始めよう」

道場着に小倉の袴を着けて、木剣を携えてきた半助だけがいよいよ愉快な遊戯にでもかかるように、ほがらかに五人の顔をみまわした。

「うむ、やれ」

どこまで強気なやつだろうと思いながら、源一郎がうなずいた。

昨夜から、心ごころに何度もえがいていた最後の場面へせっぱくして、一瞬朝風をほおにつめたく感じながら、四人は一様に緊張した顔をあかくして、露をふんで行く半助を見送った。

小弥太は黙々として弓から袋をとり、弦をはって、白羽の矢を一筋もちそえた。

「いいかあ」

二十間ばかりはなれて、半助はくるりと振り向きながら聞いた。小弥太は右手をあげて、大きくうなずいてみせた。そして、見分の人々にも目礼をすると、片肌をぬぎ、矢をつがえて、きっと矢頃をはかった。白んだ顔はしているが、水のようにおちついている。

「いいぞう」

こっちのようすをみて叫んだ半助が、ぴたりと木剣を青眼にかまえた。一同は見ていられ

ないような気がして思わず喘いだ。

小弥太は悠々と打ち起して、十分にひきしぼる。ぱッと弦がなったとみると、白い矢羽が一線にはしって、とたんに、

「えい」

みごと半助はその矢を右へはらい落していた。

「ううむ」

一同は瞬間ほっとして、半助の手練に感歎するより、自分たちがすくわれたという気持を大きくかんじた。

試合はおわったのだ。

「みごとだったな」

人々は、うちおとした矢をもってにこにこしながらかえってくる半助を二三間迎えるようにしていった。

源一郎は、黙々として弦をはずし、弓を袋へおさめている小弥太をじっとながめて、なにかしら胸の熱くなるのをかんじたが、だまって半助のほうへちかよって行った。

「――こいつがまっすぐ、胸へとんできたんだ。あぶないところだった」

半助は鏃から二三寸のところで二つにおれている矢を人々にしめして、あは、は、と笑っていた。

「おどろいた早業だ」

人々が感心すると、
「命がけだからな」
と、半助はおおげさにいって、
「多賀、拙者が勝ったぞ」
と、磊落に声をかけた。
「うむ、貴公の強気にはかなわん」
小弥太が案外こだわらずにこたえたので、人々はふたたび愁眉をひらいた。

四

「多賀の弓半助の剣に及ばず」
といううわさが、たちまち藩中の評判になって、小弥太が君前へ一筋の矢を持って出たほこりは、いつか武士としての不覚であるという取沙汰にかえられた。
間もなく小弥太はまた、半助が美矢を妻にもらいうけたいと、源一郎に申入れたともきいて、
「ありそうなことだ」
と、一人淋しく笑った。
小弥太は御用以外に、外出をしないように心がけていた。
「どうした、すこしも顔をみせんではないか」

二三日たって、城中で行きあったとき、源一郎はこう親しみぶかく声をかけた。
「うむ、しばらく謹慎しよう」
「そうか。じつはあのことで、おれも藤田の親爺に、えらく油をしぼられたぞ」
「そういえば――」
小弥太はうっかり半助の縁談を聞いてみようとして、はっとことばをきった。
「なんだ」
「いや、いずれまた――」
用ありげにいそいでそのまま別れたが、小弥太は一人で頬のほてるのを感じた。
弓試合に関係のある六人が、ふいに松平侯の御前へよびだされたのは、その翌日であった。
「面白い試合をいたしたそうだな」
侯はなにげなくきり出された。
「はッ」
真意を解しかねて、一同が平伏すると、
「あぶない遊びは、以後無用にいたせ、誰が良い、誰がわるいとは申さぬ。武士は命を大切にするものぞ」
と、しずかにさとされた。
「おそれいりましてございます」

一同は一も二もなく恐縮してしまった。すると、
「おそれながら」
と、半助が少し頭をあげた。
「なんじゃ、申してみい」
「他の者はしらず、私は遊びとはぞんじておりませぬ。武道のために、兵法の力をこころみましたまでで、上よりお叱りをうけようと思いもよりませんでした」
ほめてくれるのが本当だというふうにきこえたので、侯は少し顔色をかえた。
「好んで危うきに身をおくことが武道と申すか」
しかし、半助は怯まなかった。
「御ことばではございますが、手前幼少より刀法を学びまして、少しく自信がございます。過日の試みほどのことはべつにあぶないとはぞんじませぬ」
「溝渕、ひかえい、御前であるぞ」
たまりかねて源一郎が叱った。
「いや、武道のために立ったを、遊びと御意遊ばされては――」
「だまれだまれ、矢はたてをもって防げば足る。一筋くらいの矢をはらい落したとて、なんのてがらになる。さような不心得者に用はない、ひまをつかわすから立て」
侯は憤然として座を立った。

五

しかし、憤慨したのは侯ばかりではなく、あくまで強情な半助も、よほど心外だったとみえ、
「当藩ともに武を談ずるにたらず」
と、家の壁に大書して、勝手に城下をたちのいてしまった。
「その壁に、この矢が突っ立ててございました」
御小家うけとりの役人が、すぐに引返して過日のおれた白羽の矢をしめしながらつげたので、侯は烈火のごとく激怒され、
「まだ遠くへはまいるまい、誰かある、半助を追討ちにせい」
と、叫んだ。
が、半助は知られた腕達者である。誰も言下に立つものはなかったが、
「その御役目、手前一人におまかせくだされば、冥加しごくにございます」
と、覚悟のいろをうかべて小弥太が平伏した。
「なに、そのほう一人でいたすか」
「はっ、みごと仕ります」
侯はちょっと考えたが、
「ゆるす、きっと取り逃がすな」
と、はげました。

小弥太は手なれの強弓に、白羽の矢一筋もちそえると、駿馬にまたがって逸散に城を出た。

「この間の敵をうつつもりだな。だが、一度あれで失敗しているんだからな」

人々は不安の目で、小弥太を見送った。

城下を出はずれると、白い街道が松並木の間をぬって江戸へつづいていた。もちろん、半助は江戸をこころざしたにちがいない。

ひるさがりの街道には、ちらちらと旅人が往来していたが、砂煙を上げて疾駆してくるものものしい騎馬をみると、いずれも道をよけて、あきれ顔に見送っていた。

勝沢村をすぎるころ、果たして武者修行姿の半助が、村ざかいの流れにかかった土橋をわたるのがみえた。

「おうい」

さけぶまでもなく、半助はただならぬ蹄の音をきくと、それと察して不敵にも立ちどまった。

「追討ちの上意だ、半助、かくごせい」

小弥太は二十間ばかり手前で馬を止めて、馬上から叫んだ。

「なに、それで貴公、性もこりもなく、また弓をかつぎ出したのか。御苦労だな」

半助はにやりと冷笑した。小弥太の弓には自信がある。しかも持っているのは大胆千万にもやはり一筋だ。それさえ打ち落せば、剣では問題になる相手ではないと、思ったのである。

「だまれ、過日とは少しちがうぞ」

「あは、は、俺のほうもちがうぞ。今度射損じると、貴公の命がないからな、こい」

半助は一刀をぬいて、土橋の上に傲然と身がまえた。こやつを討って堂々と立ち退くことは、不明の君主へのみせしめにもなり、分別くさく縁談に即答しなかった源一郎へのよい面当てだとも思った。

遠くはなれて、この思いがけぬ場面を旅人たちがおずおずとながめている。

馬上の小弥太は、ただ一筋の矢をぐっとひきしぼって、

「くるな」

と、半助が心がまえに緊張したとたん、しごくむぞうさにきってはなたれた白羽がカッと目にせまって、半助が払うより早く、

「あッ、ちがう」

と、恐怖を感じると同時に、彼はううむと脳乱して、あっけなく土橋の上へのけぞっていた。

明るい夏のひざしに、半助の胸ふかく射込んだ白羽が、尾花のように光ってみえた。

「どうして、二度目にはよけそんじたのでしょうね」

ほどなく、五十石加増された小弥太に嫁ぐはずの美矢が、ある日思い出したように兄にきいた。

「なアに、はじめの時には、小弥太の奴、名をすてて、半助を生かそうとしたのさ、一番弱い弓をつかって、わざと射外したらしいんだ。小弥太らしい心づかいさ」

と、源一郎はこたえた。そして、幸福そうに晴着をぬっている妹をじっとみつめながら、

「美矢、もし半助が、おとなしく多賀の好意をうけていれば、小弥太はお前まで半助にゆずる気だったかもしれないぜ、すくなくとも自分から、お前をくれとはいいだせなかったろうな。——つまり半助は自分の強気にたおれたんだ」

といい足した。

「じゃ、お兄様は、私を溝淵さまにやるおつもりがありましたの」

「やったかもしれないな、あんな試合さえなければ。——強い男にひきずられるからな。お前はどうだったね」

「多賀さまは、お弱いのでしょうか」

「——」

源一郎はちょっと驚いて、妹をみた。そして、

「いや、弱いというのではないよ」

と、急いでいいきったが、ぶじに半助が生きていたら、自分はまだどっちへ美矢をやるか迷っていたろうし、あるいは妹の意志を無視したかもしれないと思うと、妙にほっとしたような気もするのであった。

開発奉行

困った男

「彦市、言葉がすぎるぞ、貴様」

短気で一徹者の日向文之進が、不意に食ってかかってきたのだ。どう誤解したか、すっかり顔色が変っている。もっとも、藩でも思慮のある人物として知られた父親に似ず、日ごろからよく顔色を変えたがる癖はあるが、こんなことは珍しい。

「なんだ、文さん、いきなり?」

新谷彦市は穏やかな顔を向けた。

朝の溜の間、祥雲寺潟埋立事業の話が出ていたのだ。立案者である文之進の父日向弥左衛門が失敗して、申訳のため切腹した直後ではあり、藩としても続行すべきか、中止したものか、議論が二つに分れているだけに、よく出る話題だったのである。

「それでなくてさえ近年財政が逼迫しているのだ。見込みの立たない事業とわかった以上、この上金を注ぎこむのは無駄だ」

というのが、その席に居合わせた多数のものの意見だった。

「いや、難事業であるに違いないが、このまま沙汰止みになるのは惜しいと思う。年々財政の逼迫してゆくのは、ひとりわが藩ばかりではなく時勢だ。その財政を救う道は、産業を起すか、新田を開拓するか、二途よりないのだから、一時金はかかってもぜひ続行すべきだ」

彦市一人が反対した。

「そりゃ理窟はそうに違いないが、見込みの立たぬ仕事をつづけたって仕方がないではないか。それとも貴公、あとを引受けてやれる自信があるのか」

むろんまだ藩政などに携わったことのない若侍同士だから、どんな口でもきける。つい水掛論に花が咲いて、

「いや、拙者にやれる、やれぬという問題ではない。一人二人が失敗したからといって、できないとここできめてしまうのは早計だというのだ。そのできないと思う一同の心が物事をできなくしてしまうのだ。人物を得て、人の心さえ一致すれば、必ずやれる方法はあると思う」

彦市が持論をもちだした時、たちまちに文之進が喚き出したのだ。

「わしは気に入らん。貴様のいうことを聞いていると、まるで親父が失敗したのは、やり方がまずいからだといわぬばかりではないか。貴様の口からそんな言葉をきくのは心外だ」

なるほど、そうとったのかと彦市はちょっと意外だった。この男は父弥左衛門の人物を信頼するあまり、その父でさえ失敗した祥雲寺潟埋立事業は誰がやっても不可能なものと思いこんでいるらしい。腕前は藩中で一二を争う文之進だが、思慮は案外単純なのだ。

「文さん、そりゃ誤解だ。拙者はべつに小父さんのやり方を云々しているのではない」

じつはその弥左衛門に見込まれて、文之進の妹千恵を貰うことになっている彦市である。

「卑怯だぞ、新谷、貴公今たしかに、一人や二人失敗したからといってと、口にしたばかりではないか。失敗とは誰のことだったのだ。弥左衛門殿のことではないというのか？」

矢島勝馬が意地悪く側から口を出した。出したがる理由のある奴で、この時とばかり文之進をけしかける気なのだろう。

「むろん弥左衛門殿は責任を感じたから、立派に自決したのではないか」

「それ見ろ。しかもほかに何か方法があるようなことを口にする以上、やっぱり貴公弥左衛門殿のとった道を誹謗しているのではないか」

「誹謗ではない。むしろ先人の失敗した原因を極め、その遺した志を継いでこれを完成させることは、われわれ若い者の義務であり、先人への礼だと思う」

「生意気なことをいうな！」

縁につながるだけに、文之進は笠にかかってくる。

「わしはその貴様の分別面が癪にさわるのだ。それほど貴様自信があるのなら、口先だけでなく、見事やって見ろ」

こうなるともう議論ではない。単なる感情だ。馬鹿くさくなったので、

「文さん、そんな無理をいうもんじゃない。重役をさし置いて、今ここで我々が、さあやって見ろ、よしやって見せると力んで見たところで仕方がないものな」

彦市はなだめるようにわらった。

「そりゃそうだ。問題が少し大き過ぎたよ」

形勢穏やかならずと見てとって、ほかの者は一緒に笑ってしまおうとしたが、

「なるほど、切腹ものだからな。口は調法なものだ」

勝馬が執拗に絡んできたのである。

「事を好むような言動は止せ」

つい彦市はむっとしてしまった。

「貴公、先刻からなにかしきりに拙者に含むところがあるような物のいい方をするが、これは個人の感情の問題ではない。むろん、君命とあれば拙者はいつでも微力を尽す覚悟でいる。むしろ、分に過ぎたいい分だが、このままあの開発事業がお沙汰止みになるようなことがあったら、それこそ舅弥左衛門殿の切腹が犬死になるとひそかに惧れているのだ」

「犬死」

言葉尻をつかんで文之進がかっと怒鳴った。

「きさま、親父の、親父の死屍に鞭打つ気だな」

「違う、文さん。わからんかなあ、本来ならあんたこそ小父さんの意志を継いで——」

「ええいうな。起てッ、許さぬ」

激昂して躍りかかろうとするのを、

「止せ、日向。場所柄を忘れたか」

「なんだ、相手は彦市ではないか」

一同総立ちになって、前後から抱き止めた。抱き止められて身もがきしながら、

「放せ、くそッ！　親父のことを——」

文之進はぼろぼろ涙をこぼしている。

(困った男だな)

彦市は黙って座を外してしまった。

君命

間もなく文之進は病気といい立てて、勝手に退出してしまったそうである。

「日向も親父が死んでから、全く人間が変ったな」

「あれではしょうがない」

あとで人々が噂しているのを耳にして、彦市はやっぱり淋しかった。

事実、文之進はこのごろすっかり変ってしまったのである。

「武芸は侍の表芸だ」

それが自慢であれほど精励していた道場がよいも、父の死後はばったり止め、朝からでも酒を飲み出すそうで、自然出仕も怠り勝ちになる。無責任な人の口は、頭の押え手がなくなったからだと簡単に片づけているが、――そうではない、ああいう一本気な男だから、父の突然の死に大きな打撃を受けているのだ。そのうちにはもとの文之進にかえるだろうと、彦市は考えていたのだ。

が、弥左衛門が切腹してから、すでに三月になる。

「気が変になったのではないでしょうか。お酒を飲んでいるかと思うと、急に部屋に閉じ籠って一日じゅう出てこなかったり、――それになんですか大層怒りっぽくなって」

見かねるか、我慢強い千恵でさえこのごろでは、忠告してくれといわぬばかりに訴えるのだ。

「いや、もう少し黙って見ていらっしゃい。文さんは小父さん思いだったからな。なかなか諦めきれないのだ」

「そうでしょうか。――では、こうしていられる私は、兄より情が薄いんですのね」

「そんなことはない。千恵さんには拙者があるから、我慢がしやすいんだ。そうでしょう」

「まあ」

千恵は恥らいながらも、それで慰められたようにそっとわらっていたが、――今日の文之進のようでは、もう黙って抛って置けない。あれでは考えていることも見当違いだし、することも常軌を逸している。

それに、これは嫉妬がましくとられる惧れがあるので、千恵にも訊かず、千恵もいおうとはしないのだが、最近矢島勝馬が急に文之進に接近し出したことだ。勝馬は縹緻好みで、一度熱心に千恵を望み、

「人物が面白くない」

といって、弥左衛門からそれとなく断わられた男である。

大体、勝馬の父矢島理右衛門は、同じ藩政に携わっていても算盤珠を弾くこと以外に能がなく、常に意見を進言し、進んで事業に当ろうとする弥左衛門の手腕を惧れ、名声を嫉んで、事ごとに反対の立場に立ってきた男だ。こんど弥左衛門が自決して、一番喜びもし安心もしたのは理右衛門だろうとさえいわれているくらいである。その伜の勝馬だ。勝馬が文之進に近づきたがる理由はわかるが、――平気で勝馬を引入れて、よく一緒に酒を飲むという文之進の真意はどこにあるのだろう。

しかも、一番相談相手になるべき自分を、妙に煙ったがって避けている風さえ見えるのだ。

(勝馬のことはとにかく、ああいう考え違いをしているのでは、いやでも一度忠告しなくてはならぬ。殿の御耳に入っては、日向の家名にも関わることだ)

それが生前自分を信用していてくれた故人への礼でもある。早いほうがいい。もうやがて退出の時刻だろうから、帰りに立寄って見よう。――彦市がそう腹をきめている時も時、

「殿が御居間でお召しでございます」

と、取次いできた。

(遅かったかな)

彦市ははっとした。文之進の行状をすでに誰かお耳に入れたに違いない。それとも今朝の事だろうか。

「お召しでございましたそうで――」

「うむ」

主君松平主膳正(しゅぜんのしょう)は、居間で晩春の庭を眺めながら静かに茶を喫(きっ)していた。年齢五十を過ぎて、見るからに長者といいたい穏やかな風貌(ふうぼう)である。あたりには誰もいない。その誰もいないのが、余計重大さを感じさせる。

(ひそかに御問い糺(ただ)しになるのだ)

彦市が肚を据(す)えていると、

「その方はたしか、弥左衛門の娘と縁組するはずであったな」

果たして、御問い糺しである。

「はっ」

「何歳になるのう」

「当年二十七歳に相成ります」

「あ、そう窮屈にせんでもよい。面(おもて)を上げなさい」

「はっ」

すこし様子がちがうので、恐る恐る顔を上げると、

「その方今朝なにか、祥雲寺潟開発のことについて意見を述べていたそうだな」

じっとこっちを見詰めている。

「御場所柄(がら)も弁(わきま)えず不調法の段」

「いや、咎(とが)め立てするのではない。その折り、できないと思う心が物事をできなくするとか申したそうだが」

「恐れ入ります。新田開発は後世までの国の富、せっかくの御事業が中止になりますのは、手前いかにも残念に存じまして」

「うむ」

主膳正はちらと庭の若葉へ目をやったが、急に向き直って膝を正した。

「改めてその方に申しつけよう。その心があれば必ずできるであろう」

「あ、お言葉ではございますが――」

意外だったのである。相当の人に御沙汰が下れば、その時こそ自分から進んでたとえ土担(かつ)ぎでも願い出る覚悟ではいたが――。

「なにぶん、手前はまだ若年者のこと」

「いやいや、その若い力に希望をかけるのじゃ。弥左衛門の素志を継いで完成して見なさい」

「はっ」

「弥左衛門はおのれが建言してかかった事業ゆえ、見込み違いの入費や期日に迫られて、自

決したのであろう。惜しい男を死なせた」

「そのお言葉を、弥左衛門儀草葉の蔭にて伺いましたら」

彦市はぐっと胸が迫ってきた。

「うむ、なにごとも子孫へ遺す現世の苦労じゃ。弥左衛門の仕事の跡をよく尋ねて、見込みをつけるがよい」

「はっ、彦市身命にかえまして」

男の死場所だ、ましてこの君のためなら、たとえ祥雲寺潟の人柱に身を埋めてもと、若い彦市は感激せずにはいられなかった。

果たし状

身に余る御内意である。あとでお盃など賜って夜になったし、それと聞いてともに喜んでくれる文之進とも思われぬ。尋ねるのは改めてと彦市が帰宅すると、意外にも千恵が居間に待ち受けていた。

「お帰り遊ばしませ」

蒼い顔をじっと伏せたまま上げない。

「どうした、千恵さん」

思わぬ事から長びいている婚約で、もう比較的自由に顔を合わせている間柄だが、夜まで

一人で帰りを待っていたのははじめてだ。しかも、心を固く閉じているような、いつもと違う他人行儀の物腰である。

「私、今夜は兄の、兄の使いでまいりました」

そういえばちゃんと振袖を着ている。

「ほう、改まってなんです」

「どうぞ。これを――」

文箱だ。

「手紙ですね。失礼します」

妙に気になるので、すぐに封を解いて開くと、果たして、

――満座の中にて亡父の死屍を鞭打つ如く誹謗されては子として此儘黙し難く、討つ討たれるは天に任かせて果たし合いの決意仕り候条、明暮六つまでに亡父無念の地祥雲寺潟まで出張相成度候。

酒を飲んで書きなぐったらしく、乱暴な果たし状だ。

（馬鹿な奴！）

彦市は呆気にとられたが、その果たし状を繰返して見ているうちに、急に激しい憤りさえ感じてきた。なにが、子として此儘黙し難くだ。亡父の遺志を継ごうともせず、碌々として酒に性根を奪われている自分こそ、よっぽど子として黙し難い奴ではないか。第一、この場合真っ先に解決しなくてはならない千恵との婚約には一言も触れていない。わずかな腕前に

慢心(まんしん)して、なんといううつけ者だろう。
「千恵さん、この手紙のことは文さんに聞いてきたのだろうな」
「はい」
千恵はうつむいたままわずかに頷(うなず)いた。先刻からまだ一度も顔を上げないのである。
「そうか。文さんはなんと話したのだ」
「あの、千恵は兄につこうと、新谷につこうと勝手――」
「なにッ」
「新谷につきたければ、もうこのまま帰るなと」
「それで千恵さん、振袖を着てきたのか」
「はい」
「では、もう帰らない覚悟で」
「父が、父が、千恵にきめてくれました家ですもの、明日、ここで死なせて頂(いただ)こうと、用意してまいりました」
ともすればこみ上げてくる嗚咽(おえつ)を必死に耐えているのだろう。重たげにうなだれた高島田が、明るい灯かげに濡れぬれと震えて、膝に重ねた白い指が目にいたいたしい。
「そうか」
なるほど、それより仕方がなかったろう。が、そこへ覚悟を落着くまで、どんなに一人で懊悩(おうのう)したことか、思えば不憫(ふびん)である。恐らく父の死後、あの兄に仕(つか)えて千恵には一日として

苦労のない日はなかったろうに――。
「あの、いけなかったでございましょうか」
「いけないとは」
「こちらで御迷惑でしたら、私、ひと足お先へ――」
「なにをいうんだ、千恵さん。小父さんの事さえなければ、あなたはとっくにもうここへきている女ではないか」
「――」
「祝言(しゅうげん)はしなくても、千恵さんは彦市の妻だ。現世も、来世も」
「そ、それを伺って――」
千恵が泣き伏した。さすがに召使達を憚(はば)かって声は立てなかったが、両の振袖にひしと顔を埋めて、身も世もなく咽(むせ)び入っている。
(現世も、来世も、――だが、ついに名ばかりの妻に終るのだ)
泣きたいだけ泣くがいい。彦市はそっと目をそむけた。
それでなくてさえ、家を棄て、恋を忘れ、男一生の命を賭(か)けるほどの仕事が待っているのだ。完成しなければ、むろん生きてはいない。馬鹿者を相手の果たし合いなどは、それからのことだ。
「千恵さん、いま返事を書くから、届(とど)けて貰わねばならぬ」
「――」

千恵はふと泣き濡れた目に鈴を張って、いぶかるようにはじめて彦市を見た。もう他人行儀の跡方もなく、深沈と愛情をたたえた綺麗な目である。
「千恵さん、少し窶れたな」
「あら」
みつめられて、急に赧くなる。
「じつは、今日拙者、小父さんの遺した仕事を継ぐようにと、殿より御内命を受けました」
「承わっております」
「え」
「あの、先ほど、矢島様がお見えになって、兄に、――お怒りにならないで下さいませ」
「なにを今さら――」
彦市は苦笑した。それ以上怒ることはなにもないと思ったのである。
「でも、もし御気を悪くなすっては、私、悲しゅうございますもの」
千恵はいい渋って、困っている。
「ふふふ、あなたの良人はそれほど腹の浅い男ではありません」
「では、申し上げますけれど、――なんですか、あの高慢男に御内命が下るように取計らった。いずれ腹切りものだろうと」
「なにッ」
今誓ったばかりの口の下から、我にもなく顔色が変った。

「まあ、ですから私――」
「いや、怒りはしない、それで」
「もうそれだけでございます。兄の機嫌が悪いので矢島様はすぐお帰りになりましたし、兄はそれからこの手紙を書いたのですわ」
「――」
そうか勝馬が父理右衛門に働きかけて、自分を推挙させたのか。むろん自分の失敗を見越して、目的は千恵にあるのだ。浅ましい奴！　それと聞いた見当違いの文之進は、万一成功されては亡父の恥と、あわてて果たし状をつける気になったに違いない。
いずれにしても私情のために人を陥れようとする小人ども、許せぬ！　彦市はいっそ叩っ斬ってしまいたいような激しい憎悪を感じたが、
（いや、そんな小事に拘泥している時ではない。事情はどうあろうと、彦市ごときをお見出し下された主君のお目鑑に対しても、必ず大任を果たさなければならないのだ――。そうだ、この千恵のためにも。くそッ、やるぞ！）
その千恵は彦市の覆うべくもないその怒気に、ただおろおろと袖を抱いて小さくなっていた。
「悪かった、千恵さん。あなたの良人はまだ修業が足らん。わらって下さい」
「いいえ、余計なことを。私が慎しみもなくお耳に――」
「いや、お蔭ですっかり腹が据わったのです。女夫の間にはその余計な慎しみはないほう

がいいのかも知れない」
冷静を取戻して、彦市は笑った。
「でも、そういう時が、千恵にもまいるでしょうか。——もう覚悟はしておりますけれど」
「どんな覚悟」
「おそばへまいれるのは、私、魂だけかも知れないと思って」
「いや、希望を棄ててはいけない。死ぬまで彦市はその生きた魂を影身に、必ず小父さんの遺して行った仕事をやりとげて見せる。拙者を信じて待っていて下さい」
「いつまでも、私——」
千恵は淋しく落着いて、恥らいながらも今は捧げ切った熱いまなざしをひしと上げる。
——ほのかな処女の脂粉の香をこめて、しっとり澱む大気が肌に生暖かい晩春の夜であった。

開発奉行

——御申越状確と披見仕候え共、今日御主君様より御承知の祥雲寺潟開発の大任仰付けの御内命を蒙り、然る上は無事に御役目果たし候迄私の命にては無之、五年と日限を切って御書状の趣御猶予願上候。必ず御役目相果たし候上五年後の同月同日暮六つに貴宅まで参上仕るべく約束申上候。

彦市は返事を書いて、その夜立ち渋る千恵をようやくに理解させ、やっと文之進の許へ送

り帰した。文之進が承知しようが、すまいが、彦市にとっては問題でなかったのである。
（男の意地でも、この難事業をやり遂げるまでは、二度と城下の地を踏むまい。それも約束の五年までにだ）
彦市は覚悟の上にも覚悟を重ねた。
「——一藩のため、大きくは国のため、頼むぞ、彦市」
門出に、晴がましくも表書院で主膳正から、懇篤なお言葉に添えて形見の短刀まで頂戴した彦市は、感泣して即日、祥雲寺潟の開発奉行として番屋へ入った。
祥雲寺潟は新発田の城下を北へ二里半、日本海に面して東西十三町、南北十町余りの大沼である。大雨が降り続くと周囲の良田に水が溢れて泥が漲り、あるいは佃田が泥田と化して、その年の収穫を押し流してしまう。しかし、沃土であるから農民は水害を知りつつも田を作り、作っては水害を受けているという有様で、このためには祥雲寺潟埋立は是非やらなければならない事業だった。
番屋へ着いた彦市は、すぐに村々の重立った者を集め、役目の挨拶をして一同の助力を求めた。
「結構なことでございます。有難いことで」
百姓たちは喜んで振舞い酒をしたたかに馳走になり、勝手な気焔を上げて帰って行った。
が、少しもこれはと思うような意見は耳に残っていない。
番屋には弥左衛門の下についていた間瀬九郎右衛門という老

練そうな下役がある。彦市はこれと膝を交えて、弥左衛門のやった仕事について説明を求め、その失敗の原因を糺して見た。

「——なにぶん、河口つまり排水口でございますな、これが海から吹上げて来る砂のためにすぐ塞がり、思うように水が排けないものですから、なんともどうも」

やはり煮え切らない。

数日たたぬうちに彦市は、意気込んでいるのは自分一人で、ほかの者は誰もこの仕事に乗り気になっていないことがわかった。

この気風は人足にまで及んでいる。いや、むしろ人足の方に著るしいのだ。

彦市は仕事始めとして、第一に、もう一本川を掘ること、砂止めのために松を十万本移植すること、干潟になった渚から埋めて行くこと、この三つに着手したのだが、前半の失敗を経験している人足どもは、しかも村から徴発した課役人足だから、

「どうせまた中止になるんだから」

「まあ、役人の見ている前じゃ仕方がないけれどもよ」

たかをくくって、体だけは動かしているが、仕事に少しも誠意がない。

(まずこの人の心から改めてかからねばならん。仕事はそれからだ)

しかし、無知な人間に理窟をいったところでわからぬ。笞はいよいよ人の心を頑固にするだろう。彦市はその手段に一人懊悩した。九郎右衛門に相談したところで、この老練な下役からして、いいつけられた仕事だけは手際よく片づけてくれるが、心から若い奉行に協力し

てくれようという熱意がないのだ。

(なるほど、いうことは易いが、行うことは難かしい)

彦市は弥左衛門が自決した番屋の暗い居間に寝ながら、しみじみと考えさせられた。

「旦那様、日向文之進様が殿様に願い出て、剣術の修業に出たそうですよ」

ある日、城下へ用達しに出た中間が帰ってきて告げた。

「そうか」

千恵はどうしたろう、それがふっと気にならぬのでもなかったが、文之進などにはもうなんの興味も持てぬ。

「なんでも旦那様がこっちへ移った翌日、足もとから鳥の立つように出かけたそうです」

「うむ」

彦市は番屋の窓から、初夏の明るい夕陽に輝く祥雲寺潟の水を眺めながら、ふっと思い当ることがあった。——人一人を斬るために修業の旅に出るなどと、どこまでも馬鹿げた文之進の単純さだが、しかし身を以って事に当るその意気、教えられるところがあるのではないだろうか！

「——」

翌日から、彦市は野良着に脇差を一本差し、鍬をにぎって人足の中へ飛びこんで行った。

若い奉行の物好きとでも思ったのだろう、九郎右衛門が筆を持ったまま、冷やかに見送っていた。

暴風雨の夜

自分が飛び込んで行って、彦市ははじめて人足の中にも本気で働いている人間のあるのを見た。全く同志を得たような喜びである。彦市は惜しみなく褒美の金を与えた。

「働けば金になる」

それが無智な百姓の気を動かしてきた。早くもその動きを見てとった彦市は、こんどは単に喜びの代償としてではなく、手段としてもどしどし金を与えた。

身を以って働くことと、よく金を費うことが、

「若いがあの人は切れる」

いつの間にかすっかり人足を征服して行った。彦市自身も毎日の労働から、親しく人足に触れている生活から、一つ一つ生きた学問を学んでいたのである。

四月から開発に着手して、五月、六月、七月、やっと人の和を得た。仕事も端緒についた。が、そこへまた大きな試練がやってきたのである。

八月の下旬から降り続く大雨に、かねてかくあるべきを予想して危ない惧れのあるところへは十分土俵を積んで置いたのだが、その一角が崩れて、祥雲寺潟は例年の通り大氾濫を起したのだ。むろん緒口についた工事はあとかたもなく、付近の水田も大きな被害をうけた。

みごと出鼻を挫かれた彦市は、その惨憺たる洪水を眺めて、危うくすべてを絶望するところであった。

(馬鹿、こんな事で負けてどうする。命をかけた仕事ではないか)

氾濫は土俵をもっと高く、より丈夫にすれば防げるのだ。彦市は再び起って、黙々として働き出した。

「駄目なこった。いくらやっても来年の雨にまた元も子もなくなる」

ぶつぶついっていた百姓が、倦まず撓まぬ彦市の努力に、自然と協力してきた。排水口もできたし、砂止の松もどんどん移植された。干潟になった渚から次第に埋立が行われる。工事は大いに進んだ。心の一致と、人の努力で——。

(これで今年氾濫さえしなければもう大丈夫だ)

彦市は用意を怠らなかった。

そして翌年の八月、例年のごとく暴風雨まじりの大雨が続き出したのである。

「昼夜交替で、土俵の見張りを怠るな。少しでも危険と見たら鐘を打て、こんどだけは俺の命に背いた奴は容赦なく叩っ斬るぞ!」

彦市も必死だったが、百姓も一生懸命だった。氾濫すれば己れの田畑が流されるのである。各所に土俵を用意して、いざとなったらすぐ運べるように待機している人数、五人一組となって数組ずつ、一刻交替に増水を見張る者、みんな不眠不休だ。

二日、三日、五日、多少強弱はあったが、よくこれだけ降れるものだと思うほど、毎日の大雨だった。祥雲寺潟の水量は刻々に土俵を這い上って来る。去年より一尺高く、幅も相当

ひろげてあるので、幸いまだ一カ所も危険と見えるところはないが、油断はできぬ。

その夜——。

「お出かけですか？」

土間に下りて、野良着に大小という妙な姿で、黙々と蓑笠をつけている彦市に、九郎右衛門が声をかけた。冷たいこの男の事務的な態度のうちにも、このごろはどこか若い奉行を労るという風なところが見えてきた。

「ひと廻りしてくる。ひどい雨のようだ」

風さえ加わって、暗い番屋は滝に打たれているような音を立てていた。こんな中でも、こおろぎの鳴く声だけは胸にしみ入るように、別に聞えるから不思議だ。

「暴風雨気味ですな。これが最後のひと荒れで、明朝あたりから秋空が見えるでしょう」

「そうだといいが、——急用ができたら、鐘を二つ打ってくれるように」

彦市は一人、暗い雨の中へ出た。夜明けまで、水の様子、人々の廻り具合、配置状態を見て歩くのである。これで五晩目だ。

（なにごともないように）

ひたすらに神に祈りたいような心である。

ちょうど番屋と第一の土俵小屋の中間、疎林に添った渚へかかると、林の中で妙にうごめいている人影が目についた。どの組かがひと休みしているのかなと思ったが、それにしては話声が聞えぬ。百姓は大抵高話をして歩いているものだ。

「その組は何番か！」

怪しいと思ったから彦市、つかつかと疎林へ入るなり突然声をかけた。

「へえ」

はっと立ちすくむ気はい。人数も七八人だ。第一、「へえ」という返辞からしておかしい。

「何番か」

「へえ、七番でございます」

「黙れッ。廻り組に番号はない。きさまたちは何者だ！」

「あっ」

「やっちまえ」

人数がばらばらッと開いて、一度に鋤鍬が殺到する。

「馬鹿ッ」

蓑笠を刎ねのけた彦市、たっと真っ先の奴を抜討ちに斬って、返す一刀を右へ横薙ぎ、

——ごうッ、と風雨が疎林に渦を捲く。

「なんだなんだ、お前ら！」

「やあ、喧嘩だあ」

喚きながら一組五人が駈けつけてきた。

「一人も逃すな！　堤を破りにきた曲者だ！」

彦市が一方へ斬り抜けながら大音に叫ぶ。

「やあ、番屋の旦那の声だ」
聞き馴れている声だから、忽ち一同が躍起となって打ってかかった。勝敗は一瞬にして決してしまった。敵は喧嘩馴れていると見えて、思わぬ加勢に逃げ足早く、八方へ散ってしまったのである。
「追うな、追うな」
彦市が勢い立つ一同を止めた。
「あいつら、なんでがしょうね、旦那」
「さあ、俺に恨みでもある奴に、金ずくで頼まれたのだろう。たしか三人ばかり手を負わしていたから、あとで調べればわかることだ」
「太てえ野郎だな。そういえば夕方、見馴れねえ六部が、うろうろしていたが、やつでねえだろうか」
一人が妙なことをいい出す。
「馬鹿あぬかせ。ありゃへんてこ坊主だ、沼ん中へ河ぁ作れ、河ぁ作りゃ早いって、沼ん中へ河が作れるかよ」
「あははは、坊主の頭結えっていうんと同じだな」
無駄話をさせておくと際限がなさそうなので、
「今のようなこともある。お前たち、必ず油断なく持ち場を廻ってくれよ」
彦市は濡れびたった蓑笠を拾って、さっさと歩き出した。

（中間訛の奴が交っていたからには、恐らく勝馬の仕事だろう）
或は、その憎むべき色餓鬼に、苦しめられているのではあるまいかと思われる千恵の白い顔を、一瞬愛しく胸に抱きしめながら――。

最後の試煉

九郎右衛門の予言したとおり、翌朝から雨はけろりと上って、洗われたような秋空が仰がれた。
幾年ぶりかで、ついに水に勝ったのだ。村人の喜びと感謝は、彦市をすっかり神様あつかいにしてしまった。
が、それに満足はしていられない。彦市はようやく自信を得たので、課役人夫の外に日雇い人夫を加え、次第に工事を進めて行った。
むろんこれから先は単に月日の問題だと、彦市は信じていた。が、その信念が間もなく、あまりにも無残に打砕かれてしまったのである。
一定のところまでくると、祥雲寺潟は思うような排水が困難になるのだ。従って潟を干すことができぬ。干せなければこれ以上の埋立は不可能だ。弥左衛門が切腹した理由もここにあるらしい。
「お気づきになりましたか」

彦市の顔色を見てとって、九郎右衛門は気の毒そうにいった。

「うむ」

「弥左衛門様もここで行き詰まられました。なんとも方法がないのでございます」

「――」

「しかし、その方法がないと人足どもにわかりますと、せっかくあなたがここまで築いてきた人気が落ちます。気取られないように充分お気をつけにならないと」

「そうだ、気をつけることにしよう」

九郎右衛門の好意は有難いが、その方法がない以上いつまで人足どもをごまかして置いたところで仕方がないのだ。

（いよいよ切腹か）

覚悟して三日目、彦市が番屋へ昼食をしに帰ると、

「旦那さま、わかりました、わかりました」

待ちかねていた中間市造が、いきなり声をかけた。藁にもすがりたい今の彦市である。

「なに、わかった」

「へえ。あの晩の奴らあ、たしかに勝馬に違いありません。勝馬は昨夜死んだっていいますよ」

市造はそっと囁いた。

（なんの事だ、もっとも中間などに排水のことがわかるはずはなし、少しでも期待した俺の

ほうがよっぽどどうかしている）

彦市は苦笑した。

「なんでも、六部と喧嘩して斬られたんだって、自分ではいってたそうですがね。なあに、旦那様に斬られた傷に違いありません。あの大雨のころだっていいますから」

「そうか。とにかく斬られた傷が原因で死んだというのだな」

自業自得とはいえ、死んだと聞けばやはり哀れである。

（はてな、六部といえばあの晩、六部が沼の中へ河を作れとかいったそうだが――）

「九郎右衛門、沼の中へ河が作れるだろうか」

彦市は微笑いながら訊いた。

「無理でしょうな。坊主の頭は結えませんからな。――しかし、沼の中へ河筋が通れば、排水には便利でしょう」

若いから無茶なことを考える、それほどに苦労しているのだと、九郎右衛門は思った。

「なに、排水に便がある」

窶れて真っ黒になった彦市の目がぎろりと光った。

その年、沼の結氷期を待って、氷の上へ土俵を積み、河筋をつくる作業が進められた。土俵のところどころには柳の木が土固めのために植えられた。

翌年、雪解けのころに土俵は自然に沈んで、沼のなかに河筋ができた。果たしてそこから水が排けだしたのである。

工を起して五年目には七分通り沼は埋立てられ、完成の上は約百町歩(ちょうぶ)の新田ができるだろうと予想されるに至った。

(ここまでくれば、もう俺がいなくても、誰にも完成はできる)

彦市は満足だった。

約束の日

「九郎右衛門、俺はちょっと城下まで行ってくるから」

「お城下へ」

九郎右衛門は目をみはった。これまで再三主君がお召しになっても、手が放せませんからと、一度も応じなかった奉行である。このごろは土こそ担がなかったが、終日人足とともに暮し、人足には休日があっても、一日として彦市の姿が現場になかった日はない。

「あの若いのに、女遊び一つするでなく、家(うち)の大将はまるで石地蔵(いしじぞう)みたいな男だな」

「馬鹿ぬかすと承知しねえぞ。物わかりはいいし、情深くて、怒ったことのねえ、ああいう方を聖人さまというんだ」

人足の評判は素晴しかった。村の者からは神様のように思われている。次第に一藩の声望も厚く、——特に主膳正はなんといってもお召しに応じないので、酒肴(しゅこう)を届けただけでは気がすまず、わざわざ自分のほうから数度微行(びこう)されている。

その彦市が、自分から城下へ行ってくるといい出したのだから、九郎右衛門が意外に思ったのも無理はない。

「すぐ帰ってくる」

彦市はいつもの野良廻り姿に脇差だけ差して、気軽に番屋を出た。

五年前文之進と約束した日、四月十日であった。

何度か自然の力に叩きつけられて、絶望の底から起ち上がり、必死に闘い抜いてきた今の彦市にとっては、人間と人間の醜(みにく)い争いなど非常に小さく見えた。

(逢ってよく話せば、心の解けぬ筈はない。それでもわからなければ謝まるばかりだ。相手を生かし、おのれを生かす道なら、土下座(どげざ)したところで、天にも人にも恥じぬ)

もう彦市の胸にはなんの心配も、気苦労も残っていなかった。

面白いことには、五年の間の労働で顔も手足も真っ黒に焼け、姿さえ変っているので、城下へ入ってから二三知った顔に行き会ったのだが、先方では少しも気がつかない。誰にも邪魔(じゃま)をされる心配なく、日向の門前へくると、

「ほう」

彦市は目を丸くした。門扉が仰々(ぎょうぎょう)しく八文字に開いて、打水さえしてあるのである。

(さては待ち兼ねているな。あの男の好きそうなことだ)

頬笑(ほほえ)ましい気で玄関へかかる。

「頼うむ」

「あ、新谷様」
ついそこにいたらしく、千恵が走り出て両手を支えながら、じっと彦市を見上げた。振袖、高島田、五年前の夜使いにきたままの姿だ。薄化粧までして、見上げる目に一杯涙の露があふれている。
「よくひと目でわかりましたね。文さんは」
「あの、どうぞお上り下さいまして」
千恵は急いで涙を拭った。帯の間から懐剣の袋の赤い総がのぞくのは、五年前のとおり万一の時は自害と定めているのだろう。いかにも千恵らしい。
「失礼します」
通されたのは仏間だった、明々と仏壇に灯が上げてある。
「さし支えないでしょうね」
思い出深い弥左衛門の位牌のほうを目でさすと、
「どうぞ――」
千恵は会釈して、明け放した縁側近く慎ましやかに坐った。
彦市は香を炷いて合掌した。この人の遺した仕事を今七分通り成しとげたのである。有形無形にどれほどこの人から教えを受けているか、さすがに感慨が胸一ぱいに溢れる。
「文さんは？」
座に直った彦市は改めて千恵に訊いた。

「あの、まだ戻りません」
「戻らないって、旅から」
「ええ」
「するとこの段取りは」
「兄が旅立ちます時、今日の暮六つまでには帰るから、必ずこうして置けと」
「ほう」
彦市は黒い顔に微笑をうかべた。六つにはもう間もない、あの男のことだから、かっきりその時刻に飛び込んでくる膳立てかも知れぬと考えたのだ。
「千恵さん、長い間一人で留守番は淋しかったろう」
「――」
まだ明るい晩春の夕光を受けてじっと差しうつむく千恵は、今年二十四になったのだろうか、美しくもしっとりと落着いて、彦市には世にも好ましい姿である。
「わしもこの通り百姓になるまでには相当苦労したが、千恵さんの苦労も大きかったろうからな」
「お目出度うございます。お仕事も大方でき上がりましたそうで」
「やっと目鼻がつきました。一つには小父さんのお蔭、一つには千恵さんの生きた魂に影身に添って貰ったからです」
「父が、父がそれを伺いましたら――」

千恵の声は小さく震えていた。

「おや、あの鐘は六つですね。どうしたのだろう、文さんは」

「――」

顔を見合わせて、心は同じ玄関のほうへ耳を澄ましたが、森閑として物音一つしない。

「あの、御免遊ばして」

鐘を聞き終ると、千恵は静かに次の間へ退って行った。ひっそりと夕傾ける晩春のひと時。

「新谷様」

次の間から千恵が呼んで、わっと泣き伏す気はいがした。

「どうした、千恵さん」

「これ、これを――」

ひしといざりよる千恵の手から、長い巻紙が畳に尾を曳いている。

「兄が私に、六つまでに帰らなかったら封を切って読めと、五年前旅立つ折――」

「なにッ！」

見覚えのある文之進の筆だ。

「千恵へ書遺し申し候」

という書出しで、

――兄が家を出るのは決して武術修業のためではない。諸国の神社仏閣へ祥雲寺潟開発成就の祈願に出るのだ。兄にはどう考えても父の遺業を継ぐ力がない。

幾夜煩悶懊悩の末、これを成し得るは彦殿の他に無之と思い立ち、彦殿にも其心のあるを知り候節は、喜びの余り共に手を取って父の墓前に泣きたき心地さえ致候。

――しかし、若輩の我等二人がいかに上に願い出たところで、この難事業を仰せつけられる筈はなく、況して家中に理右衛門のある間は猶更覚束ない。余儀なく、卑怯のようではあるが、勝馬に接近してこれを利用したのだ。果たし状をつけたのは、ただ激励のため、愚かな兄には他によい思案がなかった。千恵には当分の間ずいぶん歎きをかけることだろうと、それのみ気にかかるが、立派な夫を持って長い行く先があるのだから、辛抱して貰いたい。

この度の道中はもとより彦殿の開発成就の為身命を神仏に捧げての祈願廻国故、万一当日時刻までに帰国せぬ節は、最早兄は世に亡きものと覚悟さるべき、何処に相果て候共必ず必ず御身達夫婦の仕合わせを祈り申候。

と、結んである。

そうだったのか。思い当るのは妙な六部の噂である。蔭ながら何度も作業の様子を見に帰ったのだ。

「文さん、帰ってきてなぜ一緒に喜んでくれないのだ――」

今の今まで愚か者とばかり思っていたのが恥かしい。

「新谷様、兄は本当に、本当に帰らないでしょうか」

思わず泣き崩れる千恵の肩を抱きながら、

「いや、帰る、きっと帰るとも」

彦市はもう一度耳を澄ました。そこはかとなく黄昏(たそが)れてくる静けさに、人の忍びよる気はいさえなく、彦市の頬をぼうだとして涙が流れ出した。

藪うぐいす

夜船

淀(よど)から大阪へ八里、夜船が下る。

雨上りの日が暮れかけて、舳(へさき)も艫(とも)も大方客が一杯につまった。中の間(ま)は相当の身分らしい若い侍が、さっきから買切りにしている。

洗われたような秋の月が明るかった。

「そろそろ出すかな」

船頭が纜(ともづな)を解こうとしているところへ、

「おうい、今行くぞう」

野太くわめきながら、泥をはねとばして逸散(いっさん)に駈けつけて来た男がある。不精鬚をはやした六尺豊かな大男で、博奕打(ばくちう)ちか、人足扱のおちぶれた奴か、いずれ荒い稼業の乱暴者らし

く、腰に太い長脇差を一本ぶちこんでいた。赭ら顔、どんぐり眼、垢じみた素袍の胸から、熊のような胸毛が見える。

「さあお客さん、早く乗っておくれよ。今、船を出そうとしたところだ」

「あわてるねえ。すぐ乗ってやらあ」

じろりと船の中を見廻した大男は、図体の大きいわりに身軽く、いきなり中の間へ飛び移った。

「ああ、いけねえお客さん、そこはお武家さんの借切りだ。乗合の方へ乗って貰いたいね」

船頭が慌てて声をかけた。

「なんだと」

大男はぎろりとどんぐり眼をむいて、長脇差に反りをうたせた。

「馬鹿なことをぬかせ。旅の者が乗る船に、借切りってことがあるか。馬鹿にするねえ。そっちが一杯だから、こっちの空いた方へ乗ったんだ。いけねえっていうのか」

こんなのに掛かりあってはなにをしでかすかわからないので、船頭も頭からは嚙みつけない。

「なに、悪いたァいわねえけれど、おいらァ船賃を取ってその中の間をお武家さまにお貸ししたんだ、貸したからには、その中の間は、今夜はお武家さんのものなんだから、乗りたけりゃお武家さんにじかに相談しておくんなさい」

「なにをぬかしやがる。相談もくそもあるもんか。手前たち、お武家さん、お武家さんって、

さんづけに奉ってやがるが、侍だって同じ人間じゃねえか。二本差が怖くって道中が出来るけえ」

傍若無人の悪態に、船頭も乗合の者も、今にも血が飛ぶのではあるまいかと息をひそめた。が、若い侍はさっきから胴木によりかかって、そっちを見ようともせぬ。じっと目を閉じて眠ったふりをしているのだ。

(大丈夫かな)

船頭はちょっと不安そうだったが、とに角船は岸を離れた。

「ふ、ふ、態ァ見やがれ」

大男は誰にともなくほざいて、ふてぶてしく草鞋を脱ぎ、舷でざぶざぶと泥足を洗って、中の間の毛氈の上に大胡坐をかいた。

「お武家、真っ平御免よ」

「――」

「折角挨拶してるんだ。目を覚ましたらどうだね」

不敵な不作法者は執拗に、わざと侍の膝を揺り動かした。相手は、小人取るに足らずとみたか、それとも掛かりあっては面倒と思ったのか、目を開こうともしない。

「ふ、ふ、余っぽどお疲れのようだね。もっとも、うっかり目を覚まさねえほうが無事だからね。――こりゃ甘そうだ、御馳走になるぜ」

大男は侍の前の菓子を手摑みにして、むしゃむしゃ食った。煙管の雁首へ引っかけて、煙

草盆を引寄せ、侍の煙草を吹かして、乱暴に吐月峰を叩いた。これ見よがしの面憎い狼藉ぶりである。

「石地蔵相手じゃ張合いがねえな。どれ、俺も一休みするとしようか」

図に乗った大男は、とうとうそこへどさりと仰向けになって、熊のような足を侍の膝にのせたのである。

余りの無態に、乗合の者は、初めは大男を心憎く思わぬ者はなかったが、どんなことをされても一向に侍が相手にならぬので、しまいには歯痒く、

(こりゃ本当に臆病なのだ)

軽侮の顔を見合わせて、中には不快な色さえ浮かべる者があった。

船はやがて淀から三里、枚方に近く、——さんざん毒づいたり、嫌がらせをやったり、一人で芝居をしている無法者も、張合いなさに旅の疲れが出たとみえる。いつの間にか大鼾をかきはじめた。

「いい月ですね」

「十三夜が近うござんすからね」

人々はもう中の間のことは忘れて、思いおもいの世間話を始めていた。と、——

「無法者、起きよ」

どんと床を踏み鳴らす一喝に、乗合の者は驚いて顔をあげた。中の間の侍がすっくと立っているのである。——なんだ今ごろ、と思うまもなかった。

「起きぬか、痴れ者」

肩を蹴られて、

「な、なんだとッ」

むっくり大男が半身とび起きたところを、

「えい」

抜討ちだった。したたか肩先深く斬り下げられて、大男は二言と立てず絶命する。

船頭も乗合の者も、あっと肝を冷やして、咄嗟にはだれも口がきけない。

「船頭、見ての通り、堪忍なり難いゆえ無礼者をしとめた」

若い侍は刀を拭って鞘におさめながらいった。凛として、べつに顔色一つかえていない。

「この夜船に、喧嘩で相手を斬った者を、船にとめておかねばならぬという法があるか」

「さあ、私共つい心づきませんが」

「乗合のなかに御存知の方があるかな。拙者は構わぬと思うが、何か言い分のある方があるなら承ろう」

人々も急には返辞ができなかった。

「黙っているところを見ると、異存はないのだな」

「へえ、立派な無礼討ち、そんな無法な奴は御成敗が当然かと思います。な、皆さん」

一人がいうと、みんな同意するように頷く。

「しからば」

若い侍は艫の方に乗っていた若党を呼び、屍骸を河の中へ棄てさせて、
「船頭、少しく思うところがあって、ここから陸を行く。船を岸へ着けてくれ」
と、命じた。
やがて船が岸へ着くと、何をいいつけられたか、若党が一人で上って行った。それが、間もなく引返してきて、
「旦那様、お支度ができました」
と、答える。
侍は頷いて、槍持を一人残し、小者三人に荷物を持たせ、今の若党をつけて先行させた。
かれこれ半刻ちかく――。
「さて、今夜は一同に思わぬ難儀をかけてまことに申訳ない。これは拙者にとっても全く不慮の災難、悪しからず許してくれ。手間を取らせてすまなかったな」
若い侍は慇懃に会釈をして、槍の石突を返し、ぐいと船を押出した。終始その落着いた態度と、行きとどいた挨拶に、誰も不平をいうものはなかった。

心がけ

岡山藩で生駒小平太は物の役に立つ若者として、一藩に知られていた。それが帰国すると間もなく、だれからもれたか淀の川船事件が噂になって、

「あの男ならやりそうなことだ」
と、聞くほどの者をほほえませた。
小平太としては、自分から奇を好んでするわけではないのだが、いつもそういう廻り合わせにぶつかって、必死にもがき抜けて行くことが、人にはなにか一風変ってみえるらしいのだ。
先年江戸勤番中、主君池田光政の行列へ、旗本某が馬を突っかけようとした事がある。事実は初めから突っかける気ではなかったらしく、行列が本石町を日本橋のほうへ通行中、両国のほうから駈けさせて、急に乗馬を止めえず、――当時はまだ、大名と旗本との間に始終意地ずくの喧嘩の絶えなかった時代だ。馬が止まらないので構うものかと意地になったらしい。そのまま行列を乗りきろうとした。
「危ない」
すでに光政の駕籠がほど近かったので、行列は騒然となったが、誰も咄嗟にうろたえ気味で駕籠を護ろうとするばかり、馬を止めようと気のついた者はない。その中からただ一人、小平太が走り出て、ぱっと轡へしがみついた。
武道の達人という柄ではないから、法にかなって、見事取り押えるというわけにはいかなかった。ただ身を棄てて、轡にしがみついたというだけである。
「無礼者、なにをするっ」
意地ずくの旗本は気が立っているので、鞭をあげて発止と小平太を打った。

「お馬が荒れているようでございますから、おしずめまいらせます」
打たれながら、小平太は必死に怒鳴った。怒鳴りながら二三間引摺られた。それでもどうにか食い止めたが、なんと勘違いしたか旗本の若党共が、いきなり抜刀してかかろうとする。これは気のついた味方が数人駈けつけて、抜刀させずに取押えた。
「ええ、無礼者、放せ。放せ」
旗本はなおも、いや、若党が押えられて一層いきりたったのかもしれぬ、つづけざまに三つ四つ鞭を鳴らしたが、小平太が黙って打たれているので、さすがにそう乱暴もつづけかねたらしい。
「おのれ、なにゆえ通行の邪魔をする。無礼であろう」
打つのを止めて威丈高にわめいた。
「いいえ、お馬の気を鎮めておりますので」
「いうな、しからばなにゆえ家来共まで手籠にするのだ」
「御家来は手前を狼藉者と見誤りましたか、抜刀しようといたしましたので、朋輩共が宥めておりますので、決して他意があったのではございません。御覧の通り主人光政もまかり通りました上は、何卒御通り下さいますよう、——方々、お退りめされ」
小平太はさっと身を退いて前に跪いた。一同これに倣ったので、旗本は睨みつけながら、無事にそのまま行き過ぎた。
「小平太見事であった」

邸へ帰ってから、光政は小平太を呼んでそのあつかいを賞した。
「しかし、痛かったであろうな。大事にいたせよ」
無慚な鞭の跡が痛々しかったのである。
小平太は面目をほどこしたが、轡にしがみついた恰好が余りよくなかった。それに、後から打たれた分は、馬の蔭へ避ければいくらもよけられたのである。
「あれが、刀だったら斬られているところだ。大体、腕に自信もないのに、飛び出すのが間違いなのだ」
中にはその不手際を詰る者もあった。
「いや、あの場合は先方が気が立っているので、わざと黙って殴られていたのだろう。よければ一層相手が激するからな。身を以って主人を護る、手際不手際の問題ではない」
うがった弁明をしてくれる者もあった。
小平太は別に言訳のようなことも、抗議めいた言葉も口にしなかった。
その小平太が、翌年の春、国許でまた問題を起した。
一日、近習仲間五六人と、酒肴の用意をして城外の桜山へ花見に行ったことがある。咲きも残らぬ見ごろの桜花で、城下の老若男女が思いおもいの場所へ陣取り、或いは幕をめぐらし、毛氈をしいて、賑やかに遊び戯れていた。
「おい、岡山小町のお通りだぞ」
ふいに一人がおどけて叫んだ。

見ると、小平太達の毛氈からだらだらと見下せる小径を、十七八歳の勝れて美しい娘が老婢をつれて通って行く。花見にきたというふうではなく、用のついでに廻ってきたらしい目立たぬ身なりだが、ただ美しいというよりおのずと匂いこぼれる高雅さが、小平太の目を惹いた。

番頭滝本権左衛門の娘千早なのである。権左衛門が評判のやかましやで滅多に外出させないから、なにかの時出逢った者は見たとはいわず、拝んだと勿体をつけていうくらい、若侍達の間では騒がれている美人だ。小平太としても、ここ一年あまり拝む光栄を持たなかったろうか。

（ほう、綺麗になったなあ）

本当にそう思った。一年見ぬうちに、どこか固い蕾を思わせるようなぎこちなさが体から消えて、すっかり女らしく、いって見れば触れても見たい媚かしさを感じるのである。

「呼んで一つ酌をたのもうか」

「親爺が怖くなかったら」

「それが珠に瑕――」

冗談にして笑っているが、恐らくこの中の多くは、ことによると全部が、一度は縁談を持ちかけて断わられた失恋組だったかもしれぬ。

「あっ」

一同が目をみはった。その珠に、ふらふらと通りかかった二人連れの中間の一人が、い

きなり抱きついたのだ。と見る、娘がひらりと身をかわしたので、空を抱いた中間の体が中心を失って、前へのめり倒れた。

「こん畜生」

声はそうはっきり聞えなかったが、そんなことを怒鳴ったのだろう。睨んではね起きようとする顔へ、

「――」

娘はにっこりと世にも艶やかにえしゃくして、逃げるという端たなさは露ほども見せず、春風に緋の裳裾をほのかになぶらせながら、しっとりと歩み去るのだ。中間は余りの鮮やかさに、呆気にとられて見送っている。

「無礼な下郎だ」

一人が自分の珠を穢されたように憤慨した。

「しかし、さすがに落着いたものだなあ」

感心して、これも見惚れている。

その嬋妍たる姿が花かげに隠れてしまうと、一瞬哀愁に似た寂しさを感じて、――人は知らず、小平太はそうだったのである。

「楊家に女あり、初めて長成す。養って深閨に在りて人未だ識らず。天性の麗質自らすてがたく、どうだ、あの麗質、一朝選ばれて誰の側へ行くかなあ」

一人がしみじみ感歎して一同の顔を見渡した。

「心配するな。あれはおれのところへくる」
あっさりと小平太が答えた。
「本当か、おい」
「うむ、ちゃんと約束がきまっているのだ」
「しかし、よくあの気難しい親爺が承知したな」
「なに今さら承知も不承知もない、当人同士で前からきまっていたのだから」
この男は日ごろ口の軽いほうではない。黙っていてよく思いきったことをする男だから、一同本当にしてしまった。
「そりゃお目出度う」
口ではいったが、急に座がしらけてしまったのは、各々万一の望みの綱をぽつんとたたれてしまったからだろう。

嫁貰い

小平太にして見れば、むろんそんな約束があったわけではない。去年、江戸表へたつ前、一度菩提寺の門で出逢ったことがあった。会釈をして行き過ぎようとするのを、
「あ、しばらく――」
小平太が呼び止めた。

「はあ」
怪訝な顔をして千早が立ち止まる。
「滝本殿の御息女でしたな」
「はい」
「手前は御家中の生駒小平太と申します」
「存じあげております」
「あ、そうでしたか。拙者近日殿のお伴に加わって出府しますので、なにか江戸表へお言伝でもありましたらお伝えいたしましょう」
ただ口がきいて見たかったから、うっかり呼び止めてしまったのだ。呼び止めてからこんな口実が自然と出たのである。
「あの、べつに――」
意外だったのだろう。千早は耳の付根まで真赧になってしまった。
「いや、今でなくともいいのです。まだ日がありますから、――お足を止めて失礼しました」
先方の供の者も、こっちの家僕も呆気にとられていた。しかし、丁寧に会釈をして去った娘の綺麗な目に、恥らいこそあったが、決して軽侮の色も、怒った感情もなかったことを見ていた。
あの時はほんの戯れだったが、こん度は少し違う。中間をあしらった心のたしなみ、その

たしなみをとおして深沈と匂いこぼれる女らしさに、小平太は強くひきつけられたのだ。

妻にしたい、その希望が、もう実現しているかのようにうっかり口に出してしまったのだ。

それほどだから、むろん貰いにいくつもりではいた。

が、まだその交渉を開始しない前に、

「千早殿は小平太と結婚するそうだ」

「当人同士が前から話がきまっていたというのだから油断ならぬ」

おせっかいな噂のほうが忽ち評判になってしまった。一つにはやかまし屋の権左衛門が、そんなことのないようにと、ひたすら用心していた箱入娘に、思わぬ虫がついていたということが話題の種になったのだ。

或る夜、権左衛門がかんかんになって怒鳴りこんで来た。

「娘を責めて見たが、一向にそんな覚えはないという。なにを以って貴様は、嫁入り前の娘を傷つけるようなことをいいふらしたのだ。ただでは許さん。証拠があるなら見せろ」

斬ってすてんばかりの勢いである。老人ながら筋骨逞しい東軍流の遣い手だ。常に当世若侍の惰弱を慨してやまぬ気骨がある。有名な小言親爺だ。

「承知いたしました。しばらくお待ちを願います」

いいたいだけさんざんいわしておいて、小平太は静かにたちあがった。

「こら、逃げると承知せんぞ」

親爺が目を光らす。小平太は坐りなおした。

「失礼ながら、父祖重恩の御主君にそむいて、いずれに逃げる国がございましょう。年甲斐もないお言葉を承るものです」

これはたしかに失言だ。しかし小平太の語気は、たかが娘一人のことにとりのぼせて、見苦しいといわぬばかりだ。

「うむ、悪かった。——では、きっと待っているぞ」

「お手間はとらせません」

その実、非常に手間がとれた。

小平太は親爺を待たせておいて、十町ばかりある親爺の屋敷へ乗込んだのである。

「権左衛門殿、申しつけにて、千早殿をお迎えにまいった。御同道下さるよう」

玄関で申しいれると、親爺がさんざん娘を叱りとばして、小平太の家へ乗込んでいることを知っているから、家人も千早も少しも疑わなかった。

身じまいに少し手間取ったが、娘は美しく装ってたちあらわれた。

「お供いたします」

案外落着いている。二十日近い朧月夜で、屋敷町は夢のように甘くしっとりと宵たけていた。

「叱られたそうですね」

小平太はなにげなく話しかけた。

「はい」

「すまんことだと思います」

「――」

どこかで恋猫がないていた。

「しかし、拙者はあなたの良人として恥じぬと信じています。拙者ほどあなたを愛している者はどこにもない。あなたを妻として幸福に護りとおせるのは拙者一人だと信じています」

「――」

「そう信じて頂けないでしょうかな」

「あの、父はなんと申しておりますでございましょう」

ここが命の瀬戸際だと思うから、小平太は図太く押して出た。

千早はじっと首垂れていた。不離不即に並んで歩く肩と肩とが時に触れて、ほのぼのとした処女の香がただよう。

「なにを証拠にあらぬ噂を撒いたかと、大層御立腹のようです。拙者、あなたに信じて頂けなければ、お二人の前で腹を切ってお詫びするつもりでお迎えに出ました」

「まあ」

千早はちらっと顔を見上げて、かすかに溜息をついた。

「父は先ほど、あなた様を討ってまいると申して家を出ました。私、その時から覚悟はいたしております」

「覚悟」

「はい、私のことから、あなた様に万一のことがございましては、お殿様にも申訳ございません。私といたしましても、なんと申しましょうか、一度世間の人の口にのぼりました体、自害しますよりほかに道はないと――」

「そ、そんなことはありません。それでは申訳ない。ですから、改めて拙者と結婚してください。拙者生涯感謝いたします」

小平太はただ押しの一手だ。これでいけなければ、跪いて拝んで見せてもいいと思う。命がけならなんでもできるのだ。その気魄に押しきられてしまったのかも知れぬ。

「でも、父がなんと申しますでしょうか」

「むろん、許してくれます。当人同士が承知している以上仕方がないでしょう。第一、拙者は必ずお父上に気にいられる男です」

若いということは、世にも楽しいことである。いつの間にかそっと寄り添って、柔かい娘のあたたかさを、強い男の息吹きを、お互いに幸福に感じあっていたのだから。

これは、新妻になってから千早が告白したことだが、――あなたは本当にお強い男、ずっと前あなたは、お寺の門ではじめて私にお声をおかけになったことがあるでしょう。やっぱり縁なのですわ。あの時から妙に忘れられなくて、ですから、父に突然責められた時も、あなたに呼びだされたのが嘘だとわかった時も、私、少しも妙な気はしませんでしたの。

いや、と小平太はわらった。――それはお前があんまり箱入娘に育って、男に縁遠くおかれたから、はじめて声をかけた無躾な男が、印象に残って忘れかねたのだろう。

そんなことございません、と千早は怒ってしまった。つまり、そんな動物的本能からではありませんと、いいたかったのらしい。

とに角、その夜不意に千早をつれて帰ると、真っ四角に坐ってじりじりと待ち兼ねていた親爺は、たしかに啞然（あぜん）としてしまった。

「御覧のとおり、証拠をつれてまいりました。ただし、これは今お宅へうかがって千早殿に事情を物語り、改めて承諾の上御同道を願ったのです。誤解なさらんように。——いかがでございましょう。千早殿を手前の妻に頂戴できませんでしょうか」

「——」

親爺は穴のあくほど、かわるがわる二人を見比べていた。

「手前は決して御息女を不幸にするような男では——」

「わかった、わかった。貴様は旗本の馬にしがみついた男だそうだが、なるほど、しぶとい奴だ。——そのまま待っておれ」

権左衛門は早々に座を立ち上った。届出のために、重役の門を叩きに行ったのである。三年前の話だ。

その朝

藩主光政は在国中、毎朝の膳に番頭一人、物頭一人を相伴（しょうばん）させ、家内の事、組の事、さ

ては元組の軍功など尋（たず）ねながら、食事をする例になっていた。ただし決して他人の蔭口はきかぬことという約束がある。

その朝のお相手の一人は渋川剛介という先年召抱えられた兵法の達人であったが、

「このごろ、淀川で無法者を斬った小平太の評判が高うございますが、いかがなものでございましょう」

なにか不満らしく、その話を持ち出した。

同じ無礼討ちにするなら、無礼を働いた時堂々と斬り棄てるべきである。眠ったところを不意に起して斬ったのは武士の作法でない。それはまあ仕方がない。敢（あ）えてそうしなくてはならなかったのは、腕前に自信がないからで、それをそばからさも偉いことをしたように評判するのがよくない、という剛介の意見なので、——それは予（かね）て光政の耳にも入っていた。

「剛介、人にはそれぞれの考えのあること。他人のことは口にいたすな」

光政はおだやかに窘（たしな）めた。

「しかし、お言葉をかえして恐れ入りますが、間違った評判は一藩のため、よろしくないと存じますので」

光政はなにげなく話題を変えてしまったが、数日の後、なんとはなしに剛介に暇を取らせる旨の言渡しが出た。

小平太は光政の寵臣の一人であるため、剛介は、こん度の暇を小平太の讒言（ざんげん）によるものと

誤解して、屋敷を引払うと同時に、——明朝城外寺町の竹林に待つ旨（むね）、果たし状をつけた。自分のほうは一人だが、そっちの助太刀は随意だ、——と書き添えたのは、どこまでも自分の腕を信じ、小平太を侮（あなど）ったものと思える。

翌朝、控え目の朝飯がすむと、懐妊（かいにん）がそれと人目につくほどになった千早が、改めて良人の前へ両手をついた。白々と細い指が目につく。

「あの、お叱りを受けるか存じませぬが、昨夜の渋川様からの書状は果たし状ではないでしょうか」

「そうだ」

さすがに美しい頬が蒼褪（あおざ）めていた。

「お出かけになるのでございますか」

「うむ、これからまいるつもりだ」

「何か、お申しおきの事でもございましたら、承っておきとうございます」

千早は相手が良人より腕の立つことを知っているので、すでに覚悟しているようだった。

「べつにないが、わしに万一のことがあったら、この果たし状と一緒に、お役向へ届け出してくれ、——万事親爺殿と相談するがいい」

「はい」

じっと瞶（みつ）めてくる。これが自分のものだろうかと、ふっとそんな気がしたほど綺麗な目だった。

「男だといいな」

小平太は急に腹の子に強い愛着を感じたのである。

「ええ？」

「男だか女だか、自分の腹でもわからんものかなあ」

「まあ」

千早は見廻されて、袖で隠すように、ぽっと顔を赧らめた。

「強い男だと、お前はいつもわしのことを胸の中でいっていたろう。だからどうも男の子のような気がする。今、ふっとそんな気がしたのだ」

良人はいつものように、茶を喫（きっ）しながらわらっている。いつもと変ったところのないのが、却（かえ）って妙に淋しかった。

「坊やを生みますわ」

「そうしてくれ、坊やがいい」

小平太は立ち上った。いつも出仕する時のように玄関まで送られて、

「坊や、すぐ帰ってくるよ」

わざと妻にいった。もう一度顔を赧くする処を見たかったのだが、

「——」

千早は大きく目を瞠（みは）っただけで、——可哀そうに。小平太はさっと玄関を離れた。

むろん、若党もつれなかった。

冬に近い晴れた朝である。

竹林の道傍に、旅姿に襷鉢巻、もうすっかり身支度をした剛介がただ一人待ち受けていた。

「ほう一人か」

なんの支度もなく、しかも小平太が一人ですたすた、――全くすたすたという気軽さだった。どこにも迫った感情など見えないので、剛介は意外そうに目をみはった。

「よく一人できたな」

「うむ」

「仔細はいうまでもあるまい。気の毒だが、すぐ支度をして貰おう」

一人と一人では問題になる相手ではないと、剛介はもう勝ち誇っていた。

「承知いたした」

小平太は静かに下緒を取るように見せて、

「えい」

突然、踏み込んで抜討ちに力一杯肩先へたたきつけた。

「わッ、卑怯――」

さすがに柄に手をかけて、三寸ばかり鯉口を切ったが、深傷である。よろよろッと前へ膝を突いて、崩れるように血潮の中へのめり込んだまま、剛介はもう動かなかった。小平太は急に全身の力が抜けてしまったように、あまりにも呆気ない死骸をぼうぜんと眺めている。

どこかで森閑と藪鶯が鳴いている。

よろこび

一応役向へ仔細を届け出て、午近く小平太が帰宅すると、

「あ、お帰りだ――」

顔を見るなり下郎が飛びこむように奥へ駈けこんだ。小平太が果たし状を付けられて剛介を斬った話は、もう一藩中へひろまっていたのである。

「あの、お父様が先ほどからお待ち兼ねになって、――ほ、ほ、子供のようにお立ちになったり坐ったり」

急いで出迎えた千早の、そういう顔も生き生きと昂奮していた。

「お前が迎えにやったのだろう」

小平太はいきなりその柔かい双の肩を鷲摑みにして、おしてゆきながらぐらぐらと揺ぶっていた。生きて帰ってきた喜びが、惻々として胸一杯に盛り上ってきたのである。

「いいえ、先ほど御自分から、――あ、髪がこわれますわ」

一瞬、今朝淡々として出て行った時の良人の心がわかったような気がした。やっぱりお辛かったのだ。――千早はその心を今さら吸いとるように感じて、ぽろぽろ涙が頬にあふれてきた。

「おい、坊やは無事か」

「ええ」

近々と迫った目が微笑（わら）った。急に覆いかぶさるように唇が触れたと思うと、――良人は澄ましてもう廊下を歩いて行く。千早は思わずあたりを見廻して、体中が熱くなってしまった。

「おお、帰ったか」

庭下駄をはいて松の枯葉をむしっていた舅（しゅうと）権左衛門が、にこりともしないであがってきた。

「小平太、剛介を斬ったそうだな」

この東軍流の遣い手は坐るなりきり出したのである。

「はい」

小平太は悪戯を見つけられた子供のように、思わず小さく畏（かしこ）まった。自分としてはやむを得ぬ手段であったが、古武士気質（かたぎ）のこの舅はあの不意討ちをなんと見るだろうか。

「なぜ果たし状をつけられた時、一応わしの耳へ入れぬ。怪しからん」

「無駄に御心配をかけてもと存じましたので」

「貴様、はじめから剛介に勝てるつもりでいたのか」

「負けてはならぬと思いました。眠っている者でなくとも斬れるということを、当人に見せてやらなければなりませんし、腕のできる者にはなんとしても敵（かな）わぬものかどうか、自分としても、こういう折りに試しておかなければなりませんから」

「貴様、自分の斬られることは少しも考えなかったのか」

「いや、それは考えすぎるほど、考えさせられました」

小平太は率直にわらった。

「舅御、人間はなかなか勇士の心にはなれませんね。川船の時にはそうでもありませんでしたが、こん度はやたらに妻が可哀そうで、愛（いと）しいといったほうが本音ですかな。――本当に覚悟ができたのは――」

「たとえ自分に万一のことがあっても、間もなく生れてくる子があると思った時です」

「うむ」

千早が茶を入れてきて、そっと良人の顔を見上げる。

「覚悟がきまって死にもの狂いになると、案外生きる道がつくものです」

「は、は、貴様はその死にもの狂いで、腹の子まで男にきめたそうだな」

老人が笑い出した。すっかり今朝のことを千早が話してしまったらしい。

「こりゃ怪しからん。――千早、夫婦の間の睦言（むつごと）まで親爺殿の耳にいれる奴があるか」

てれざるを得ない。

「でも、あなたはあんまり冷淡なのですもの。――坊や、すぐ帰るよって、私にはなんのお言葉もなく」

千早が真面目な顔をして怨む。

「馬鹿を申せ。果たし合いに行く門出に、妻と手を取り合って泣けると思うか」

「いいえ、そのほうが本当の夫婦の愛情——」
「慎しまんか。呆れた奴等だ。わしにはわからん。——帰るぞ」
老人はそそくさと立ち上ったが、
「小平太、晩にきなさい。一杯酌もう」
いい残して、せかせかと廊下を踏み鳴らして行く。
（しかし、よく斬れたなあ）
うっとりと目を閉じて、小平太は急にとけいるような甘い疲労を感ずるのであった。

紺屋の月

一夜の宿

江戸は初夏の季節で、空に十三日ばかりの月が大きな暈をかぶって明るかった。
いまは深川佐賀町の材木問屋の人足になり下っている藤里周平は、半纏股引姿もようやくいたについて、突っ掛け草履の足もとも軽く、深川河岸を霊雲院のあたりまで帰ってきた。
今夜は仲間にさそわれて帰りに一杯つきあってきたので、時刻はもう五ツ半（九時）に近かったろうか。ふと見ると、人の誰も通らない河岸っぷちに、女が一人ぼんやりと立って、大川を眺めているようだ。
——身投げらしいな。
まだ夕涼みという季節には早すぎるし、周平はすぐにそう直感して、歩調をかえずにすたすたと近づいて行った。髪を無造作にたばねた若い女で、周平の通りすぎてしまうのを待っ

ているようである。思いつめている女は、うっかり声などかけると、かえってかっとなって飛びこんでしまうものだと聞いているので、周平はすっと近づくなり、とっさにうしろから帯をつかんで、

「不心得をおこすものではない」

と、おだやかにたしなめた。

「あっ、なにをするんです」

女はぎょっとしたように振りかえって、体じゅうをかたくしながら睨みつける。

こっちがいわゆる半纏着なので、なにかいたずらでもされると思ったのだろう。年ごろ十九か二十、面やつれはしてはいるが目鼻立ちのととのった強い顔で、そう育ちの悪い女とも見えない。

「あんたは身投げをする気だったんだろう」

「大きなお世話です。放してください」

「放せばどぶんと飛びこむ」

「行ってくださいっていうのに、お節介な人ね」

「あんた、人に剣突をくわせるほど死にたいのか。よろしい、じゃ死になさい」

周平はつかんでいる帯の手にぐいと力を入れて、満々と夜潮をたたえている大川のほうへいきなり押しつける。

「あっ、あぶない、なにをするんですよう」

女はびっくりして、泣き声をあげながら、必死にしりごみをした。

「そうらごらん。やっぱり死にたくないだろう。あんまり強情を張るもんじゃない」

どうやらこれで死神ははなれたと見たので、周平は女を往来の真ん中あたりまで引きもどし、自分が川のほうへ立って女の帯を放した。

女はさすがにひっそりとうなだれてしまう。

「人間は一度死んでしまうとそれでおしまいだ。あんたが大川へ飛びこんでよろこぶのは河童ばかりで、考えてごらん、身投げというやつは河童に川の底へ引きこまれて、さんざんおもちゃにされたあげく、明日は水ぶくれになった醜い姿を、いやでも天日にさらして人にわらわれなくちゃならない。詰まらない話だ」

周平はまずちょいと水死のいやらしさを吹きこんでおいてから、

「人間はどんなに辛い悲しいことがあっても、それと闘っているうちが花なんだ。どうだね、わしは見てのとおりの半纏着で、あんまり智恵も才能もないほうだが、あんたが死なずにすむ工夫ぐらいは考えてやれるかも知れない。死にたいわけを、一度わしに話してみる気はないかね」

と、なるべく話しいいように持ちかけてみる。

「だめなんです、あたし」

女はうなだれたっきり顔をあげようともしない。

「だめというのは、わしに相談しても無駄だということか」

「あたし、誰にも話したくないんです。話したってしょうがないんです」
急に袂を顔にあてて、やるせなげに嗚咽し出す。
「そうか。話したくないというのに、無理に話してごらんというわけにも行かないな。じゃ、こうしよう。話のほうは話したくなるまで待つから、とにかくわしといっしょにきなさい。ひと晩泊めてあげよう」
「いいえ、だめなんです」
「じゃ、どうしても河童のおもちゃにされて、水ぶくれになりたいのかね」
こんどは答えずに、嗚咽するだけだ。
「あんた腹がすいているようだな。わしの家はそこの万年橋をわたるとすぐだから、まあいっしょにきなさい」
かまわず腕をつかんで歩き出すと、もうそれを振り切って強情を張るほどの元気もないようだ。
素足にちびた草履をはいて、着物も帯もだいぶ疲れているようである。育ちは悪くないようだから、世間によくある例で、男に騙されて家出をして、その男にすてられた、今さら家へも帰れないので死ぬ気になった。恐らくそんな娘なのだろう。
「あんた、今日はだいぶ歩きまわったようだな」
女が泣きやむのを待って、周平は話しかけてみた。
「ええ」

「くたびれて腹がすくと、誰でもちょっと世の中が味気なくなるもんだ。今夜ぐっすり眠って、あした朝日を見ると、また新しい元気が出てくる――。そうそう、わしは佐賀町の杉田屋という材木問屋の人足、名前は周さんというんだ。あんたはなんというんだね」
「澄といいます」
「お澄さんか。子供の名はみんな親がつけてくれるもんだが、わしなどはその親にもらった名前を粗末にしてしまったほうでね」
ああいけないと思った時はもうおそかった。お澄は又しても袂を顔にあてて、激しくむせび泣き出したのである。
「悪いことをいってしまったかな」
しかし、涙というやつは人の心を洗ってくれることがある。どうせ親不孝をしてきた女なのだろうから、泣きたいだけ泣くがいいと思って、そのままそっとしておいた。
周平の家は元町の紺屋の路地を入った裏の三軒屋の一軒で、前は紺屋の広い物干場である。四畳半一間に台所きりの家だし、ひとり者だから布団も一組しかない。自分はたとえごろ寝をするにしても、若い女が一つ部屋に男といっしょでは気詰まりだろうと思ったので、七輪に火をおこして、湯だけわかしてやり、
「お澄さん、お櫃に冷飯が残っているはずだが、足りなければここに米も味噌もある。ありあわせのもので、今夜は間にあわせておいてくれ。それから、押入れの中に布団があるから、遠慮なく出して、ゆっくりやすみなさい。わしは明日の朝帰ってくるから」

そういおいて、家を出てきた。

目を泣きはらして、疲れ切ったようにぐったりとそこへ坐っていたお澄は、ちょっと呆気にとられたようだが、

「すみません」

と、一言いったきりで、どうしてですと聞く気力もなかったようである。

悩ましき女体

万年橋のそばに木賃宿がある。そこへひと晩泊って、翌朝周平が家へ帰ってみると、さすがに女は女で、お澄はもうちゃんと襷がけになって、朝の支度をしているところだった。

「どうだったかね、昨夜はよく眠れたかね」

「ええ」

お澄はいくぶん気恥かしそうに迎えて、さっそく台所から朝茶の支度をしてきて、

「お早うございます。あの、昨夜はいろいろと御迷惑をおかけしまして、ありがとうございました」

と、改めて行儀よく挨拶をした。

今朝はだいぶ気力もついてきたらしく、血色もいい。

「いや、改まって礼などには及ばない。しかし死神だけははなれてくれたようだね。本当に

よかった」

見ると、左の首筋にひどいみみず腫れができている。

「おかげで、あたし――」

感謝するようにいいながら、お澄は、いそいでそっちの首筋をかくすようにするので、

「わしはまた、一人でおいてよかったかなと、心配しながら帰ってきたんだ」

と、わらいにまぎらせて、みみず腫れのことは口にしないことにした。

「あの、あたしもうひと晩お世話にならせていただいてもいいでしょうか」

「かまわないとも、ひと晩といわず、あんたの身の振り方がつくまで、ひと月でも半年でもここにいるがいい。どうせわしは昼間は留守なんだから」

「すみません」

「近所へは国の親戚の者ということにしておくから、あんたもあとで挨拶しておくといいな」

「はい」

その日は小銭をわたして出て、両隣と大家の紺屋へだけ、出がけにお澄のことをことわっておいた。

ただ紺屋の遠州屋総兵衛にだけは、杉田屋の身許引請人にもなってもらっているので、本当のことを耳に入れておくことにした。

「ようござんすとも――。そういうことなら、やっぱり親戚の娘さんということにしておき

ましょう」

　苦労人の総兵衛はこころよくそう承知してくれた。

　その夕方、仕事をおえて帰ってくると、家の中がなんとなくきれいになっている。掃除が行きとどいて、襖障子の破れなどが器用に切り貼りしてあるせいだろう。それより一軒の家の中に若い女がいるということが、そもそも家の中をあたたかくしているのだ。

「あの、今日は少し晒だの、お針の道具だの買わせていただきました」

　夕食の時お澄は遠慮そうにいった。

「必要なものはなんでも買うがいい。なにも不自由をして暮すことはないんだから」

　そういえば、着物もこしらえてやらなければ、一枚きりではしょうがないだろうと思った。

「どうしてあなたは、よそへお泊りになるのかしら」

「お澄さんが気詰まりだろうと思ってね」

「そんなことございません。お世話になっているのはあたしのほうなんですもの、それじゃあたしが居辛くなります」

「そうか、じゃ今夜から家へ寝よう」

　こうしてその日からお澄との同居生活がはじまった。

　お澄は無口で、決して明るい女ではなかったが、よく働くし、きれい好きで、周平にとっては全くいい女房役だった。

　それにただ世話になっていてはすまないという気があるのだろう。昼間は人仕事をもらってきて、せっせと内職にしているようである。

　ただ一つ、かなり強情な性質らしく、あれ以来自分の身の上話は一言も口にしようとしない。周平もまた強って聞かなければならないという理由もないから、お澄がその気になるまではなんにも聞かないことにしていた。

　或る日、周平は風呂へ行くのが面倒だったので、家で裸になって体をふいたことがある。うしろへまわって背中を拭いてくれようとしたお澄が、

「まあ、この肩の傷、刀傷でしょう、どうなすったの」

と、びっくりしたように眉をひそめて聞いた。それは右肩から斜に七八寸ほどの大きな傷なのである。

「そうか——。わしはその傷のために主家を浪人するようになったんだ。ただし、うしろ傷だが逃げて斬られた傷じゃないよ」

「そういえば、押入れに刀がしまってありますね」

「うむ、恐らくもうあれを差して歩く日もこないだろうが、これでわしは藩の微禄組の中では、一番剣術が強かったんだ。去年の菊の節句に主君の御前で勝ちぬき試合が行われることになってね、上士の子弟の中に一人強い奴がいる、まずわしとその男が勝ち残るだろうという評判だったんだ」

「それ洗いますから、こっちの浴衣を着てくださいまし」

お澄は仕立ておろしの浴衣を出してきて、着せかけてくれた。自分がきれい好きだから、三日とおなじものは着せておかないのである。

「それで、どうしましたの」

「その男より、わしのほうがいくらか強いだろうという評判があったもんだから、或る夜馬場（ばば）のそばを通ると、ふいにうしろからそいつが斬りかかってきたんだ。まさか命まで取ろうという気はなかったんだろう、腕の一本も落しておけば、試合に出られなくなる、そんな気持だったんだろうが、こっちはとっさのことで、そこまで考える余裕はない、曲者（くせもの）と思ったから、抜きうちにうしろを払った。胴を深く斬りあげていたんで、即死（そくし）だった」

「その人のほうが悪いんですものね」

お澄はまじまじとこっちの顔を見まもりながらいった。

「相手がその男だとわかった時は、しまったと思ったが、どうにもしようがない。その足でわしは組頭（くみがしら）のところへ行ってわけを話した。理由はこっちにあるにしても、向うの一門の中には重役もあることだし、相手が悪い。お前は今夜のうちに江戸へ立ってしまえ。あとはわしがなんとか話をつけておくから、江戸で時節のくるのを待てと、組頭がいってくれたんで、傷の手当も早々にして、国もとを逃げ出してきたんだ。つまり、わしはそういう損（そん）な運を持って生まれてきているんだろうな」

「でも、敵討（かたきうち）に狙われるなんてことはありませんかしら」

「それはまずないだろう。その点は組頭が責任をもって話しておいてくれたはずなんだ」

「じゃ、それだけは安心ですね」

「うむ。そうそう、傷の話が出たからついでに聞くが、あんたに初めて逢った時、あんたの首筋にひどいみみず腫れがあったが、あの話をするのはいやかね」

周平は思い出して、聞いてみた。

「いまにしますわ」

お澄はぎくりとしたように真っ赤になって、口を濁（にご）してしまう。

「ずるいなあ、人の話ばかり聞いて」

「すみません」

梅雨（つゆ）があがりかけると、どうしても蚊帳（かや）を吊らなければ寝られなくなってきた。

周平はつとめてお澄を女だと思わないことにしてきたが、一つ蚊帳に寝るようになるとあぶなそうだなと考えていたとおり、案の定（じょう）お澄の甘い肌のにおいに悩（なや）まされ出すようになった。悪いことには、お澄はここで暮すようになってから、次第に気持が落着いてきたらしく、とげとげしかった顔にもいつかふっくらと肉づいてきて、ことに健康な夏の女はみずみずしさを増す、さわやかな浴衣一重（ひとえ）の上にえがき出されてくるみなぎるような若い女の肢体（したい）は、なまめかしさをかくそうにもかくしきれない。

そういう甘い女体がすぐ手のとどくところに、行儀よく枕をならべているのだ。煩悩（ぼんのう）をおこすなといっても、それははじめから無理な話である。

それでも、周平は一日中材木運びの激しい労働をしてくるので、寝つきよく眠ってしまえ

ば朝までひと眠りだから、できるだけ寝つきよく眠ってしまうことにしているが、ひょっとして寝そびれることがある。

一度女の肌のにおいが鼻につき出すと、もういけない。

一体お澄はおれが煩悩をおこしたら、おとなしくいうことをきくだろうかなどと考え出す。お澄は自分の身に死にそこないだというひけ目があるらしく、決して男に媚態など見せないように用心している。が、嫌われていないことだけはたしかなのだ。嫌いならこうして一つ蚊帳の中へ寝られるはずもないだろうし、第一いっしょに暮すようになった翌日から、男の下のものまで平気で洗濯してくれている。

それにしても、お澄のほうはこっちをどう考えているのか。お澄もまたこのごろはひどく寝つきがよく、枕につくとすぐ軽い寝息を立てはじめる。この男は大丈夫だと安心しているのか、それとも周平という男になんの興味も感じないのか。好きでも嫌いでもないという女に、こっちから手を出すのは男として周平の自尊心がゆるさない。

しかも、この女には死のうとまでした過去の古傷がある。いまだにその男を忘れかねていて、その場になってへたに反抗でもされると、それこそ引っこみがつかなくなる。

そんなことを考えていると、急に興ざめてきて、いつか眠ってしまうのがそういう時の例になっていた。

夢の間に

それは六月も半ばをすぎた或る暑い夜だった。

いつも行燈をつけっ放しで寝ることと、枕についてからは口をきかないのが、いっしょに暮すようになってからのいわずかたらずの二人の習慣になっている。間違いをおこさないための用心だったが、その灯のあるのさえいっそう蚊帳の中が暑苦しい感じで、さすがにお澄も寝つかれないらしく、こっちへ背を向けたままいつまでも軽く団扇を使っていた。

その団扇の音がふっとやんだと思うと、悪夢にでもおそわれたか、急に悲しげにうなされ出した。

「おい、どうしたんだ」

びっくりして、周平は手をのばし、お澄の肩をゆすってやった。

くるとこっちへ寝がえりを打ったお澄は、

「あたし、うなされたかしら」

と、浴衣の袂で額の汗を拭きながらいう。

「うむ、締めつけられるような声を出していたぜ」

「そうですか。こわかった、あたし」

まだ悪夢からさめきらないようなうつろな目を、ぽかんと大きく見ひらいている。

その胸から上のなんの用心もしていない、妙にぐったりと寝みだれた姿に、周平はむらむらっと男心を掻きたてられ、やにわにのりだして行くなり、力一ぱい肩を抱いて口を口の上へ押しつけて行った。

「あっ、だめ、あたし」

お澄ははっと体じゅうを石のようにしながら、

「だめなんです。あたしは汚い女なの」

と、口を逃げようとする。

「いいんだ、かまわぬ」

一度火のついた周平の征服欲はもう自分で消しようがなく、がむしゃらに女の口を追って口でしっかりふさいでしまうと、お澄は強いて争おうとはせず、あとは案外素直に目をつむって、男のなすままにまかせていた。

それは、二人ともとうとうくるところへきてしまったという感じで、どこにも無理や不自然さはなく、すべては終った。強いていえば、お澄はさすがに恥かしかったらしく、あまり感情は表に出さず、ただおとなしく男に従っていたという風に見える。周平はそれがちょっと気になったので、

「お澄、お前まさか後悔なんかしちゃいないだろうな」

と、念を押すように聞いてやると、

「そんなこと――」

お澄はむしろ安心したように、じっと男の胸へ顔を伏せて、そのまま眠ってしまったのである。

しかし、翌朝いつものとおり朝の膳にさし向いになったお澄は、いつもと少しも変らない物静かな顔色で、昨夜のことなどまるっきり忘れてしまったようである。こっちがひそかに、もう他人ではないというたのしさを持っているだけに、おかしな奴だなあと思い、

「おい、昨夜は暑い晩だったなあ」

と、わざとからかうように顔を見てやると、黙ってわらいながら赤くなって、そんな冗談が満更いやというわけでもないらしく、体じゅうでういういしく受けとめていた。

つまり、お澄はどうもそういう内向性の女のようである。

妙なことには、その日周平は杉田屋で働いていても、あいつ今ごろ逃げ出していやしないかなと、ふっと不安になることがあった。

馬鹿な、逃げるくらいならもうとっくに逃げている。そうは思うのだが、絶対に逃げないという枷はかかっていないのだ。いまだに自分の身もとは一度も口にしていない女だけになんともたよりない。

そして、こんな心配をするようじゃ、おれのほうがよっぽど首ったけらしいぞと、周平は我ながら変な気がしてくるのだ。

その癖、夕方家へ帰って、お澄が甲斐甲斐しい襷がけで水仕事をしているのを見ると、なあんだと安心して、それが当然なような気もしてくる。

その夜、お澄ははじめて、これ消してもいいでしょうとことわって、行燈の灯を消してから、蚊帳の中へ入ってきた。

「お澄、おれは今日、ひょっとすると留守にお前が逃げ出していやしないかと、心配していたんだ」

真っ暗な蚊帳の中で、周平はお澄の肩を引きよせながら、正直にそれを口にした。顔は見えないが、その顔がちゃんと見えているような気がするからふしぎである。

「どうしてなの？」

「どうしてってこともないが、つまりそれだけおれのほうがお前に首ったけということになるんだろう」

「あんなこと——。あたしは逃げ出したって、帰る家なんかどこにもありません」

「そうか。しかし、おれはいつもお前があんまり寝つきがいいんで、お前はどうしてもおれが好きになれないかなと、悲観（ひかん）していたんだ」

「好きでしたわ」

「そうかなあ。おれは時々寝つかれなくて、困ることがあったが、お前は知らん顔をしてよく眠っていたぜ」

「じゃ、あなたはあたしが毎晩団扇であおいであげたの、知っているかしら」

「ふうむ」

これはちょっと意外である。

「おれが眠ってからあおいでくれたのか」

「あなたは眠ってから昼間の疲れが出ると見えて、とても寝苦（ねぐる）しそうなの」

「そうか、知らなかったなあ。どうして目がさめている時はあおいでくれなかったんだ」

「余計なことをするといって叱（しか）られるのが怖かったんですもの」

そうか、自分に身投げ女というひけ目があるから、始終（しじゅう）感情を殺して、控（ひか）え目にと気をつかっていたのだろう。

「おれは人を叱るどころか、根は甘すぎるお人好しなんだ」

「嘘——、本当は情（じょう）の深い人」

「一生亭主に持ってやろうと思うかね」

「あたし、そんないいおかみさんになれますかしら」

「悪いおかみさんだっていいんだ。おれのそばにいてくれさえすりゃ」

「本当——。一生ここにいてもいいんですね」

「いいとも——。おかしなもんさ。おれは河童でお前をおどかして、ここへつれてきて、とうとう自分が河童になってしまったんだ——。そら、河童だぞ」

周平は思い切りお澄の肩を抱きながら、そんな寝物語（ねものがたり）をしたのもその晩がはじめてだった。

こうして身も心も一つの夫婦生活が、その夜からはじまったが、近所でははじめからそうだと見えていたから、べつに改めて噂の種にもしていなかったようである。

お澄は周平にとって全くいい世話女房だった。

ただ一つ、そんないい世話女房になっていながら、なにかあるに違いない身の古傷については、忘れてしまったように打ちあけようとはしない。周平もまたそれを承知で女房にしたのだから、お澄が自分から話す気持になるまで、こっちからはもう聞かないことにしていた。

ふしぎなもので、本当に夫婦になってここが自分たちの愛情の巣だとなると、いつの間にか世帯道具らしいものが一つずつふえて、なんとなく家らしくなって行く。周平は律義に毎日杉田屋へ通うから、晦日と十四日にはきちんと勘定が入るし、お澄は外出ぎらいで絶えず人仕事をしているから、夫婦の生活もちゃんと安定していて、小遣銭に困るということもない。むしろ、お澄は毎月いくらかずつ金を残しているようでもある。

「おい、この分なら子供ができても、大丈夫やって行けそうだな」

「ふ、ふ、あたし子供ができるかしら」

「できないことはなかろう。できるように河童のほうも毎日御精勤なんだからな」

「いやですわ、またそんな」

とにかく、もとの侍という身分にあまり執着のない周平は、毎日がたのしかった。

六月、七月と甘い日が夢のようにすぎて、八月も十五夜が近くなると、江戸も朝晩はめっきりと秋めいてくる。

周平はその日、店の用で浅草並木町の材木屋へ勘定を取りにやらされた。人間が律義なのと、筆も算盤もひと通りは立つので、このごろは帳場の手つだいもして調法がられている

のである。

勘定をもらって表へ出たとたん、そこに倒れている老婆が、

「誰か、誰かあの人をつかまえて、――お願いです」

と、必死に叫びながら、起きようとするのだが、倒れる時膝を打ったと見えて、足が立たないままに夢中でいざっているのを見た。

「どうした、お婆さん。怪我をしたか」

周平がそばへ行って抱きおこしてやると、身なりも小ざっぱりとしている五十あまりの町家の老婆で、

「親方、あそこへ行く浪人をつかまえてください。たのみます、早く」

と、目を血走らせている。

人の出盛る雷門から二丁とは離れていない表通りだから、たちまち物見高い弥次馬がたかってきて、もうそんな浪人者らしい姿はどこにも見えない。

「金でも取られたのかね」

「違います。畜生、時次郎の奴、せっかくつかまえたのに」

老婆ももう追っても駄目だとあきらめたらしく、歯ぎしりをして、袖口を目にあてた。

「知っている浪人なんだね」

「はい、敵でございます」

「敵――」

老婆は立とうとしたが、どうしても立てないようだ。

「どれ、手を貸してあげよう」

「すみません」

やっと立たせて、肩へつかまらせ、着物についた泥埃（どろぼこり）を払ってやったが、この分ではとても歩けそうもない。

「お婆さんの家は遠いのかね」

「いいえ、すぐそこの三間町（げんちょう）なんです。もう自分で歩けますから――。御親切に。どうもありがとうございました」

「いや、それじゃ歩けそうもない。近くならわしがおぶって行ってあげよう」

「いいえ、それではあんまり」

「なあに、おふくろさまにしてやれなかった親孝行の真似ごとを、お婆さんにさせてもらうんだから、伜（せがれ）だと思って、ちっとも遠慮はいらないんだ」

力仕事にはなれている周平だから、軽々（かるがる）と老婆をおぶって歩き出す。

弥次馬はみんなよかったなあというような顔をして見送っていた。

宿縁

「親方はうれしいことをいってくださる」

老婆は道々背中の上で涙をこぼしていた。

「親孝行な親方にくらべて、あたしどもの娘はなんという親不孝な奴か」

「娘さんがどうかしたのかね」

「はい、聞いてください親方、あたしどもは去年の秋まで東海道の藤沢で、柏屋（かしわや）という旅籠屋をやっていました。お澄というひとり娘がありまして、これがつい親馬鹿で甘やかせてわがまま一杯に育てたもんですから、年ごろになっても、あれはいやだ、これはきらいだと、なかなか養子を取ろうといわないんです」

はてなと、周平は思わず聞き耳を立てていた。

「そのうちには当人の気に入った養子も見つかるだろう、まだ子供なんだからと、十八になるまで箱入り娘にしておいたのが、あたしどもの親馬鹿で、去年の秋中村時二郎という、親の敵討の侍が泊って、あいにく風邪をひきこんだとかで、十日ばかり家へ泊りこみました。口先のうまい、男前の奴でしたが、これがいつの間にか娘を騙（だま）して、様子が少しおかしいなと気がついたその翌朝、二人で駈落（かけお）ちをしてしまったんです」

「どうしてその娘さん、夫婦にしてくれと、一度ぐらい親に相談してみなかったんだろうね」

「それが時二郎の奴の手なんです。親の敵討に出ていて、まさか娘を嫁にくれとはいえないし、またあいつは本当に娘を嫁にもらう気なんかあるもんですか。ただ敵討だというふれこみで若い娘を釣（つ）って、家の金を持ち出させ、さんざん娘をおもちゃにして、あきれば地獄宿（じごくやど）

へでも叩き売る。それを商売のようにして歩いている女たらしに違いないんです」
「なるほど——。本当の敵討なら、常識からいっても、娘をつれて駈落ちというのは少しおかしいね」
「娘が持って出た五十両の金は、惜しいとは思いません。親の身になってみれば、みすみすそんな男に引っかかって、末はすてられる娘の身が不憫で、心配で、世の中が真っ暗になってしまいまして、それで、親父さまとも相談して、せめて女衒などの手にかからないうちに、娘の身だけでも助けてやりたいと思い、店を一時親類の者にあずけましてね、夫婦してすぐ江戸へ出てきたんです」
「江戸へ出ていることはたしかなんだね」
「はい。どうせ本当の敵討じゃないんですから、若い者が金を持って遊ぶには江戸が一番おもしろいところだし、易者にも何度も観てもらいました。やっぱり、江戸だというんで、九、十、十一、十二と、まる四月間、夫婦して江戸じゅうを足を棒にしてさがしまわりましたが、どうしても見つからないんです。そのうちに、今年の盆すぎでなけりゃ見つからないという易が出たもんだから、それじゃただ遊んでもいられないと、この正月から三間町に一膳飯屋の売り物があったんで、夫婦してそれをはじめることにしました。今年のお盆は先月すぎたのに、まだ手がかりさえつかめない。阿父つぁん、世の中には神も仏もないんだろうかと、あたしが愚痴をこぼしますと、つれあいがな親方、神や仏をうらむもんじゃない、わし等はともかくもこうして今日を無事にすごしている、娘は今ごろどんな辛い目にあっているのか

考えてみろとな、親方」
くすんと鼻をすすりあげている背中の老婆の話を聞きながら、こいつ妙なことになってきたようだぜと、周平は目がうるんできてしようがなかった。
「それでな親方、あたしはその日からまた観音さまに日参をはじめました。その功徳とでもいうか、さっき観音さまへおまいりして帰ってくると、あの材木屋の前でばったり中村時二郎の奴に出逢ったじゃありませんか。あたしはもうかあっとなって、中村さん、なんにもいわんで、娘だけかえしてくださいと、夢中で袂をつかむと、時二郎の奴びっくりして、誰だお前は、なんだ婆あかと、憎い奴、あたしを力一ぱい突き飛ばして、雷門のほうへ逃げ出してしまったんです」
「惜しいことをしたなあ、わしがもうひと足早ければ、そいつをつかまえてやれたかも知れなかったのにな」
周平はなにかむらむらっとその中村という奴に激しい怒りを感じてくる。
「いいえ親方、もう江戸にいるとわかったからには、不動さまにお願いして、金縛りにかけて、きっとあいつをつかまえてやります。ただ、今日の様子では、お澄はもうあの男といっしょにいないにきまっています。どこへ売り飛ばされてしまったか、それを思うと、身から出た錆とはいいえ、かわいそうで」
「やっぱり阿母さん、お盆すぎという易は当っているようだね。この分だと近いうちにきっとその娘さんに逢えるようになるかも知れない」

「はい、心配には心配ですが、あたしもこれでやっと張合いが出てきました。みんな観音さまのおかげです」

背中の老婆に教えられて、三間町の横丁へ入って行くと、その縄のれんの飯屋はすぐにわかった。藤沢の家を忘れかねるが、おなじ柏屋という屋号をつけているようである。

周平はびっくりして出てきた柏屋仁兵衛に老妻をわたし、ぜひ寄って行ってくれという老夫婦に、主人の使いに出た途中だからとことわって、わざと名も告げず、逃げるように店を出てきてしまった。

——お澄はたしかにあの老夫婦の娘にちがいない。

そう思って見てきたせいか、お澄は父親の仁兵衛のほうに余計おもかげが似ていたようだ。さて、どうしたものかと、周平は歩きながらすっかり考えさせてしまった。むろん親たちをいつまで心配させておくわけには行かない。

しかし、お澄は両親が江戸へ出てきているのを知っているのだろうか。いや、どうしてお澄は中村時二郎に棄てられたことを、いまだに自分にひた隠しに隠しているのだろう。

男に騙されて、親の金を持って家出をした。その男に棄てられて、今さら親にあわせる顔がないから、娘心の一途さから身投げをしようとした。ただそれだけのことなら世間にありがちなことで、およそこっちもそうだろうと、あの晩見当をつけて家へつれてきているのだから、夫婦になってすでに三月もたっている仲で、そう打ちあけにくい話でもないはずである。

すると、もっとなにかほかに話しにくい事情があると見なければならない。

とにかく今夜はよくいって聞かせて、その事情を聞き出してみよう。すべてはそれからのことだ。

周平はそう考えて、まず杉田屋へ帰って使いの用をすませ、いつもより早く元町の家へ戻ってきた。前の紺屋の広場にまだ黄ばんだ夕日がさしている時刻である。

台所の障子をあけて、ひと足土間へ入ると、

「誰っ、——どなた」

いきなり座敷から、日ごろめったに大きな声は出さないお澄の咎め立てるような甲高い声が聞えてきた。

「おれだ、お澄」

「ああ、あなたなの」

なにかほっとしたような声になって、いそいで立ってきて、そこの障子をあけ、

「お帰んなさい」

と、いつもの声で出迎える。

見ると青ざめたような顔をして、妙に目が上ずっているようだ。

「どうかしたのか」

雑巾で足を拭いてあがって行くと、

「よかった、あたし」

と、浴衣を出してきながらため息をついている。

「留守になにかあったのか」

「ねえ、表に人相のよくない、三十二三のどこかぞろりとしたやくざっぽい男がうろついていなかった」

こっちが仕事着をぬいだうしろから、浴衣を着せかけながら、声をひそめるようにして聞く。

「さあ、気がつかなかったな。その男がどうしたんだ」

「あなた、怒らないでね――。怖い、あたし」

お澄は急に背中へしがみついて、顔を押しつけてくるのである。

月澄む

「まあ落着いてわけを話してみろ。前はどうであろうと、今はお前にはこうしておれという亭主がついているんだ。怖がることなど少しもない」

周平はお澄をなだめて、ともかくも自分の前へ坐らせた。

「怒らないでくださいね」

「大丈夫だ。話を聞いて怒るくらいなら、おれははじめからお前を女房などにはしない。わかっているはずじゃないか」

「それはあたし、いつもうれしい、ありがたいと思っているんです」

お澄はたまらなくなったように、いそいで袂を目へ持って行く。

「さあ、話してごらん」

「あたし、その男に騙されて、女衒の手にかかってしまったんです」

「どこかへ売られたのか」

「ええ家から持って出たお金がなくなってしまうと、あたしにしばらく女中奉公をしてくれというんです。変だとは思いました。親の敵をさがしているんだというのに、毎日お酒をのんで帰ってくるし、妙な女がたずねてきて、あたしはその男の妹だということになっていたり――、でも、まさか地獄宿へ売られるんだとは気がつきませんでした」

「それでどうした」

「あたしは料理屋の女中だとばかり思っていたのに、山六という男につれられて向うへ行くと、その日から客をとれというんです。あたしはそんな約束ではなかったというと、冗談をいうな、こっちは山六の手から二十両という金を、ちゃんとお前の男にわたして、証文まで取っているんだと、それを目の前へ突きつけられました」

「うむ」

「死んだってあたしいやです、客を取るなんて。だから、どうしてもいやだと強情を張ると、折檻場へつれて行かれて、逃げられないように素っ裸にされ一晩一日体じゅうが傷だらけになるほど、ひどい折檻をうけました。親にそむいた罰だったんですわ」

お澄は今さらのように、しょんぼりうなだれていた。

「そうか、あの晩の首筋のみみず腫れは、体にもあったわけなんだな。しかし、よくそんなところを逃げ出せたなあ」

「その日の夜になって、やっぱりおなじような折檻をうけたことがあるという女が、そっと着物を持って助けにきてくれたんです。よくこれまで我慢をした、あたしも逃げるから、お前さんも逃げるがいい。そのかわりこんどつかまると命がないから、つかまっちゃ駄目だよと、念を押されました」

「それはそうだろうな」

「あたしははじめから死ぬ覚悟だったけれど、一言その憎い男に恨みがいってやりたいと思って、夢中で家へ行ったんです。けれど、その男はもうどこへ行ったか、家は空家になっていました。口惜しいけれど、自分が馬鹿だったのだからしようがないと思い、あの大川端へ行って立っていたんです」

「どうしてお前、今までその話をおれにしなかったんだ」

「すみません。あたしそんな金の心配まであなたにさせては、申訳ないと思って、いいえ、本当はあなたと別れるようになったら、どうしようと、思ったもんだから」

「つまり、わしにはそんな金はできそうもないと思ったんだな」

「ごめんなさい、あなた。あたし山六にさえ見つからなければいいんだと思って、なるべく表へは出ないようにしていたんだけれど、さっきつい買物に表通りまで出ようとしたら、怖

い怖いと思っている山六らしい男が、向うから歩いてくるんです。びっくりしてしまって、あわてて家へ駈けこんだところへ、あなたが帰ってきてくれたんです」

やっと安心はしたようなものの、考えて見ればこれで事が片づいたというわけではない。今にも山六が押しかけてきたらどうしようというように、お澄はおろおろと表へ聞き耳を立てている。

「お澄、もうなにも心配することはない。話はおれがきっとつけてやる。その地獄宿というのはどこなんだね」

「両国薬研堀の蔦屋という家なんです」

「その二十両の片さえつけば、お前両親に逢って、不孝の罪をわびる気はあるんだろう」

周平は念を押すように聞いてみる。

「ええ」

どうしてそんなことを聞くんだろうといいたげな、不安そうな顔つきである。

「実はな、わしは今日偶然に、お前の両親じゃないかと思われる人たちに逢ってきたんだ」

「えっ」

「お前の家は藤沢の柏屋という旅籠屋で、阿父つぁんは仁兵衛といいやしないか」

「どうして、どうしてそれをあなたが」

「やっぱりそうか。縁というものはふしぎなもんだな。それだとおれは、お前の阿母さんを今日、おぶって家までつれて帰ってやったことになるんだ」

「まあ」

「よし、すぐに支度をしなさい。なにもかも今日一度に片づけてしまおう、話は道々でもできるからな」

　周平が立ちあがろうとすると、

「待ってあなた——、あたしなんだか怖い」

　お澄はいきなり胸へしがみついてきた。

「ばかだなあ。親に逢いに行くのに、なにが怖いんだ」

「そうじゃないんです。どんなことがあっても、あたしを、あたしを棄てちゃいやだ」

「なにをいうんだ。おれはこんなにお前を可愛がっているじゃないか」

　そんな子供のような心配をするお澄の肩を、周平はしっかり抱いて、ついでにわらいながら頬ずりをしてやってから、

「さあ、もういいだろう」

　と、立ちあがり、押入れの中から自分の行李を持ち出した。

　その行李の底に、国から持って出た二十両の死金が、胴巻に入れたまましまってあるのだ。

　その胴巻を取り出した時、がらりと台所の戸があいて、

「ごめんよ」

　と、いう野太い男の声がした。

「きたわ、あなた」

　お澄がふるえあがりながら、すがりついてくる。

「心配するな、お澄、この胴巻をお前しっかり腹にまいておけ、わしの死金が二十両入っているんだ」

　周平は胴巻を素早くお澄にわたして、そこにしまってあった愛刀を取り、台所へ出て行った。

　なるほど、三十がらみの目の鋭い、女衒だといえばああそうかと、すぐうなずけるような男が一人突っ立っている。

「わしはこの浪宅のあるじ藤里周平だが、お手前は誰かな」

「へえ、あっしは女衒稼業の山六といいやしてね、旦那に用のあるもんじゃござんせん」

　山六は薄らわらいをしながら、ちょいと頭をさげてから、

「おい、そこのお澄さん、お前こんなところへかくれていちゃいけねえじゃねえか。お前さんには二十両という大金がかかっているんだ。さあ、おとなしくあっしといっしょに、薬研堀へ帰ってくんな」

　と、奥のお澄に声をかけて、いまにも踏んごんで行きそうな恰好をする。

「待て、お澄はいまは故あってわしの家内だ、その身代金の二十両は改めてわしから払うから、証文を出してもらいたい」

「そいつは旦那いけません。お澄は一度金で買われて、薬研堀の蔦屋の女ということになっている。その蔦屋を無断で逃げ出した女なんだ。旦那がお澄を女房にしたければ、蔦屋のほ

うへ掛合ってもらえばいいんで、ここは一つおとなしくお澄をあっしの手へわたしておくんなさい。それでないと、旦那も大金のかかった女をかどわかしたということになって、おだやかじゃなくなります」

　山六は女衒らしい理窟をこねて、半分は脅しにかけようとする。

「そうか、ここで金を払っても駄目だというのか」

「へえ、金さえ出せば女は自分のものだというようなあ筋が通りません」

「しかし、お前だって金でこの女を買って、蔦屋という地獄宿へ売ったんだろう。しかもこの女は自分の知らない間に、お前たちに売り買いされているんだ。それが金ですまないというのは、どういうわけだね」

「旦那、あっしはそんな旦那の屁理窟を聞きにきたんじゃありません。この女はもうちゃんと蔦屋へ証文の入っている女なんですぜ。出るところへ出れば、旦那はかどわかしの罪におちる。それでもいいっていうんですかい」

「その証文の署名人はなんという奴だ」

「それこそ余計な話というもんです。そんなことは蔦屋へ行って掛合っておくんなさい」

「よし、それでは蔦屋のほうへ掛合うことにするから、お前は帰れ」

「なんだと――」

「お前はただの使い奴のようだ、話にならん。帰りなさい」

「ようし、そっちがそう出るんなら、こっちも腕ずくでお澄をもらって行くぜ。出るところ

へ出れば、お前さんは口のきけねえ人間なんだ」

「よろしい、口がきけるかきけないか、このおさまりは白洲へ出てきめることにしよう。そのほうがこっちも望むところなんだ」

「吐かしゃがったな」

　山六はぐいと右手をふところへ突っ込んで、匕首を抜こうとしたようだが、周平が愛刀を引きつけたのを見ると、一人ではかなわないと見たのだろう。

「中村さん、ちょいと手を貸してくれ」

　と、表へ呼んだ。

「あなた――」

　中村と聞いて、お澄が思わず周平の腰へしがみつく。

「心配するな」

　戸口を見ていると、ぬっと中村時二郎の白い顔が、土間へ入ろうとして、こっちを見た。

「やあ藤里周平――」

「なんだ、貴公は野崎弓二郎だな」

「いうな、兄の敵、表へ出ろ」

　弓二郎は周平を闇討にしようとして、あべこべに斬られた野崎甲之助の弟である。

　察するに、国もとにいた時から身持ちの悪い男だから、間もなく自分も、主家を浪人して、中村時二郎の偽名を使い、敵討を種に悪どい女たらしをやっていたらしい。

「弓二郎、兄の敵討なら、なぜ中村時二郎などと偽名を使って悪事を働いて歩くのだ」

「黙れっ黙れっ、兄を斬って国もとを逐電した卑怯者、敵を討つから表へ出ろ」

「よし、今出てやる、身支度をして待っておれ」

「この期に及んで逃げるなよ」

弓二郎は山六に目くばせして、紺屋の広場のほうへ出て行く。

「どうしよう、あなた」

事件がとんだほうへ飛火したので、お澄はただおろおろするばかりだ。

「落着いてここにいなさい。わしはあんな小悪党に負けるような弱虫とは違う」

そこへ家主の遠州屋総兵衛が顔を出して、

「どうしなすった藤里さん」

と、心配するので、

「ちょうどいい大家さん、わけはあとで話すから、お澄をしばらくあずかってください」

そういいおいて、周平は紺屋の広場へ出て行った。

弓二郎はもうちゃんと襷鉢巻姿で待ちかまえている。あたりはすでに黄昏れかけて、仲秋明月を明日にひかえた十四日の月が、東の空にぽっかりとあがって、水のように光り出していた。

近所の者たちがみんな家の軒下まで出て、こっちを見ているようだ。

「兄の敵、藤里周平、こい」

弓二郎はあくまでも敵呼ばわりをして、同情をあつめようとする。

「弓二郎、敵呼ばわりは見苦しいぞ、諸人のために周平、その相棒の女衒山六といっしょに今夜は貴様を斬る。抜け」

周平は叱咤するようにきめつけて、さっと抜刀した。

「うぬっ」

同時に弓二郎も抜きあわせたが、腕では到底問題にならぬ男である。

「斬るぞ、弓二郎」

一喝して、周平の構えが上段にかわると、その凄じい気魄にぎょっとしたらしく、

「助けてくれ」

ひとたまりもなく必死に飛びさがって、ばたばたと表通りのほうへ逃げ出す。

「中村さん、おい、中村さん。それじゃ約束が違うじゃないか」

山六が喚きながらあとを追って行った。

――情ない奴。

周平は苦わらいをしながら、この無様な恰好を見送っているうしろから、

「あなた」

お澄が恥も見得も忘れて飛びついてきた。

明るい月かげの広場である。

藤の茶屋

うす化粧

風呂あがりの浴衣の前をちょっとあわせただけのしどけない姿で、おまきは縁側へ片膝立ちにくつろぎながら、団扇を使っていた。

「重吉が見たら、また叱られる」

むっちりとした豊かな胸乳が、たるみ勝ちな衿からのぞけばのぞけそうなのに気がついて、ふっと一人で微笑したが、重吉なら叱られても怖くないし、その重吉よりほかに、今は誰も煙ったい者はいないおまきである。女ってひとりになると、こんなに気楽になってしまうものかしら、と自分でもふしぎな気がした。

病勝ちな良人だったので、嫁ずいてから足かけ九年、まるで、病人のおもりをして暮らしたも同じだから、早くから、家督は弟にゆずってこの城下外れへ隠居し、ただ遊んでいて

もしようがないからと、おまきは良人にすすめて、三年前から休み茶屋をはじめることにした。その時、里の老僕の伜で、小さい時からよく気心の知れている重吉を下男に呼んで、おまきは店へ出る時は大丸髷に紅だすき、なるべく武家育ちの気位は棄てて茶汲み女になろうとつとめてきたが、それでも良人の生きている間はこんな気楽な恰好はできもしなかったし、また決してしようとも思わなかった。

この正月、良人が亡くなって、百カ日をすましたころから、店は毎日いそがしい季節に入った。店の前に見事な藤棚があって、わきに吹井戸が清冽な水を流している。その藤棚が明るい紫の花房を垂れて咲きつづける春から初夏へかけて、人は誰いうとなく藤の茶屋とよび、めっきり休み客がふえるのが毎年の例だった。それが今年は城下から顔見知りの藩士たちまでわざわざ藤見にきてくれたりして、毎日立ちどおしで茶を運ばなければならぬほど繁昌した。

おまきはひそかに知っている。行きずりの旅人は別として、わざわざ藤見にきてくれる顔見知りの中には、おまきのうす化粧、それを狙ってくる者も少なくない。いいじゃないか、これから再婚するとすれば、どうせ子供のある家か、年寄小姑の多い家へいって、さんざん苦労しなければならない。苦労は、長患いの亡夫のおもりだけで、もうたくさんだ。幸いこの店のお蔭で、本家へも実家へも迷惑はかけず、私一人ぐらいは楽にやって行ける。そのためのうす化粧なのだもの、誰に遠慮気兼ねはいらないと思い、毎朝鏡に向うたびに、濡れぬれとした大丸髷、後家になってから二十七という年より三つ四つ若がえったのではないかと、我ながら明るい色艶を増してきた面立ち、肌をぬげば、白々としてみなぎる年増盛りの光沢に、時々はうっとりとさせられるおまきだった。

そんな春の日、店の後片づけを重吉に任かせ、風呂あがりの爽やかな体を、今日のように縁側にくつろいで、なにげなく足の爪を切っていたことがあった。店をしまって、裏庭へまわってきた重吉が、

「お前さま、すっかり変ったな」

のそりと前へ立ちながら、睨みつけるような目をしたのである。

気がついて見ると、やっぱりしごきを軽くまきつけただけのくつろいだ姿で、誰も見ていないと思う気やすさから、衿からも裾からも、ついしどけなく肌がこぼれ、なにか遊女めいた、武家の女房には決してない恰好だった。自分でもはっと気がついて、頬が赤くなったが、ひどく胸にこたえただけに、生意気な、という気が先に立ち、

「重吉、その目はなんです。かりにも主人を睨むなんて、女だと思って、お前、私を馬鹿にするのですね」

と、思わず坐りなおした。

どっちかといえば、口が重くて、ぼうッとしたところがあり、年も二つ下の二十五だった。体こそ見あげるように大きかったが、小娘のころから追いつかい、今も台所用から家の中一切、店の買い出しまで、黙々と二人分も三人分も働いている調法な下男で、弟のようにたよりに思うことはあっても、男とは思っていない。だから良人が死んでからも、平気で二人

きりで一つ屋根の下に寝起きしていられるので、この男にたいしてははじめから暴君になり切っているおまきだった。

しかし、重吉はここへ手伝いにくるまでは侍志願で、実家では若党をつとめていた。そういう目に、女主人がだんだん武家のしつけからくずれて行くような姿が、ふしだらに見えて、気に入らなかったのだろう。

「睨んだじゃねえけんど、よっぽどつつしまなけりゃ、お前さま後家さまだから」

「じゃ、いつ私が世間から、後ろ指さされるようなふしだらをしたというの、重吉」

「そんな、べつに――ただお前さま、きれいすぎるから」

躍起になって詰めよられると、さすがにいいようがないらしく、どぎまぎと目を逃げる重吉なのだ。

「嘘おいいなさい。ちゃんとわかっています。誰も見ていないところだから、ひとが少しくつろいでいるのに、お前はいつも私に、尼さんのような心でいろ、といいたいんでしょう」

くやしくて、というより相手が重吉だから、私が悪かった、と素直に頭を下げる気にはどうしてもなれない。つい涙声になって、横車を押し切ろうとする。

「そんな、おら、そんな、お前さまが油断さえしなけりゃ、おら、なにも――」

とうとう重吉は負けて、持てあましたように、のっそり台所へ逃げこんでしまった。

そんなことがあってから、ああまた重吉に叱られる、とよく思うのだが、おまきの我がままはなおらず、このごろは一層平気になってうっかり重吉に背中を流させたり、肩をたたか

せたり、そんな大胆な真似までするようになってしまった。そしてこの忠義者は、こんな私のきれいな肌を見ても、女と思えないのかしらと、いい気になってそんないたずらっぽいことを考え、顔を眺めることさえあるのである。

いさかい

「さあ、重吉に叱られないうちに――」

もう残暑で、裏の唐黍畑をはたはたと、渡ってくる夕風は、さすがに涼しい。重吉は高崎の城下へ菓子を仕入れに行って留守だったが、湯ほてりの肌もどうやらさらりと汗がひいたので、おまきは団扇をすて、浴衣の前を押えながら立ち上った。

誰がいなくても、そこは女だから、庭へ背を向け、細帯を締めようとしながら、ふっと人の気はいを感じて、重吉かしら、となにげなく振りかえった。違った顔が、燃えるようなけだものの目をして、

「あっ――重吉、重吉」

救いを求めた時には、もう縁へ飛びあがり、背後から抱きすくめて、右手が素早く口をおおっていた。

「おまきどの、わしだ。声を立ててはいけない。村越だ」

耳もとへ口を寄せて、村越と名乗ったら、おとなしくいうなりになるとでも思ったのだろ

うか、そういう息が酒くさいのも、身の毛がよだつほどいやらしかった。藩中の重役の次男坊村越高次郎という道楽者で、この春から取巻をつれてはよく店へ遊びにくる。酒をのんで、散財をして、時には狸寝入りをして、一人であとへ残った。実家の者や本家の義弟の名を口にして、必ず含んでおくからと恩にきせる。下心はわかりすぎるほどわかっていたが、相手は重役の伜だし、こっちは稼業をしている身だからと、通じたような通じないような、ほどよくわらって、決して、恥はかかせず、そういう時重吉がいてくれるので、力強くもあり、安心して、あしらっていられたのだ。

それをこの押しの強い男は、どう勘ちがいしてしまったのだろう。いや、重吉の留守を狙って、計画的に押しかけてきたものか、それにしても、こんなふしだらな恰好で涼んでいるところを襲われたのは、全く不覚だった。

「どうしよう。死んでも、手ごめなんかにされたくない」

真っ青になりながら、身をもがき、必死にのがれようとしたが、帯をしめない浴衣はたちまちはだかって、肩をすべり、男は白々とした胸を狂気のように抱きすくめ、じりじりと、もう黄昏の色濃い座敷のほうへ押しこんでくる。救いを求めようにも声は立てられず、浴衣がずりおちて、はっと身がすくんだとたん、そのまま野獣の力で捻じ伏せられてしまった。

「重吉――重吉」

わずかに手がすべった隙に、二度呼んだ。あわてて高次郎は口を押えなおして、のしかかるようにしたが、その頬がぴしりと鳴って、

「なにするだ」

ああ重吉が、と思った時、高次郎の体が横っ倒しにどすんところがった。さすがに、ころがるより早く飛び起きて、

「貴様、下郎のくせに、無礼な」

高次郎はかっと刀の柄に手をかけた。

「お前さま、身分に恥じねえのか」

むっつりと立って睨んだ重吉の目が、火のように燃えている。

「黙れ、おれに盾をつくと、ためにならんぞ」

「いいから、黙って帰れ」

「そうか。おれがこのまま黙って帰っても、貴様、いいんだな」

「いいだ。帰らなければ、おら、お前さまを締め殺してやる」

無手で、じりじりと迫る重吉だ。身分も刀も問題にしていない、それほど怒っているのである。気押されて縁側のほうへさがりながら、

「よし、帰ってやろう。おまき、あとでもう一度よく考えておくがいいぜ」

せせら笑って、少しも恥じようとはせず、かえって脅迫するようなことをいう鉄面皮な高次郎だったが、重吉の馬鹿正直な激怒にはかなわなかったらしい。そのまま庭へおりて、わざと悠々と帰って行った。

いそいで浴衣を拾って着て、横坐りに襟前をしっかりと押えながら、おまきはうなだれて、

まだせつなげに肩で息をはずませていた。髷の根ががっくりと落ちて、痛々しいというより、なんとなくしどけない嬌めかしさが匂いこぼれる。

　じろりと見ていた重吉は、縁側においてある帯を一まとめに拾ってきて、黙っておまきの前へおいた。もう一度縁側へ出て、仕入れてきた品物の、大きな風呂敷包を店へ運んで行き、ごそごそと品分けをしている。

「怒っているのかしら、ひとがこんな目にあわされているのに」

　おまきは、一言もなぐさめてくれようとしないのが、当てが外れたような、たまらなく不満で、淋しくさえあった。お前がその気なら、私だってもう口をきいてやらないから、と腹が立ってきて、帯をしめ、髷を櫛巻になおし、行燈に灯を入れて、長火鉢の前へ黙って坐っていた。その間に、仕入物の品分けをすました重吉が、台所へさがって、女主人の夜食の膳を作り、おまきの前へ運んできた。女主人の給仕をすましてから、自分は台所へさがって食事をする例になっている。それは亡夫がまだ生きていたころの習慣で、主従の分は決してくずそうとしない重吉である。

「重吉、お前なにをそんなに怒っているの」

　とうとうおまきのほうから口をきいてしまった。そのかわり、返事をしなければ箸は取らないつもりである。

「なにも怒ってはいねえです」

「嘘おっしゃい。そんなふくれっ面をして、ひとがあんなあぶない目にあっているのに、お

前が怒ることはないでしょう」

「お前さまが悪いです」

「なんですって」

「お前さまの体が、あの馬鹿男を呼びよせたんだ。もっと、きりっとしていれば、そんな隙はできねえ」

「もう一度いってごらん、重吉」

　おまきは真っ青になった。そんな無礼なことをいう男がただ憎くて、膳を叩きつけてやりたい衝動に駆られたが、その心の奥の理性は、それが本当だとみとめているのだ。くやしくて、体がぶるぶるふるえてきた。重吉はむっつり坐っている。

　涙がこぼれそうになったので、おまきはぷいと膳の前を立ってしまった。かまわない、誰が御飯などたべてやるものか、と思い、座敷へ入って、床をのべ、蚊帳を吊った。子供じみすぎるとは思ったが、重吉があやまってこないうちは、とても胸がおさまりそうもない。

　寝まきに着かえて、枕についたが、それでも重吉はあやまりにこなかった。おまきは涙がぼろぼろとこぼれてきた。

火遊び

ふと目がさめると、あたりはしいんとして、こおろぎの声が耳についた。やたらにわびし

く、心細い。そうだ、お腹が空いているのは、夜食をたべなかったのだ、と気がつき、重吉とのいさかいを思い出したが、もう我がままな感情はすっかりおさまっていた。

「私が悪いには悪かったのだ。重吉は、あんなに骨身おしまずに、私のことを心配してくれているのに」

　おまきはそっと蚊帳を出て、茶の間の襖をあけて見た。行燈がともっていて、宵の膳がそのまま布巾をかぶせておいてある。思ったほど夜は更けていないらしく、土間のほうから藁を打つ音のするのは、重吉がまた夜なべに草鞋を作っているのだろう。長火鉢の前へ坐ると、鉄瓶に湯がわいていて、猫板の上へ甘納豆の袋包がのせてある。好物なのを知っていて、城下へ買出しに行く度に、黙っていてもきっと土産に買ってきてくれるのだ。なんとなく胸が暖かくなって、

「重吉――」

　おまきは土間のほうへ呼んだ。

「お茶をいれますから上っておいで」

　そして、気がついたか淡紅色のしごきを前で結んだ、しどけない寝まき姿だったのである。また叱られるかしら、と思わず首をすくめていると、体のほこりを払うような音がして、重吉がもそりと入ってきた。

「体中が痛くて――」

　事実今になって妙に節々がぎごちないので、おまきは大袈裟に肩から腕のあたりをさすっ

て見せた。

「お前、まだ怒っているのかえ」

「怒っちゃいねえだ」

　ぶっきら棒な返事である。

「私ね、いろいろ考えたのだけれど、一人でいるから、人にばかにされるのです」

　茶をいれながら、おまきはとんでもないいたずらを思いついてしまった。

「もう百カ日はとっくにすぎて、半年もたつのだし、いっそお前私をもらっておくれでないかえ。それとも、こんなふしだらな女、年上だし、いやかえ」

　重吉はびっくりしたようにおまきの顔を見つめ、その人の好い大きな顔がなんとなく紅潮してきた。おや、とおまきは狼狽し、

「ふ、ふ、嘘だよ重吉。本当にしちゃいや」

　きっぱりといって、急にまじめな顔をして見せた。

　一瞬、重吉は青ざめたような顔をしたが、見る見る目が血走ってきた。その目を激しくおまきに向けて、ぐいと膳を片よせ、詰めよるなり腕を鷲づかみにしてくる。

「お、重吉、お前――」

　おまきは、はっと身をひこうとしたが、逆に引きつけられた。

「いけない、お前は、お前は、――堪忍して」

　が、重吉は許さなかった。じりじりと引きつけたおまきの肩を、たくましい腕の中へ捲き

こんで、燃える頬を頬へしっかりと押しあて、そのまま抱きすくめて放さない。おまきは、男くさいと思いながら、いとわしさは少しも感ぜず、体中がしびれてしまったような、

「いやだ、重吉」

その声さえ、甘く弱々しく、もう身もがき一つできず、目をつぶっていた。

「お前どうするつもり。私をこんな手ごめなんかにして」

一つ蚊帳の中へ坐って、おまきは拗ねて、男の体へ背を投げかけながら、いつまでも重吉を責めて困らせはしたが、その実年増ざかりの体が、火遊びをしたがっていたことを、はじめて知り、決して後悔はしていなかった。

しかし、昼間は相かわらず下男として、黙々と働いている重吉を見ると、良人にするには物足らない男、なんとなくそんな気がするのである。日がたつにつれて、こんなことをしているうちに、もし子供でもできたら、とそんな我がままな心配さえ起ってきた。

「ほんとに、どうするつもりなの重吉」

その夜も男のせいにして、重吉をいじめずにはいられなかった。

「どうするって、おら、お前さまのためになら、どんなことでもするだ」

「じゃ、暇をやるといったら、お前すぐ出て行くかえ」

重吉はしばらく黙っていたが、

「お前さま、それを本気でいうのかね」

そっとおまきの手をさぐって、握りながらいった。もう秋らしい雨の音のする、闇の中だ

った。

「お前さま、身分が違うから、おらと夫婦になると、外聞が悪いと思っているんだろう」

「そんなことも、ないけれど」

が、その外聞が、一番おまきの気になるのだ。

「おら身分や外聞で、人の値打ちはきまるもんでねえと思う。おら、きっとお前さまを一生仕合わせにするように働くだ」

「生意気いっている」

「夫婦にもならねえで、こんな真似していたら、それこそふしだらのようで、恥かしいことだ、とおら思うだ」

「知らない。誰が私をこんなふしだらな女にしてくれたの」

おまきは邪慳に男の手を振り切って、くるりと背を向けた。そして、重吉がため息をついているのを、いい気持だと思いながら、いつか寝入ってしまった。

一人ずまい

翌朝、おまきが目をさました時、重吉はもう寝床にも家にもいなかった。

それでも、寝まきをふだん着にきかえているだけで、金にも衣類にも手はつけている様子はない。もしや黙って用たしに出かけたのではあるまいかと思い、そうであってくれればい

いがと念じながら、おまきはその朝珍しく自分で朝ごしらえをして、重吉を待っていた。

が、重吉は夜になっても、とうとう帰ってこなかった。

「重吉のばか。あんな冗談を本気にするなんて」

しかし、昨夜の言葉は、冗談というにしてはあまりにも酷く、一本気な男だから、どんなに辛かったか、今になっておまきはしみじみと後悔するのである。いや、本当は世間が恥かしくて夫婦になる気はしなかったのだから、かえってこうなったほうがいいのだ、そうも考えてみたりしたが、それは重吉がそばにいる間の女の我がままで、事実はそれほどふしだらな気持で肌を許したのではなかったことに気がついた。どうしても重吉でなければいけないのだ。重吉が恋しい。

そして、重吉があんなに私のふしだらな恰好を怒り怒りしたのは、嫉妬だったに違いない。重吉は前から私のことを思っていたのだ。だから、侍志願まですて、私のために、今日まで黙々と働いてくれたのだ。その私が浮きうきとし出して、もし、ほかの男に心を移すようなことがあっては、とそれが心配でたまらなかったのだろう。ああなってからは、もうどんなくつろいだ姿をしていても、怒った顔はしなかったし、どうしたら私がよろこぶだろうと、それればかり考えていたようである。

それだのに、私はとうとう一度も、重吉と一つ膳で食事さえしてやらなかった。どこまでも下男あつかいにして、しまいには酷いことまでいって、追い出してしまったのである。

「帰ってきておくれ重吉。私はきっといいおかみさんになってみせるから」

一人でこおろぎの声を聞きながら、その夜はいつまでもさめざめと枕紙を濡らしてしまった。おまきはしばらく、店をあける気力もなくぼんやりと日を送った。実際問題としても、重吉がいてくれなければ、女一人で店はやっていけそうもないのだ。

しかし、店をたたむとすれば、おまきは実家の厄介者になるか、再婚しなければならない身である。厄介者は気づまりだし、再婚はなおさらいやだ。とすれば、やっぱり一人で店をあけるよりしようがない。

「そうだ、重吉はいつか、きっと私のところへ帰ってくる」

その気だから、衣類や持ち物をそっくり残して出て行ったのだ。あの男は私に愛想をつかしたのではなく、私がいやがるので、下男という自分の身が情なく、世の中へ出て、なにか立身がしたい、そんな気になって家出をしたのではあるまいか。或る日、重吉の男くさい行李を調べながらおまきはふと気がついた。

「そうに違いない」

それなら、このまま店をつづけて、どんなことがあっても待っていなければと、おまきの心はやっとときまった。

翌日からおまきは、思い切って店をあけてみた。なにもかも一人でやるのだから、骨が折れるには折れたが、人間その気になれば決してやって行けないということはない。なまけ心が出ると、

「重吉に叱られるから――」

と、おまきはよく思った。

一人で店をはじめてから、おまきは後家のうす化粧をやめ、紅だすきも避けた。油断すると男の心をそそる、重吉に叱られるから、と身なりはなるべく地味に、きりっとした顔をして、ほんの旅人相手の休み茶屋の婆あ、その気になってただ働いた。

「お前、一人じゃなかなか大変だろう。誰か年寄でもさがしてよこそうか。女の一人は物騒じゃあるしな」

実家の父が心配してくれたが、重吉のあとへは誰も入れたくない。

「いいえ、一人のほうが、かえって気楽ですから、もうたいてい馴れましたし」

と、ていよく断わった。

「そうだなあ。まあ重吉のような下男は、探したって、そう見つかるもんじゃない。今ごろ、どこへ行って、なにをしているか」

父には、重吉はなにか出世がしたくて家出をしたのだろうと、はっきりいっておいたのである。

物騒といえば、若い後家の一人住居、物騒には違いなかったが、夜盗や災難はいくら心配したって、限りがないことだし、そのほかで一番物騒な、あくどい村越高次郎は、幸いあれから間もなく江戸詰になったそうである。あとの狼は、こっちがきりっとしていさえすれば、さほど気にするほどのことはなかった。

秋がすぎ、春がきて、次の秋を迎えるころには、おまきはすっかり店にもなれ、よく働いて一人住居など少しも気にならなくなった。健康で、よく働いて、美貌の若い後家、当人は落着いていても、世間の手前が承知しない。しばしば再婚の話を持ちこまれたが、おまきはむろんわらって相手にしなかった。

「そんな話、重吉に叱られるもの」

心の中の重吉は、もう良人として、なんのふしぎもなく、絶えずおまきの体から離れず、ひたすら帰りが待たれるばかりだった。

ふたたび、そして三たび、秋がゆき、春がきて、おまきはやがて三十になってしまった。

「こんなに年をとりすぎてしまって」

おまきは鏡を見て、そう思うこともあったが、鏡の中の顔はまだ小皺一つ見えず、かえって脂がのってきたような――そうだ、二つも年上なんだから、これからは少し派手にしなければと思い、ああこんな浮いた気持、重吉に叱られるかしら、といそいで鏡をしまった。

藩主松平右京亮は、近国大名だから毎年十二月に出府して、八月御暇になる。去年江戸へ藩主のお供をして行った父が、この八月帰国すると間もなくたずねてきて、

「おまき、重吉が見つかったよ」

と、うれしそうに教えてくれた。

「まあ、重吉が――」

別れてからはじめての、思いがけないたよりである。おまきは父に恥かしいと思ったが、

つい声が上ずって、頰を赤くせずにはいられなかった。

「それがお前、全く意外な出逢いをやったのさ。この六月殿さまがな、お馬場で御乗馬がふいに狂い出したものだから、落馬されて首筋をどうかなされた。お痛みが激しくて典医にみせると、これは千住の名倉でないと手がつけられないというのさ。さっそく名倉をお召しになった。その名倉の供についてきた弟子が重吉なのだ」

「名倉といいますと、たしか骨つぎでございますね」

「うむ、重吉め、えらいものに目をつけおった。あれは人間がまじめだし、柔術の心得が多少ある。名倉に聞いてみると、筋がいいそうだ。殿さまのお怪我は、もう一分違うとお命取りだったそうで、重吉が名倉の名代で毎日御殿へあがってな、とうとう療治してしまった。どうもえらいものになりおった」

子供のころから家にいたので、父にはそれがひどくうれしく、自慢でもあるらしい。来年は、一通り修業もすむから、きっと帰国するといっていたよ、と話し、その話がすむと、まあこれでおれも一安心だ、といってさっさと帰って行った。

甘納豆

「来年は帰ってくる」

父が帰ってから、おまきは小娘のように胸がはずんでしょうがなかった。そして、父は重吉との仲をもううすうす感づいているのではないだろうか。だから急いでよろこばせにきてくれたのかも知れない、と気がついて、思わず頰がほてったりした。

しかし、世の中は皮肉なものである。そのよろこびといっしょに、じつは大きな不安も一つ、かえってきていたのである。二三年たって、村越高次郎が、突然藤の茶屋へ馬を乗りつけたのだ。

「やあ、おまきどの、あんたは少しも変らんな」

おまきはびっくりして、口もきけなかった。

「拙者がこんど帰国して、一番うれしかったのは、あんたがいまだに一人でいてくれたことだ。じつは江戸にいた間中、ふしぎと拙者はあんたのことが忘れられなかった。やっぱり宿縁ですな。こんどこそ拙者、親をとおしてまじめに縁談を申入れる覚悟でいる」

そのくせ、じろじろと体中を見まわして、隙があったらいつでもつけこんできそうな目の色なのだ。

「いいえ、せっかくでございますけれど、私は一生、こうして一人で暮すつもりですから」

「そりゃいかん。女が一生一人ということは、とかく間違いやすいものだ。下世話にも、三十後家はとおせないといいますからな。必ず拙者が、あんたを幸福にしてみせる。これは大まじめの話だ」

茶をのんで、二時間あまりも大まじめに口説き立てて、悠々と馬に乗って帰って行った。

「困ったことになった」

鉄面皮な男だから、全くなにをするかわからない。重吉は来年でなければ帰ってこないし、この前のように、一人住居のところへ押しこまれでもしたらどうなるだろうと、おまきはため息が出てしまった。

それから四五日、店をしまうと夜は夕方から厳重に戸締りすることにした。その夜もおまきは、一人きりの淋しい夜食の膳に向った。誰かとんとんと土間の戸を叩く者がある。ぎくりとして目をすえると、

「今晩は、――今晩は、もう休んだのかね」

どうやら村越の声ではないらしい。

「どなたです」

土間へおりて行って、戸締りをあけると、中から灯かげに、大きな顔が、立って微笑っていた。

「まあ、重吉」

一瞬おまきは、ぽかんとその思いがけない顔を見つめてしまった。思いがけないといえば、重吉は小百姓がちょいと用たしの旅から戻ってきたような、めくら縞の尻っぱしょりの草鞋がけという、埃っぽい姿で、もそりと立っているのだ。

「これ、おいて行くべえと思って」

遠慮そうに、手にしていた小風呂敷包をさし出す。

「なに、これは」

「江戸の栄太楼の甘納豆だ」

じいんと胸へひびいて、

「入ったらどうなの、そんな所にぼんやり立ってないで」

いきなり腕をつかんで、邪慳に土間へ引入れた。

「入っても、いいかね」

「知らない。あんたの家じゃありませんか」

後ろの戸をしめて、どうしていいか自分でもわからず、力任かせに上り框のほうへ引っ張って行き、どすんとそこへ突っ放した。重吉は尻餅をつきながら、

「おら、足を洗ってこなくちゃ」

「立っちゃいけない」

胸が嵐のようで、ただわくわくと、夢中で小盥へ水をとってきて、男の前へしゃがんでいる。

「そんなこと、おら、お前さまにしてもらっちゃ」

「じっとしていらっしゃいってば」

遠慮する足を押えつけて、草鞋の紐を解いてやりながら、とうとう帰ってきた。とはじめて体に感じ、どっと涙があふれてきた。思わず男の膝へしがみつき、顔をうずめて、子供のように嗚咽がこみあげてくる。

「私、私、来年だと思ったのに」

その両の肩を、じっと抱きながら、

「おらも、そのつもりだったけど、お殿さまが、また痛むからって、急に呼ばれたもんだから」

目がうるんでくる重吉である。秋の夜をしいんとこおろぎの声が澄んでいた。

突然すうっと土間の戸が音を忍ぶようにあいて、夜風が流れこんだ。

「あっ」

一足踏みこもうとして、棒立ちになって、村越高次郎が焼きつくような醜い目をすえる。

おまきも、重吉も、はっと顔をあげ、呆気にとられて、戸口を眺めていた。

「畜生、なあんだ」

くやしそうな顔が、びしゃりと戸をしめて、そのまま荒い足音が表のほうへ消えて行く。

顔を見あわせて、なんとなく微笑がこぼれ、

「ね、もうどこへも行っちゃいやだから」

我ながら体中が甘くなったような声に、気恥かしく、おまきはいそいで洗いかけた重吉の足へ目を逃げた。

夜潮

猪牙舟

満々と盛りあがる上げ潮に、残暑の強い陽がぎらぎら照りつけていた。朝から暑い日である。

「姐さん、やっぱり屋根にしたほうがようござんしたね。お暑うござんしょう」

両国橋を右に見て猪牙を上へまわしながら、矢太はお歌の横顔へ声をかけた。

「いいえ、あたしはただこうして坐っていればいいんだから」

陽ざしをよける紺の日傘を映して、一層くっきり白い顔がにっこりこっちを見あげる。二十三といえばもう年増芸者の部に入るが、芸と意気で磨きこんだ美しさなまめかしさ、女として熟れきった肢体がしっとりと落着いて、――漕いでいるお前さんこそといわぬばかりの思いやりは、その年と苦労がいわせるのだろう。

「本当に朝っぱらからすまないわね。まだ寝てたんでしょう」
「御冗談で――」
「嘘、お内儀さんからちゃんと聞いていますよ」
「へぇ」
「家の若旦那は用さえなければ寝てばかりいるって」
「それほどでもありません」
矢太は苦笑した。――しかし、事実は寝るよりほかに能がなくなったこのごろなのである。
「あっしですか」
「上総屋さんの御親戚」
「ええ」
「又従弟の配偶者の甥ぐらいにはあたりますかね。まるっきりの他人じゃありません」
「憎らしい人」
お歌が静かに睨んだ。生きいきと張りのある眸である。その眸がただ睨むというより、女心を深沈と含んで、表面だけいたずららしく微笑っているかに見える。
「そんなに人をはぐらかすと、本当のことをいい当てますよ」
「御勘弁なすって、叩けば埃が出ます」
矢太はなにげなく目をそらした。猪牙は潮に乗って、もう蔵前あたりへかかっている。すれちがってゆく荷船から、船頭のかみさんが珍しそうにお歌の仇姿を眺めていた。

（どんな埃だろう）
お歌は矢太の苦み走った横顔を目で追っている。燦々と降りそそぐ陽に射られて、がっしりと均衡のとれた体軀、きっと結んで意志の強そうな口、むろんただの船頭育ちではない。この顔には理智がある。自然にそなわる気品がある。一口にいって見れば男らしい男、が、――それにもまして気をひかれるのは、その重厚な気魄をつつんで妙に憂悶の色がただようことだ。懊怏としてたのしまぬ、そんな風なのである、なにか大きな心配ごとか、不幸がある。
（それが埃のせいだったら――）
人殺しか、兇状持ち、ああそうか、敵持ちだ。この人はお侍に違いない。余儀なく誰かをお斬りなすった。そのために狙われている。きっとそうなのだ。
（敵にだっていろいろある。芝居にあるような悪い人とばかりはきまってはいない）
お歌は急に気がしずんで来た。なんだってそんな詰まらないことを考えてしまったんだろうと思う。
矢太は向う鉢巻の手拭を片手でといて、つるりと流れる汗をふいた。
「お詣りですか、姐さん」
思いだしたようにこっちを向いてきく。
「いいえ」
お歌はいい気になって男の顔を見つづけていた無躾を恥じて、はっと水に目を逃げた、我

にもなくどぎまぎと頬がほてる。

「向島でござんしたね」

「ええ」

「三囲様かと思いましたんで」

「その近くなんです。小梅村、——でも叩かれて埃の出るような家じゃありませんよ」

気がさしてきたのでお歌はわらいながらつけ加えた。

「聞いています。姐さんの男嫌い」

にっと白い歯を見せて邪気のない顔である。

「当てにはなりませんね。ほ、ほ、女ですもの、好きな人ならいつでも好きになりますよ」

「そりゃそうでござんすね。好きで好きになれれば、一番仕合わせでしょう」

「おや、それ好きでも嫌われてるってこと」

「いいえ、好きでも好いてはいけない。そんなことだってござんしょう。——こいつあおかしい、姐さんの前で人情のお説教はすこしばかり出すぎましたね」

「またそんな憎い口、——それじゃまるであたしが、その道のなにかみたいじゃありませんか」

お歌はつんと横を向いた。知らず識らず男の気持をためす気になっているのである。

「そ、そんなつもりでいったんじゃござんせん」

「いいえ、矢太さんから見れば、どうせあたしはすれっからし」

「謝まります。どうもすんません。——竹屋へお着けすればようござんすか」

いつの間にか吾妻橋をのぼっている。

「そうして下さい。少しぐらい待っていてくれて」

「お待ちしますでござんす」

「今のね、好きでも嫌われる、そういうお嬢さんの今日は御病気見舞い、——お主筋にあたる家なの」

「へえ、つまり恋わずらいとかいうやつ」

「ええ、それのもっとこんがらかったやつ。あたしのようなすれっからしは滅多に病気になんかならないけれど、大家のお嬢さんはね」

「どう致しまして、姐さんのはまだ病気になるほどの相手が見つからないんでござんしょう」

「ほ、ほ、なんだか褒められてるような、けなされてるような、——どっち矢太さん」

「もう御勘弁なすって」

矢太はもう一度汗をふいた。

青春

（好きがままならぬ）

妙な女と妙な問答をしたものだ。矢太は桜並木の蔭に涼を取りながら、漫然と光りみなぎる川面を眺めていた。対岸は青々とした待乳山、ちょうど渡し舟が川の中央を漕いでくる。

降るような蟬の声だ。

和代の端麗な面影が胸に痛い。

（いや、このおれより――）

娘心の苦痛のほうを十倍にも百倍にも感じられる矢太だ。それゆえにこそ次にはかならず激しい忿怒がくる。

矢太は眉宇に深い憂悶を刻んで、人どおり稀な桜並木を歩き出した。

「下曾根さん、崋山先生のところへ今日北町奉行所からお差紙がついたのだが――」

高野長英があの激しい目をぎらぎらさせて、下谷練塀町の下曾根金三郎の家へ飛びこんできたのは、この（天保十年）五月、――矢太はまだ船頭の矢太ではなく、公儀直参弓削矢太郎として前途の希望に燃えながら、ちょうどその席にい合わせていた。

「あんたのところへはまだなんの情報も入らぬか」

金三郎は南町奉行筒井伊賀守の次男、下曾根家へ養子にはいった男である。なにか事情がわかると思ってきたらしい。

長英はその日渡辺崋山から至急面談したいと迎えをうけて、三宅坂の藩邸へ出向いたのだという、崋山は老中水野越前守の家来小田切要助がきて、――どうも近く蘭学者を厳重に取締るらしいと、それとなく話して帰ったことを告げ、

「お互いに老母がある。これからは過激な論はすこし慎しもう」

と、話していた。

そこへ、御尋ねの筋があるから即刻北町奉行大草安房守役所へ罷り出るようにという差紙がついたのだという。

崋山が呼び出される以上、長英が無事にすむわけはない。二人は蘭学会を牛耳る双璧だが、時代を啓蒙しようとする過激の論の多いことはむしろ長英のほうが激しいのだ。じっとしていられなかったにちがいない。

が、金三郎のもとへはまだなんの知らせもはいっていなかった。のちにして思えば、事はそれほど陰険、疾風迅雷式に行われたのだとわかったが。

「そんなに心配するほどのことではないのではないかな。われわれは公儀のために啓蒙こそすれ、決して睨まれるような悪いことはしていない。かりにお呼び出しがあるとしても、単なるお尋ねにすぎないのではなかろうか」

矢太郎はむしろ日ごろになく狼狽している長英がおかしかった。その深い学識と熱烈なる闘志を尊敬していただけに、事にあたってから焦慮するのはすこし見苦しいとさえ思った。

一つには、この国の文化を高め、世界の事情に暗い俗吏どもを啓発するのは自分たち蘭学会の同志のほかにはない。自分たちこそ時代の先駆者だ、その自分たちを圧迫することは公儀自身の大きい損耗ばかりでなく、この国の前途を危うくするものだという単純な若い自負に燃えていたからだ。

が、いずれにせよ同志の一人、しかもその大先輩に差紙がついたという事は、大きな問題である。

「とにかく高野さんは二三日ここへ隠れて様子を見たほうがいい」

そう相談がきまって、矢太郎は帰りがけにこれも同志の花井寅市の家を御徒町にたずねた。一応耳に入れておいたほうがいいと思ったし、寅市の妹和代とはこの秋結婚することになっていた。急に逢いたくなったのである。

「あら、兄は昨日から帰らないのでございますよ。わたくし、お宅かと存じていましたのに」

出迎えた和代がいそいそと涼しい目をみはる。遊蕩で外泊するような男ではない。時が時だけに矢太郎はどきっとした。

「なにかお役向きから呼び出しがあった、というようなことはないんでしょうね」

「いいえ。――どうしてでございます」

「いや、べつにどうしてということはないが――」

明るい黄昏であった。二人きりの対座を意識して、和代はじっとさしうつむいていた、濡れぬれと高島田が重たげである。銘仙の矢絣に慎ましくつつまれたすんなりしたみずみずしい姿態、初夏の処女はことに肌美しく、胸乳のあたり匂やかに息づいている。それは、静かに愛のささやきを待っている姿だ。

「和さん、いよいよ蘭学者退治がはじまったようだ」

矢太郎はふっと、その幸福そうな胸を掻き乱して見たい衝動に駆られたのだ。

「蘭学者退治――」

わかりかねるように和代は目をあげた。

「今日華山先生が北へ呼び出されたそうです。我々のところへもいつ差紙がくるかわからない」

「では、あの兄は――」

「まさか、くればみんな一緒だ。寅さんにだけ先へくるということはない」

矢太郎は苦笑した。昨日から帰らぬ寅市、当然そのほうへ心配が行くにきまっているのに、すぐ自分に心が動くだろうと思っていた虫のよさがくすぐったい。

「しかし、もし拙者に万一のことがあったら、和さん、どうする」

なにか強い言葉がききたかった。が、和代は微笑しただけでうつむいてしまった。

「頼りないお嫁さんだな」

「でも、御公儀で蘭学がいけないということはないのでございましょう」

「蘭学がいけないとはいわない。けれど我々は相当激しい議論をしましたからね。要路の迷夢を覚醒させるには、そうするより仕方がなかった。我々は今、世界の日本ということを考えなければならない時代ですからね」

恋人はじっと耳を澄ましている。可愛い恋人である。いって見れば、世界の日本を説きながら、その熱情でこの恋人を口説いてしまったようなものだ、けれど和代はそのために自分

を信じて一層尊敬している。

　が、急に不安になってきた。先覚者というものは、往々にして蒙昧な当事者から圧迫されがちなものだ。つい近く林子平の海国兵談さえ処罪せられた例がある。その轍が自分たちの蘭学会へこないと誰がいえよう。国士を気取って恋人と遊んでいる時ではないかもしれない。

「和さん、拙者は帰る、もう少し調べて見よう。寅さんが帰ったら、崋山先生のことだけはいっておいてください」

「あら、お気を悪くなさいましたの」

　和代があわてて立ち塞がるように前に立った。悲しげな目を一ぱいに見上げてくる。今になって予期していた反応があらわれたのだ。

「馬鹿な、なにが気を悪くすることがあるんです。――ああ急に立ち上ったから」

「――」

　素直にうなずいて見せる。

「そうじゃない、もう少し様子を調べておきたいと思うんだ」

「もうあんなことおっしゃってはいやでございますわ」

「あんなことって？」

「万一のことがあったらなどと」

「大丈夫、多分そんなことはないでしょう」

「いいえ」

「はてな、まだほかになにか気に入らぬことをいったかな」

「どんなことがあっても、わたくしの覚悟、疑われたりするのいやでございます」

　ふいに盛り上ってきた大きな涙を、和代は急いで袂に伏せた。

「悪かった。和さん」

　思わずひしと肩を抱きよせてしまった。そうせずにはいられなかったのである。あんなにも和代の心を身近かに感じたことはない。はじめて妻というものの本当の心づかいがわかったような気さえして、感謝にも似た甘味な感情に離れがたかった黄昏の一時、――そして、それがついに一生の別離ともなるきっかけだったとは。

絶　望

　その夜、二三の同志にあって成行きをきき、今後の問題を論じあったりして、矢太郎が興奮しながら牛込の家へ帰ったのは相当夜がふけていた。

　崋山は即日揚屋入を仰付かり、同時に長英の留守宅へも捕手がむかって家宅捜索をうけたそうである。

　或る者は、公儀の政事向きを批判したという理由ではないかといい、或る者は、反蘭学派が蘭学の名声を妬んでの策動にちがいないと憤慨した。が、まだ誰にも蘭学会の二先輩がなぜ急に取調べられるのか、直接の原因はわからない。それだけに、事件は案外簡単にすむの

ではないかという者もあり、いや、この際徹底的に蘭学者退治をやるだろうと見る者もあった。

月の明るい夜だった。

家へ帰ると、意外にも寅市が書斎で待っているという。

誰かと話さずにはいられないほど興奮していた矢太郎は、この意外な親友の来訪がじつにうれしかった。おそらく寅市も一人では眠りかねてやってきたのだろうと思ったのである。

「どうした、寅さん」

「もう知ってるんだろうな、今日の事件は」

「うむ」

寅市は日ごろの多弁ににあわず、蒼白く憔悴して、妙にこっちの視線をにげるようにする。おや、心配しているのかなと思った。そういえば才子ぶってはいるが、いざとなると気の小さいところのある善人なのである。

「どうしたんだい、しっかりしろよ、寅さん」

「うむ」

「こんなことで蘭学がつぶれてたまるものか、いずれ我々蘭学会の全部が、一応は取調べをうけるかも知れない。しかし、我々は公明正大だ。国を憂えればこそ公儀に異国の事情国力を訴え、世界の文化の驚くべき進歩をこの国へ移そうと努力したんじゃないか、どこにもお咎めなどこうむる筋はない。識者はちゃんと我々の行為をみとめているんだ。おれはこういう問題が持ち上った方が、かえって蘭学の価値が公儀にも世間にもよくわかるんじゃないかとさえ思っている」

今にして思えば、それは若い矢太郎の単なる自負であり、気焔にしかすぎなかった。

「違うんだ、矢太さん」

寅市が意を決したような顔をあげたのである。

「違う――」

「うむ。こんどのことは大目付鳥居庸三の陰謀なんだ」

「なにッ」

鳥居庸三は漢学の宗家林大学頭の弟、この春浦賀測量を公儀から仰付かった時も、漢学派を支持し、配下笠原幸蔵をして杜撰極まる測量図を作らせ、平気で称揚した男だ。

当時の副役は韮山の代官江川太郎左衛門だった。この事を憂えてひそかに蘭学会へ洋式の測量者を求めてきたが、庸三は、自派の技術の遠く洋式におよばぬを知って、極力これを妨害している。

おのれの空名のためには、平気で国家の実利をさえ棄てる陰険猜忍の奸吏。しかも老中水野越前守に深く取り入っている奴だから、彼ならなにをするかはかり知れない。

「寅さん、それじゃその陰謀ってのを知っているんだな」

「これを見てくれ、おれは、おれは妹が可哀そうだったんだ。しかし、矢太さんを助けたかった。蘭学会に関係のあるものは、こんどは到底のがれられない。しかし、これさえ書けば、なんと

か一人や二人黙認すると笠原幸蔵がいうもんだから」

密訴状の下書きである。

蘭学会一派は渡辺登、高野長英を盟主として、妖言を以って御公儀御評定を誹謗し、人心動揺の機に乗じて私利を計ろうとしていると書いてある。無人島に渡航し、やがては外国との密貿易を企てている、というような出鱈目もある。一味の中には先年大阪表における大塩平八郎の反逆に荷担した余類もまじっているらしいとあるごときにいたっては、虚構捏造もあまりにはなはだしい。

「貴様」

矢太郎は愕然として色を失った。同志の者が心から憂慮し、悲憤さえしている事件の原因がこの寅市にあったとは。卑怯な裏切り者、しかも憎むべき偽造者、——恐らく奸悪なる笠原幸蔵に威嚇籠絡されて、おのれの命惜しさに書いてしまったのだろう。

「馬鹿、なにが妹だ、卑怯者め」

燃えあがる忿怒と口惜しさに、矢太郎はかっと寅市に躍りかかるなり、さんざんに殴りつけていた。

「同志の人達をどうする気だ。おれたち二人が助かったって、それがなんになるんだ。馬鹿、馬鹿」

腕力にかけては到底寅市は矢太郎の敵ではない。が、殴られて抵抗一つせずじっと竦んでいるのは、やはり良心の呵責にたえかねて、その拳の一つ一つに、せめて、幾分の償いを求めようとしているのではあるまいか。

(情ない小人)

殴りながら矢太郎はぼうだとして涙が流れてきた。

結局、あれが弓削矢太郎の半生の終りになったのである。

蘭学会の渡辺崋山、高野長英の二人はまだ獄中にいる。小関三英はそのために自殺した。寅市の密訴状によってあげられた関係者の中にはすでに牢死した者さえある。

それを黙って見ていられるか。おのれ一人助かって、——いわば多くの同志の血と、その人々の家族たちの涙で得たも同じ幸福を、知らん顔をしてうけられるか。

これだけの事件が、たった一人の奸吏の野心で行えるような世の中も呪わしい。

絶望と忿怒慚愧とに、矢太郎は世の中を棄てたのだ。生きているのは、生きて同志の苦しみを苦しむのが、せめてもの贖罪だと思ったからである。

ただ哀れなのは和代である。今も妻はただその女一人と胸にいだいて忘れはせぬが、生きているあいだは妻とよべぬ。一目見ることさえ良心がゆるさぬ。

「たった一目だけ」

まだ牛込の家に閉じこもって悶々としている時、一度訪ねてきたことがあった。泣いて玄関を動かなかったそうだが、矢太郎は逢わなかった。なぜ逢わぬか、一言の説明さえしてやらなかった。

「お怒りはよく存じております。その怒りが解けて、お許しの出るまで、和代はいつまでも

お待ちしますと、どうかお伝えくださいませ」

やがて老婢にこういいおいて、夕暮近いころしおしおと帰っていったそうである。

和代は怒って逢わぬと思っているらしい。許される日がくると考えているらしい。哀れだが仕方がない。

間もなく、誰にも告げず家名を棄てた矢太郎だった。

(好きがままならぬ、——今ごろどうしているか、今でも許される日を待っているだろうか)

気がついて見ると水戸の下屋敷のあたりまで歩いていた。

「おや、客待ちの船頭が舟を離れちゃいけねえぜ」

矢太郎は急いで引返そうとした。やがて、午近く暑い日盛りである。

かいこう

「弓削——」

踵を返したすぐ後ろに、深編笠の武士が立っていた。——さっきの中流を漕いでいた渡し舟、見るともなく見ていたが、その客の中にあった深編笠だ。時代おくれだから目に残っている。

水色麻の無紋の着流し、細身の大小、その大小に見覚えがある。

「行きずりの男の言葉として聞いてくれ」

「——」

矢太郎は黙って歩いた。

花井寅市、公儀の直参が無紋で編笠に面をつつみ、供もつれずに歩いているのは、やっぱり身を恥じるのか。

「おれは卑怯者だった。おめおめとまだ生恥を曝している。——決して許してくれとはいわぬ」

半歩ほどうしろをついて歩きながら呟くのである。今さらなにを訴えようというのだ。

——船頭と深編笠の武士、しかもその武士が半歩退って歩く、行人が見たらふしぎに思うだろう。幸い日盛りの向島堤、渡しの者もどこへ散ったか近くには人影もなかった。右手の青田の中に三囲の森が炎天に黒ずんで見える。

「自分の命も惜しかった、が、和代のことも考えなかったわけではないんだ。兄妹二人きり、早く親に別れて苦労した。おれは妹が可愛い」

「——」

「その妹があれ以来おれに口をきかぬ。おれのそばにいることを嫌う。おれは肉親にまで棄てられた。おれははじめそう思ったが、そうではなかったのだ。——和代は矢太さんに義理を立てておれに口をきかないんだ。本人は愚かな兄を憐れんでさえいるらしい」

「——」

「おれは嫌われているより辛い。おれのために失った希望をあきらめながら、そのおれを憐れんでいる。おれからいわせれば、和代は恋と肉親を同時に失ってしまったのだ。あれにはもうなんにもない。ただあるものは到底かなえられない思慕の心、その苦しさを誰に訴えることもできず、黙って死んで行こうとする、おれは見ていられない。矢太さん、和代はもうこの夏が越せまいと医者に見放されているんだ」

「――」

矢太はぐっと歯を食い縛った。――そうか。身を殺すほど苦しんでくれたか。あのみずみずしく若さに輝いていた和代が、たった半年の間に死病につく、誰のせいなんだと思うと、悲しみの底から忿怒（ふんど）が新しくなる。

「腹を切れというなら、おれは腹を切る。頼む、矢太さん、たった一目和代に逢ってやってくれ。この近くにいるのだ。おれが行っても口をきかない。口をきいては矢太さんに申訳ないと思っているんだ。そして、その口をきかないことを、おれにたいしてはすまないと苦しんでいる。それを、二重にも三重にも苦しめて、たった一人の妹を死なせなくちゃならないのだろうか」

寅市は泣いている。

「おれは許されないとは知りながら、ずいぶん矢太さんを探した。一目逢わせてやらなければ、死んでも死に切れまい。それよりほかに妹の苦しみを救って、せめて安らかに死なせてやるものはないと思ったからだ。矢太さん、おれはここで腹を切れというなら――」

「――」

急に矢太は足を早めた。舟をつないだ堤の上にお歌が立ってこっちを見ていたからである。

(馬鹿、虫のいいことをいうな、今さら腹を切ったってなんになる。その苦しみを、貴様に密訴された人たちはみんな苦しんでいるのだ。同じように苦しんで生きるのが、おれたちに残されたつとめじゃないか)

許してくれ、和さん、――矢太は我慢した。理窟をとおりこして、口もきかずに死んでゆくという和代の心を思うとたえきれない。思わず駈け出していた。

「お待たせしてすみません。姐さん」

「誰、矢太さん」

お歌が寅市のほうを目でさす、寅市は焼けるような往来にじっと立ちつくしていた。

「お武家さんのようでござんすね」

「おや、知っている方じゃなかったの、こっちを見てるじゃありませんか」

「いいえ、姐さんを見てるんじゃありませんか」

からかうようにわらおうとしたが頬が硬張（こわば）っている。

「よろしければお乗りになって」

矢太は先に堤をおりた。

「おや、あの方――」

舟が岸離れをしたころ、お歌はふしぎそうに呟いていたが、矢太はもう振りかえっても見

なかった。

屋根舟

宵の口だった。
「お内儀さん、矢太さんいて」
「あ、いらっしゃい。二階でしょうよ」
「少し口説きたいことがあるの、ほ、ほ、上ってもいいでしょう」
「おや、大変ですね、どうぞ——」
賑やかな声がして、とんとんと階段を踏んでくる。蚊遣りの側へ寝ころんでいた矢太は、あわてて起き上った。
「御免なさい」
お歌である。どこかのお座敷帰りらしく、涼しげな薄物の裾をひいてさすがは土地の流行妓、明るくなるような艶冶な立ち姿だ。
「お邪魔してもいい」
「さあどうぞ、——お使いなすって」
矢太はかしこまって団扇を差出した。
「あたし、少し酔っています。おかしいかしら」

崩れるように坐ってわらうのである。どこか締まりのゆるんだ肢体が、こまやかな肌の白さ厚さを想わせて、ほのかに脂粉の香が甘い。
「水でも差上げましょうか、姐さん」
「いいえ、それよりね矢太さん、——好きがままならぬ、このあいだ舟の中で矢太さんがいった言葉」
「そうでしたかね」
「だから、お酒飲みました。酔って訊きたい——いいえ、教えて頂きたいことがあるんです、ぜひ」
開けはなした窓の軒で風鈴が鳴った。夜風が川を渡ってきたのである。
「御冗談を——」
「本気です。生酔本性たがわず、ほ、ほ。本当はそれほど酔っちゃいません。だから教えてください」
「なにか、矢太の知っていることでござんすか」
「矢太さんでなくちゃ知らないこと」
冗談のような、本気のような、なまめかしい目がわらいながらからからんでくる。
「さあわからない」
「あのね、笑わないでください、——お主様のためなら、人殺しをしてもいいかしら」
「——」

「女が人殺しをしてまで、一生懸命になったら、どんな男の心でも、動かせないもんでしょうか」
　強いてわらっているが妙に頰が硬ばっていた。その微笑さえいつかすっと消えて、目だけが燃えるようにみつめている。
「藪から棒に、困るじゃありませんか、姐さん」
　矢太は苦笑した。いってみれば、答弁のかぎりでない質問、相手になるだけ馬鹿だ。
「困る――」
　お歌は敏感にこっちの心を感じたらしい。
「ほ、ほ、こんなこと、きく奴は馬鹿、馬鹿、――ね、そう思ってるんでしょう」
「そ、そんな失礼なことを、姐さんに対して、――ただ難しすぎるんでさ、矢太にゃ」
「いいえ、きくほうが馬鹿、知ってるんです。けど、女ってそんなに思い詰めるものだってこと、聞いておいてください。馬鹿かも知れない。馬鹿だっていいんです。馬鹿だの悧口だのってのは男がいう理窟、――女って可哀そうなものね、その男の理窟でおもちゃにされているんですもの」
「どうもわからねえ」
「いまにわかるわ。あら、教わりたいほうがお説教してる、ごめんなさい。おかしいわね」
　結局、なんのことかわからなかった。わからないが、なにか煩悶がある。誰かに話さずにはいられない、そんな様子だった。

　二日ばかり経った。
「矢太どん、お客様だよ」
　階下から呼ばれておりてゆくと、そのお歌が桟橋に褄をとって、四十五六のでっぷり肥った客の侍と並んで立っていた。女中が屋根船へ酒肴を運びこんでいる。
（はてな、男嫌いでとおったお歌が――）
　屋根船に客と芸者の二人きり、男嫌いのすることではない。――そうか、あの酔っ払って変なことをいいにきたのはこれだ。金か、義理ずくか、どうしても男嫌いがとおせなくなった。その鬱憤晴らしだったのだ。
　少し風のある明るい黄昏だった。吹き上げて来る涼風になぶられながら、じっと川波を眺めているお歌のうしろ姿が、媚めかしく目に痛かった。さすがにこっちを向こうとはしない。
「お待ち遠さまでござんした」
　身軽に舟へ移りながら、ちらっと客の脂ぎった顔を見て、矢太ははっとした。むろん、先方では見覚えてはいまいが、客は鳥居庸三のふところ刀笠原幸蔵だったのである。
「お大切に行ってらっしゃいまし」
　内儀と女中に見送られて、
「出しますでござんす」
　矢太はぐっと棹を突っぱった。

真っ赤な夕焼けが、河岸の家並を黒く区切って水にうねっている。退潮だ。

「船頭さん、海へ出られない」

お歌が船房の戸から白いというより蒼い感じの顔を見せた。張りのある目が少し引吊って、凄艶とでもいいたい顔だ。

「波がありはせんか」

奥から幸蔵の野太い声が聞えた。

「大丈夫でござんす」

櫓を漕ぎながら矢太は答えた。——大丈夫なことはない、ここでこれだけの風があれば、海には相当波がある。

「涼しいでしょうね、きっと」

誰にともなく、お歌は戸を締める。

穢らわしいものでも見るように、矢太はその戸を睨んでいた。

（同志の敵——）

またとない機会である、生かしてはおけぬ。

顔を見た時から肚はきまっているが、——おもちゃになる女、それを思うとやっぱりいい気持ではない。

恐らく、なにか利権を漁る奸商の賄賂にこの女を望んで、おちたと得意になっているであろう幸蔵、——むろんその幸蔵は憎いが、そんな男に金で自由にされる気になったお歌にも好感が持てないのだ。むしろ憤りさえ感じている。

船房からふと爪弾きの音がし出した。

なぜかほっとしたような気持である。この爪弾きのつづいている間に海へ出たい。自然と櫓を早めていた。

永代橋を過ぎるころ、やっと黄昏が宵がかってきた。そのあたりはずっと川幅が広くなって、近くの水は明るいが、遠い両岸にはすでに灯が入っている。

白い波頭を見せて、波が舷を打ってきた。夜の佃を右に見て海へ出たのである。果たして風が強く、今夜は危険と見たか、海には漁火一つ見えない。大きく船は揺れながら潮に乗って、沖へ流れ出す。

女の命

（この辺がよかろう）

矢太は静かに櫓を引上げた。振りかえると、洲崎あたりの灯もすでに遠い。

颯々と海風が鳴っていた。ひっそりと声のない船房、いささか痴漢めくのが後ろめたく、我にもなく澄ました耳へ、突然、がらがらッ、と瀬戸物が引っくり返る音がして、ぐらッと、船が異様にかたむいた。

「矢太さん——」

る。
「うぬッ」
「助けて、矢太さん」
　押し潰されたような、お歌の悲鳴だ。思わず戸を蹴破ると、――意外、髪も裾も振り乱したお歌が、剃刀を摑んだ右手を幸蔵に逆に取られて、捻じ伏せられながら妖艶にもがいている。
「馬鹿、船頭のくせに貴様、出て行け」
　禁断の船房へ闖入した無粋者、幸蔵は見るより忿怒と情火に醜く燃える目をぎらぎらさせながら怒鳴りつけた。
「出て行かなかったらどうしますな、笠原さん」
　矢太は軽侮するように冷然とせせら嗤う。
「なにッ。誰だ、貴様は」
「弓削矢太郎、――と申しましてもお忘れかも知れん。花村寅市の親友だった蘭学会の一員といえば思い出すだろう」
「弓削――」
　さすがにぎょッとしたらしい。が、そこはふてぶてしい奴。
「ふうん、そうか。貴様食い詰めて、美人局に成り下がっていたのか」
「おのれ――」
　かっとなって躍りかかるそのふいを狙っていたらしい、いまもぎとったばかりの剃刀をさ

っと喉へ突き出した。
「あッ」
　わずかにかわして、発止！　矢太は危うくそこへ叩きおとす。
「あ、待て、弓削、待ってくれ、話が、話が――」
「聞かぬ」
　逃げようとする奴の胸倉を締めつけながら、忿怒にまかせて舷へ力一ぱい叩きつけ、押し潰し殴りつけ、――罪なき幾多の同志を葬った憎むべき奸吏、一度爆発した若い力は存分に苛みながらいつ止むとも見えぬ。そのたびに船は大きく傾いては、波をかぶった。
「助けてくれ」
「馬鹿」
「は、話が――」
　その悲鳴も次第に力尽きて、脂ぎった顔が無残に歪み、ついにぐったりと虫の息になる。まだ飽き足らず、
「天罰だ、地獄へ堕ちろ」
　そやつを摑みあげて、暗く波立つ海へ、――どぶうんと一瞬に呑みこんだ海は、潮荒く波騒いで、二度と笠原の姿は見るべくもない。
「弓削様」
　ほっとして振り返ると、――お歌が力なくそこへ両手をついていた。さんざんに着崩れた

衿足が痛々しく、肩のあたりがまだせつなげに弾んでいる。
「意気地のない女、嗤って下さいまし。――あたしこそ笠原を殺してどうしても弓削様に聞いていただきたいお願いがございました」
「願い」
「はい。弓削様、和代様はあたしの母がお乳を差しあげた方」
「なにッ」
「あの向島へ行った翌日、寅市様にお目にかかって、はじめて矢太さんの素姓をうかがいました」
そうだったのか、お主のために人殺しをするといった謎、――そうか、苦しまぎれに寅市が頼んだのか、卑怯者め、こんな罪もない女にまで縋ろうとする。
「姐さん、その話なら矢太は聞きたくございません」
「なんですって、矢太さん」
お歌がきっと蒼白い顔をあげた。
「あなたは、あんたという人は、女の命を二人まで見殺しにして、それでも自分の男が立てたいんですか」
「女の命――」
「あなたは学問に負けた鬼だ。血も涙もない人でなしだ。あたしは、そんな矢太さんじゃないと思った。――和代様がおいとしい。早く死んで楽になりたい。お歌、ただ心残りなのは、

二世までわたくしはあの方から許していただけないのか。この世だけで許していただけるか、それさえうかがえずに死ななければならないかと」
お歌の声は嗚咽に慄えた。が、罵って止まないのである。
「そりゃ、寅市様は悪い、悪いけれど、――生きてさんざん苦しました妹、死んでまでも煩悩地獄へ堕してやりたくない、見るに忍びないからと、男泣きに泣く気持、あんたにはわからないんですか。あたしでさえ、あたしでさえ、こうして命にかけて、――普通のことじゃ駄目だ。一番悪い奴は笠原、その笠原を殺して、せめてたったひと目とお願いする気になったのに、あんたは鬼だ。学問の方では、そんなの安っぽい命と嗤うのかも知れない。ようござんす。もう頼みません。一人で呑みこんでしまったあたしが馬鹿だったんだ」
「な、何をする」
矢太ははっとして、お歌の剃刀を拾おうとする手を押えつけた。
「いいえ、放して、――放して」
「待て、矢太が悪かった、頑固だった。なるほど、おのれを潔よくするために、女二人の命、――無にしてはすまぬ」
ひとりでに涙が流されてきた。
「じゃ、矢太さん」
「うむ。――行こう、お歌さん」
矢太は摑んでいるお歌の手をそのまま引っ立てるように艫へ出た。

「運を天に任かせて――」
いきなり船を引っくり返したのである。
ざ、ざ、ざあッと波に揉まれながら、しっかりお歌の体を支えた。
「どうするの、矢太さん」
「船が引っくり返った。客はどこへ行ったかわからない。目についた姐さんだけ助けて、船頭はやっと岸へ泳ぎつく」
「まあ」
びっくりしているお歌の、しかし今はまかせ切った体を抱いて泳ぎながら、人一人殺してまでもと思い詰めたのは、
（或いは、これも好きがままならぬ女心）
ふっとそんな気がして、しぶきに濡れる星空を見上げた。
三日看病されて、和代は矢太郎に手をとられながら、安らかにわらって死んだ。
死ねば花嫁、――せめてもと、お歌が化粧をして口紅までさしてやる。振袖を着せてお棺に入れて、という遺言だったのである。世にも美しく幸福そうな死顔だった。
「眠っておいでになるようなお顔」
お歌がそっと涙を拭いた。
「うむ」
矢太郎はいつまでも花嫁の手を放さなかった。じっとその死顔を目に、心に焼きつけている。――幸蔵の死骸はついに上らなかったが、前身を洗われると矢太の身は危ない。今夜にも江戸を離れなければならないのだ。

（女二人の、死んだ魂と生きた心を預かって、明日はどこにいるか）
小梅の里は宵たけて、もう秋の虫が鳴いていた。

拾った女房

一

溝呂木(みぞろぎ)大吉はこの三十面をさげて、自分にまだこんな激しい恋心が残っていたとは、我ながら意外であった。

しかも、廿歳(はたち)の時、青雲の志を抱いて故郷常州土浦を出て江戸へのぼり、一流の剣客になるつもりだったが、事志と違って、上へ悪の字のつく札つきの浪人者に成りさがってのこの十年だったのである。

悪業の相棒は南部浪人の岩村鉄之助で、柄(がら)こそ小粒だが、こいつは悪才に長(た)け、そもそも大吉に世間に憎まれて食って行く道を教えてくれたのはこの岩鉄だった。

小粒の岩鉄は口先だけで腕力がないから、いざとなると押しが足りない。どうしても相棒に大吉が必要だった。

大吉は土浦の城下町で町道場の師範代をつとめるまでに修業をつみ、上背はあるし、腕力に自信があるから、どうせ一生なら江戸へ出て一流の剣客になってやろうと思って、故郷を出てきた。

まずお玉ケ池の千葉の道場へ行って他流試合をやってみると、師範代の海保帆平にさえ子供あつかいにされた。そこまでの腕になるのでも七八年はかかりそうだ。

「よし、おれはどうしても初志を貫徹してやる」

若い大吉は希望に燃えながら、浅草福井町の裏長屋を一軒借りて、千葉道場へ入門し、そこから毎日お玉ケ池へ通った。

半年ほど熱心に通って見ると、海保との腕の差は四五年でなくなるのではないかという明るい見とおしがついてきたが、残念ながらそのころから貯えがつきて、その日の食にも事を欠く日が多くなった。

ちょうど壁一重の隣の家で、毎日ぶらぶら遊んでいたのが岩村鉄之助で、そのころ彼は両国同朋町の小料理屋の通い女中をしていたお清という年増女に養われる、というより食い物にしていたのである。

「お隣うじ、だいぶ兵糧が欠乏しているようだな。よかったら昼飯を食いにきたまえ。こっちも一人で食うより、二人のほうが飯はうまい」

その日も朝飯ぬきでは道場へ出かける気力もないので今日はなにを売ったものかと、いつまでも寝床の中で思案していると、壁越しに隣からさそわれた。

お清は朝飯がすむと同朋町へ出かけて行き、夜は四つ（十時）近くにならないと帰ってこない。岩鉄も小遣さえあればその間中遊び歩いているのだが、その日はふところが淋しかったのだろう。

そんな岩鉄の男妾のような生活を、大吉は日ごろ軽蔑していたのだが、背に腹はかえられない、はじめて隣の好意をうけることにした。その時の冷飯のうまかったことを今でも時々思い出して、当時どんなに自分が純情だったかいじらしくなる時さえある。

人間という奴はおかしなもので、腹が空いた時、たとえ一飯でも人に恵まれると、その恵まれた相手になんとなく頭があがらなくなるようだ。

「御馳走さま――。飯がこんなにうまいものだとは、今までつい気がつかなかった」

「そうか、毎晩聞かせてばかりいるんだからな。このくらいの罪ほろぼしは当たりまえだろう。腹が空いた時は、いつでも飯を食いにこいよ」

岩鉄は臆面もなくいって、にやにやしている。

「ありがとう。貴公の御家内はなかなか働き手のようですな」

「皮肉をいっちゃいけねえ。あいつは凄い働き手でね、ひと晩でも男の体がなくちゃ眠れないと、自分でも呆れてやがるんだ」

大吉は道場でまじめに稽古をして帰るから、夜はたいてい朝までひと眠りにするほうだが、それでも時々はあいにくの時に目がさめて、少しも遠慮ということを知らない壁一重の痴情痴語に、こっちの体中がほてって困るほど悩まされることが度々であった。

つまり、その必要があるから、ちょいと垢ぬけのした年増ぶりを持っているお清が、そう色男とも思えない小男の岩鉄を、男妾のようにして飼っているのだろう。

「貴公はひどく生まじめな性分らしいが、剣客になるつもりで飯も食わずに道場通いをしているんかね」

岩鉄は頭からこっちを子供あつかいにしているようだ。

「そうです。わしはいまに一軒の道場のあるじになるのが目的なんだ」

「結構だなあといいたいが、そいつはどうかと思うなあ。いくら腕ができても、道場というやつは相当の山師っ気がないと経営はできない。出ては貴顕金持ちのたいこもちとなり、内にあっては偉そうに見せかけながらうまく門弟どもの機嫌を取る。貴公の柄ではそんな器用な真似はできそうもない、第一詰まらん話だ」

「どう詰まらないんだろう」

「考えて見たまえ、昔から剣術の名人が剣を持って一国の大名になったとか、宰相に出世したとかいうためしがあるかね。朝から晩まで竹刀を振りまわしていて、しかも金持ちになったという例も聞かない。勝った負けたばかりを気にして、あたら一生を汗くさい稽古道具に縛られて終わってしまう。人生のたのしみなんてどこにもないじゃないか」

「じゃ、貴公はなにになるつもりなんだね」

大吉は呆れて聞いてみた。

「わしは金と女と酒さえあれば、それで満足さ。人生はじつにたのしい」

またなにをかいわんやと、大吉は内心軽蔑を新たにした。

「貴公、だいぶ窮迫しているようだが、それで道場通いがつづけられるんか」

「じつは、それについて困っているんだ」

「そうだろうな。人間いくら大望があっても、食わなくちゃ生きて行けない。しかし、今さら貴公に天秤棒をかつげといってもしようがあるまいし、貴公にはおれのように女を食い物にするだけの才能もなさそうだ」

「貴公は女を食い物にしているのかね」

「見てのとおりさ。おれは働き手のお清に稼がせて、毎日こうして遊んで食っている。つまり槍一筋の男というところだ」

「なあんだ——。そのかわり毎晩生血を吸われているのと、違うかなあ」

「あは、は。どうせあり余っている生血なんだ、それで女をよろこばすことができれば両得ということになる。よし、貴公にいい内職をさがしてやろう。二三日待ってみろ」

「わしにできるようなことかね」

「できるとも——。心配するな」

「恩に被ます」

大吉は当惑し切っていた時だったので、文字どおり暗夜に光明を得たような気がした。幸いその内職というやつで、ここ四五年食って行けさえすれば、ともかくも免許皆伝の腕になれる。もう押しも押されもしない江戸の若手剣客として、立派に生活が立つと希望にあふれ

てきた。

その約束の三日がくるまでは、お清の留守の隣へ入りこんで冷飯で養われ、養われているからには家来同然なのだから、岩鉄に顎で使われ、台所の跡始末から拭き掃除までさせられた。

――なあに、韓信が跨をくぐったという話もある。

案外辛抱強い大吉は、そのくらいのことはあんまり苦にもならなかった。

「大の字、そろそろ内職に出かけよう」

岩鉄がそういってやっと腰をあげてくれたのは、三日目の夕方だった。

「はあ、お願いします」

大吉はよろこんで岩鉄といっしょに長屋を出た。もう秋も深くなったころで、冷たい空にきれいな三日月がかかっていた。

浅草橋をわたると、広場の右手に郡代屋敷が見え、左手は両国同朋町になる。同朋町一帯は色街になっていて、横丁へ入ると小料理屋や出合茶屋がごたごたと軒をならべているところだ。お清はここへ毎日通っているのである。

岩鉄はその横丁の入口あたりへきて、ふらりと立ち止まった。

――はてな、お清に小遣でももらって行く気かな。

聞くのも悪いから、大吉も立ってしばらく無駄話をしていると、案の定お清がその横丁からこっちへ出てくるようだ。

しかし、あいにく連れがある。どこか大店の若旦那といった身なりの若い男だが、へなへなした優男ではなく、道楽に柔でも稽古したことがありそうな堂々たる体つきである。お清は稼業柄その若旦那に白粉くさくまつわりつくようにして送ってくる。

こうしてその土地で見るお清は、緋鯉が水を得たように生きいきとして、ひどく色っぽい。

――まさか客といっしょでは、小遣もねだれないだろう。

それがこれから行くこっちの内職の話に影響しそうなので、大吉はちょっとがっかりした。が、岩鉄は二人が近づいてくると、つかつかとその前へ出て行って、

「お清――」

と、尖った声で呼んだ。

「あら、お前さん、こんなところへきちゃ、いけないじゃないか」

お清はとっさに若旦那をうしろへかばうようにして、当惑げに眉をよせている。

「どうもこのごろ少し様子が変だと思っていた。その男は誰なんだ」

岩鉄は怖い顔をして、じろじろと二人を睨みつける。

これはとんだことになったものだと、大吉はびっくりした。

「ただお客さまを、送ってきただけだのに、そんな風に取っちゃ、あたしが困るじゃないか」

「そうか、それならそれでいい」

岩鉄は顔を硬ばらせながら、

「おい、貴公、すまんがそこまで顔を貸してもらいたい」
と、若旦那のほうへいう。
「どこへ行くんだね」
若旦那の童顔から一度に酒の気が引いたようだが、しかしよっぽどしっかり者らしく、べつにおどおどするような風は見せなかった。
「ついてくればわかる。お前もいっしょにこい。きっぱりと話をつけてやる」
「お清、これはお前の御亭主なのか」
若旦那がお清に聞いた。
「すみません、若旦那」
お清はがくりとうなだれてしまう。

二

岩鉄が肩を怒らせて郡代屋敷のほうへ歩き出すあとから、お清と若旦那がつづき、しょうがないから大吉もその後からついて行った。
――詰まらんことになったものだ。
若旦那がおとなしくついて行くからには、ただの客ではなく、むろんお清との間になにかあるのだろう。一体どういうことになるんだろうと、大吉は人ごとながらあまりいい気持ではない。

郡代屋敷の横を柳原土手のほうへあがって行くと、そこにはもう人通りはなく、草深い土手下を神田川が寒むざむと黄昏れかけていた。
「ここでいい」
大柳のあたりまでくると、岩鉄は立ち止まってくるりと二人のほうを向いた。ひどく引吊った顔である。
「おい、貴公、おれも武士の端くれだ。今さら不逞な女房を責めてみたところでしょうがない。きれいに別れてやるから、そのかわり貴公この女を女房にしてやってくれ。いいだろうな」
岩鉄は念を押すときっぱりという。
お清ははっとしたように、肩を落してため息をつく。
若旦那は黙って岩鉄の顔を見ていた。
「おい、なぜ返事をしねえんだ」
「いくら出したら、勘弁してくれるだろうな」
「なんだと――」
「うっかり遊んだのはおれも悪いんだ。引っかかったとは思いたくない。手切れ金ですませてくれ。財布ごとこれを出す」
若旦那はふところから紙入れを出して、さし出す。
無礼な奴だと、大吉は思った。

「中にいくら入っているんだ」

「三両と少し——。お武家さん、おれはこれでも話のわかるほうだと思っているんだ」

若旦那はにやりとわらった。

「よし負けておこう。しようがねえ」

岩鉄は苦い顔をして紙入れを受け取る。

若旦那はもうなんにもいわずに、さっさと浅草見付のほうへ引きかえして行った。

「悪い人だよ、この人は」

お清が岩鉄のそばへ行って、わらいながら睨んでいる。

「たった三両とは案外しけてやがったな」

「どれ、貸してごらんよ」

お清は岩鉄の手から紙入れを取って、素早くあけて見ながら、白い手が小判一枚と、なにがしかの小銭をつかみ出し、男の手に握らせて、

「悪いところへ行くと承知しないから」

駄目を一つ押しておいて、

「溝呂木さん、またあとでね」

大吉のほうへ目でわらって見せながら、澄まして引きかえして行く。

「大の字、日当だ。お清とくるとけちでな、まあ今日はこれで我慢しておいてくれ」

岩鉄は二分銀を一つ大吉にわたしてくれた。

ようやく光り出した空の三日月を見あげながら、大吉はなんとも浅ましい後味だった。

世間から憎まれて世渡りをする悪たれ浪人の生活が、その時からはじまったのである。

お清は転々と奉公先をかえたが、その何度目かに、とうとう本当の情夫をこしらえて、逃げてしまった。

「なあに、世間にゃ女は腐るほどある」

岩鉄は一向平気で、またよく次から次へと女をこしらえては食い物にした。下は十三四の子守娘から上は五十をすぎたような金貸婆まで、それが稼業なのだから金にさえなれば決して女は選ばない。だからお清のような造作のそろったのには滅多にぶつからず、あれだけはちょいと惜しいことをしたなあと、あとで時々ぼやいていることもあった。

仕事はゆすり、たかり、恐喝、きっかけさえあればどこの店先へでも坐りこむし、密通をしている女房、妾をかぎつければさっそく絞りあげに出かける。たのまれれば危ない借金の催促にも乗りこむし、また用心棒にも雇われて行く。

むろん刀や匕首で追いまわされることは度々だが、根があまり大きな仕事には手を出さず、細く長くというほうの小悪党だから、大した怪我もなく、町方から特に狙われるということもなかった。

したがって、そう大金をつかんだといういい時もなく、有る時大名の無い時乞食、どっちかといえばただ遊んで食っているというだけで、一生うだつがあがらない長屋住いがつづくことになりそうだ。

——こんなことでいいのかなあ。

大吉は時々反省させられることがないでもなかったが、一度泥沼へ踏みこんだ足はもうどうにも抜くことができそうもなかった。

江戸へ出てから十年の月日が、こうしてうかうかとすぎてしまった。

それはやがて涼風が立ちそめたこの八月に入ってからのことだ。こっちは十年一日のごとく福井町の裏長屋住いだが、この春あたりから本所のほうの小金持ちの四十後家の家へ入夫していた岩鉄が、或る日ふらりとやってきて、

「どうだ、久しくやらないから、同朋町の合鴨を狙ってみようじゃねえか」

と、誘った。

「べつにどうしたってわけじゃないが、たまに四五日息ぬきをしてやらねえと、亭主のありがた味が薄くなるんだ」

察するに、烏金を貸して歩くしまり屋後家だから、男のありがた味が薄くなると、口小言のほうが多くなって、小遣銭のほうが不足勝ちになるのだろう。

同朋町の合鴨というのは、そこの出合茶屋で逢曳をした男女の帰りを待伏せしてゆすることである。ここの逢曳客は店の番頭と女中とか、出入り職人と乳母、出前持ちと女髪結いとか、客種はあまりよくないが、たいていは奉公先へ知れるのが怖いから、きっといくらかになる。

「よし、やっつけよう」

こっちもふところが乏しくなっていた時だし、仕事はどうせ岩鉄がやるので、大吉はただ用心棒についていて、睨みをきかせていればいいのだから、すぐに乗ることにした。

この仕事は二三日やったら、しばらく足を抜かないとあぶない。出合茶屋のほうにかぎつけられると、客足が遠くなるのを恐れて、きっと組合お抱えの地まわりを向けてくるのだ。

それをその時は、こっちも少し欲が出て、五日つづけてやった。その五日目の夕方、とうとう地まわりに取りまかれてしまったのである。

「おい、ちょいと顔を貸してくれ」

しまったと思ったから、大吉はとっさにそこの八百屋の店先から天秤棒をひろって手にした。つれて行かれる先はどうせ柳原土手で、つかまれば半殺しにされて神田川へ抛りこまれる。刀を振りまわして相手を斬れば喧嘩兇状で牢屋送りだ。天秤棒でも振りまわして逃げるほかはないのである。

「さあ、こい」

大吉はびゅんびゅんといきなり天秤棒を振りまわして、ぱっと柳原土手のほうへ逃げ出した。

「それ、逃がすな」

「やっちまえ」

まさか一言の挨拶もなく打って出るとは思いがけなかったらしく、敵は五人、一度はあっと道をひらいたが、それだけにかっと向っ腹を立てたらしく、狂犬のように追いかけてくる。

その間に狡い岩鉄は素早く両国広小路の人ごみの中へもぐりこんでしまったらしい。

――くそッ、つかまってたまるもんか。

柳原土手へ逃げこんだ大吉は、もう大丈夫だと思った。

が、いけない。敵はあらかじめここへつれこむ気だったのだから、そこにも五人ばかり仲間が待っていた。しかも、こっちには用心棒らしい浪人者が一人ついている。

「そらきた、やっちまえ」

「先生、たのんます」

殺気立って前へ立ちふさがってくるのをこっちはもう死物狂いだから、

「えいッ、――こらッ」

びゅん、びゅんと天秤棒を右へ左へ力一杯叩きつけながら、前へ進む一手だ。こういう時剣客を夢見て若い時一生懸命に稽古をしておいた腕力が役に立ったとは、意外でもあり、皮肉なもんだなあと我ながら苦笑が出る。とにかく、三人ばかり叩き伏せて、前の血路もひらけた、あとは逃げ切るばかりだ。すでに日暮れかかっている。

大吉は柳原土手をしばらく走って、右へ新シ橋をわたり、向柳原通りへ入った。敵も今日は執拗に追いかけてくる。人数も十人からだった。

三

医学館の横丁へ飛びこみ、籾蔵の前から七曲りの道へ出たころは、どうやら敵の追跡の目

を逃れ切ったようである。

――やれ、助かった。

大吉はほっとして、天秤棒をその辺へ棄て、ゆっくりと七曲りを抜けて天王町へ出た。もうすっかり宵になっている。

「ひどい目にあったもんだ」

表通りを少し浅草橋のほうへ引きかえして、瓦町の横丁へ入り、これで御難はすんだものと、福井町の長屋の近くまで帰ってきて、どきりとした。

敵はちゃんとこっちの巣を洗っていたらしく、先まわりをして網を張っているようだ。

「えらいことになりやがったな」

しようがないので遠まわりをして、左衛門河岸へ出て見た。いけない、向柳原のほうから一組、そっちへ追って行った組が引きかえしてくるようだ。

川っぷちに幸い屋根を張った材木置場がある。大吉は素早くそこの材木の山のかげへ身をひそめた。

「畜生、あの悪たれ浪人め、こんどこそ簀巻きにして神田川へ抛りこんでやらなくちゃ承知できねえ」

「あの女たらしのちび浪人のほうはどうしたろうな」

「なあに、あのちびはでかに口を割らせりゃ居どころはすぐ知れる」

近いところに巣があるのだから、まさかそのでかがこんなところへ隠れているとは、考え

ても見なかったのだろう。奴等はそこの横丁から、福井町のほうへ曲って行った。

「こいつは当分家へ帰れそうもないぞ」

大吉はうんざりして、もうしばらく様子を見る気で、材木置場の奥へ入りこんで行った。

一番奥は神田川の川っぷちになっている。

八日ばかりの月が水面にあかるかった。

――おや。

その水面の月の反射をうけて、そこの材木の山のかげに、ぴたりと身を寄せてしゃがみこんでいる女である。手拭を姐さまかぶりにして、草鞋をはいているようだから、夜鷹ではない、旅の女なのだろう。

「失礼するよ。詰まらんことで追われている体なんだ。しばらくここへ置いてくれたまえ」

大吉はそうことわって、少し離れたところへ腰をおろす。

「どうぞ――」

こっちが追われていると自分から名乗ったので、女もいくらか安心したらしく、そう答えて、川のほうを向いて坐りなおす。二十二三でもあろうか、十人並にととのった横顔で、身なりもきちんとしている。帯の間から懐剣の袋がのぞいているから、武家育ちの女だ。

――どうしてこんなところへかくれているんだろう。

大吉はふっとそんなことが気になってくる。

「おかしいなあ、あんたは旅の人のようだが、どうしてこんなところへ入りこんでいるんだろう。わしは人間の屑のような男で、人の力になってあげるなんて資格はないんだが、道に迷っているんなら送ってあげるぐらいのことはできる、どこをたずねていなさるんだね」

自分が追いつめられている体だから、大吉は遠慮しながら聞いてみた。

女は小風呂敷包みをしっかりと両手で胸へ抱え、それに顎をうずめるようにして、黙って川面へ目を落している、なにか余ほど思い悩んでいる風なのが、しょんぼりとしたその体つきでもよくわかる。

「無理にというわけじゃないんだから、気にしてくれなくてもいいが、誰かを待っているんかね」

女はかすかに首を振って見せる。

「わしが迷惑なら、ここを出て行ってもいい。あんたのほうが先客なんだからね」

女はまた首を振った。

「どうせわしはいつまでもここにいられる体じゃないんだが、この辺はもう少し更けると、よく夜鷹が客をつれこむ場所でねえ、女が一人でいると夜鷹に因縁をつけられる。稼業の邪魔をしたといってねえ。ああいう女たちは男より残酷なまねをしたがるものなんだ」

それは満更嘘ではなく、夜鷹の縄張り争いは、男も目をそむけるような気ちがいじみた喧嘩になるものなのである。

表の道を誰か二人ばかり、ばたばたと新シ橋のほうへ足早やに走りぬけて行く。

女はぎくりとしたように、体中をかたくして、耳を澄ましているようだ。

「あの、すみませんが、どこか安心な旅籠屋まで、送ってくださいませんでしょうか」
　しばらくして、女はおずおずと切り出してきた。
「承知した。きっと送ってあげます」
　女はこっちを見ようともせず、川のほうを向いたまま息をついている。
「あたくし、怪しい男にずっとあとをつけられまして、やっとここへ逃げこみましたの」
「どんな奴だったね」
「たぶん、女衒ではないかと思います。二人づれでした」
「よくある手なんだ。田舎から出てきた女は、一人で歩いていると狙われる。そいつはあぶなかったなあ」
　岩鉄も女を女衒にわたすことだけは、罪が深いからといってやらなかった。
　しかし、あの男だったらこういう女をただでは見のがすまいと思うと、大吉は変な気がしてくる。大吉は女遊びはしても、地女には決して手をつけないことにしている。というより大吉には地女をくどく才能も度胸もなかったのだ。
「どこからそいつ等につけられたんだね」
「神田の裏神保町というところからです」
「あの辺は旗本屋敷ばかりのはずだが」
「あたくしたずねる屋敷があったのですが、そんなお屋敷ありませんでした。きっと騙されたのかも知れません」

「騙された――」
「はい」
　女はそこで一度口をつぐんだが、やっぱり胸の重荷を誰かに話さずにはいられなかったのだろう。
「三月ばかりあたくし、その人といっしょになって暮しました。両親に死に別れたから、岡部の本陣の女中をして、十年ほど働いていたのですけれど、お旗本の次男で勘当されたのだと申しますし、本陣の主人がそれならと、仲に立ってくれたのです。近くに世帯を持って、あたくしはやっぱり本陣へ通っていたのですが、この三月、あの人の友達だという人がふいにたずねてまいりまして、兄さんが亡くなったから、家の跡をつがなければならない、それで迎えにきたのだと申しまして」
「つまり泣きの涙で別れたわけかね」
「はい、半年たったらきっと迎えにきてやる。それまで辛抱してくれと申しまして、あたくしの貯えを三十両ほど持って出立しましたの」
「冗談じゃない。そいつはおかしいじゃないか。勘当を許されて、家名をつぐなら、屋敷へ帰れば金には困らないはずだ。あとに残るあんたのことを心配してくれてこそ、男じゃないのかね」
　こいつは岩鉄なみだ、いや岩鉄以上の奴かも知れないと思うと、大吉は急に腹が立ってきた。

「でも、江戸に不義理な借財が多少残っているのだと、申しますので――」

「吐かしゃがれ、女たらしめ、なんだってあんたまたそんな口車に乗せられてしまったんだろうな」

つい大吉は声が大きくなっていた。

「あたくしは、本当の良人だと思いこんでいますもの」

「よし、わしがきっとその野郎をさがし出してやる。わしは人間の屑で、悪たれ浪人じゃあるが、そんな罪な女たらしは大嫌いだ。蛇の道は蛇というからね。そんな奴はすぐにわかる。なんて野郎なんだね」

女は黙って顎を風呂敷包みの上へうずめている、じっと奥歯をかんでいるようだ。

「あんた、そんな男にまだ未練があるのか」

女はふっと風呂敷包みへ顔を伏せてしまった。肩が激しく嗚咽している。いじらしい姿だ。

「そうか、こいつは悪かったかな。たとえ三月でも良人にした男だものな」

その女の気持はわかるような気はするが、それだけに大吉は男が憎い。

女はとうとうその男の名は口にしなかった。

四

「とにかく、安心な旅籠へ送ってあげよう。いつまでこんなところにいたってしょうがない」

大吉は女の嗚咽のしずまるのを待ってからいった。

「もう大丈夫でございましょうか」

「女衒なんか心配しなくてもいい」

「いいえ、あなたさまも、あの追われておいでになるのでございましょう」

「ああそうか」

大吉は思わず苦笑しながら、

「なあに、わしは兇状持ちになりたくないから逃げまわっていたんで、これでも本当は刀を抜けば強いんだ。さあ、出かけよう」

と、女の前ではやっぱりちょっと威張ってみたくなる。

「お願いいたします」

女はようやく納得して立ち上った。

馬喰町へ行けば旅籠屋はいくらもあるが、そっちへ行ってはまだあぶなそうだ。筋違橋の袂の花房町にたしか一軒中位の宿屋があったはずである。どうせ自分も今夜は家へは帰れそうもないから、そこへ行ってやろうと思った。

それでも、新シ橋の袂を通り越すまでは、奴等にぶつかりはしないかなと、あまりいい気持ではなかったが、そこを通りすぎて佐久間町河岸へかかってしまうと、もう安心だった。

「そうそう、わしは溝呂木大吉というんだが、あんたの名前だけ聞いておこう」

「雪江と申します」

「雪江さんか――。男は事志と違ってたとえぐれてしまっても、なんとかやって行けるもんだが、女は一つ道を誤ると一生不幸がつきまとう。江戸というところは恐ろしいところだからね」

大吉は、心から同情せずにはいられない。そしてその時は、自分もまたその江戸の狼の一匹だということは、ついうっかりしていた。いや、自分が狼だから、この女だけはなんとかそんな狼からまもってやりたいと考えていたのかも知れない。

「あたくしさっきはこの道を夢中で通りました」

「しかし、よく女衒の目がまけたもんだなあ」

「ちょうどあの橋のところで、やくざらしい人たちがたくさん、道を突っ切ってくれましたので、その間に横丁へかくれました」

「なあんだ、あんたはわしの追われていたのを見ていたんか」

「いいえ、その時はそれどころではありませんから」

なるほど、考えて見れば、人のことどころではなかったろう、雪江はしょんぼりとして、疲れ切った足を引きずっているようだ。いまはどうにか安心して、口をきくのも大儀なのだろう。

――しかし、どうする気なんかなあ。結局岡部の本陣へ帰るよりしようがないことになるんだろうが。

そうなれば一人で帰すのも心もとない。これまでの罪ほろぼしに、岡部まで送ってやって

もいいなと、大吉は考えたりした。

花房町の旅籠は大和屋という家だった。

一人は着流しの浪人、一人は旅の女、怪しまれるかなと思ったが、

「一晩厄介になる」

こっちが悪びれずに入って行っていうと、

「お早いお着きさまで」

と、出迎えた番頭はべつに二人を見くらべるような風もなく、一番奥の八畳の座敷へ案内してくれた。姐さまかぶりの手拭を取った雪江の髪が丸髷だったので、頭から夫婦者と見てしまったのだろう。

「あんた迷惑なら、わしは別に部屋を取ってもいいよ」

そんなことをすればかえって変に思われることを、本陣の女中をしていたのだから、雪江もよく知っているのだろう。だまってかむりを振っていた。

膳が出た時、一本のみたいと思ったが、これは我慢した。なるべく雪江を不安がらせないように、つとめたつもりである。

「あとの相談はいずれ明日のことにして、今夜は疲れているだろうから、ゆっくり休むといい」

と、あっさりいって、大吉は先へ床へ入り、壁のほうを向いてしまった。

――悪たれ浪人のおれが、今夜は侍らしいことをしている。

なにかたのしい気持だった。放っておくほうが雪江も安心だろうと思っているうちに、こっちもさんざん追いまわされて疲れ切っているから、いつの間にかぐっすり眠ってしまったらしい。

何刻(どき)ごろか、恐らくもう明け方に近いころだったろう。大吉はふっと目がさめた。

雪江はと見ると、自分の寝床をそっくり二つに折って、着のみ着のままその上へ突っ伏(ぷ)すように坐ったまま眠っている、濡れぬれとした丸髷がこっちを向いていた。

――用心深いんだなあ。

大吉は苦笑した、むしろ枕をならべて寝ていてくれたほうが、こっちも安心してもうひと眠りしていたに違いない。

あんまり用心されると、なあんだ、生娘(きむすめ)でもあるまいに、いいかげん女たらしにおもちゃにされて、棄てられた女じゃないかと、急にそんな気にもなる。といって、どうしようという気もなかったのだが、

「雪江さん、そんな恰好をしていると風邪(かぜ)を引くよ」

大吉はむくりと起きあがって、女の肩をゆすってやった。

びくっとしたように顔をあげた雪江は、

「すみません」

まだ半分しぶい目で、はにかむように微笑した。その弱々しい顔を見たとたん、大吉はむらむらと男心をそそられてきて、いきなり女の肩を抱き寄せていた。

「あ、いけません――。許して」

雪江は必死に身もがきして、男の胸からのがれようとしたが、大吉はもう承知しなかった。

「わしの女房になってくれ、雪江さん」

「どうぞ――、お許しになって」

「いやだ、わしは女房にする」

押し仆(たお)すようにしながら、口を口の上へ持って行こうとすると、女は顔をそむけてそうさせまいとする。が、結局はのしかかって行って、口で口をとらえてしまった。雪江はもう声が立てられない。いや、雪江はひどく恥かしがる性分らしく、隣室を気にしてはじめから大きな声は立てなかったのだ。

――おれはとうとう女房にしてやった。

大吉はあふれるような感情をじっと胸でたのしんでいた。いつまでもそのまま畳へ突っ伏したきり、顔をあげようともしない雪江を眺(なが)めながら、悪いことをしたという気持などは少しもおこらなかった。

おれはこの女を一生可愛がってしあわせにしてやる、そう考えると自分が幸福でたまらなかった。

「おい、もう顔をあげろよ」

今さら泣いたってしようがあるものかと思って大吉は女の肩へ手をかけた。

雪江は身動き一つしようとしない。

「あんた、そんなにおれが嫌いなのか」
ふっと心配になってくる。
「顔をあげてくれっていうのに」
ついこっちの声が大きくなると、びっくりしたように顔をあげて、
「大きな声をなさらないで――」
と、訴えるような目をする
「なんだ、泣いていたんじゃないのか」
安心して肩を抱きよせてやると、体中をかたくはしたが、もう拒みはしなかった。
「おれはな、一生お前を大切にするつもりだ。おれはお前が可愛くてしようがなくなってきたんだ」
がっくり根の落ちた髷を胸へ押しつけられたまま、雪江はまた無言の行をはじめる。
「お前はおれを怨んでいるのか――。嫌いなのか。おい、なんとか返事をしろよ」
「大きな声を出しちゃ、いやですというのに」
「お前が返事をしないからじゃないか」
雪江ははかばかしい返事は一言も口にしなかったが、しかし女房になることを納得はしたようだ。
翌朝もう一度目をさますと、そばに寝ていたはずの雪江の姿がなかった。
「逃げたかな」

大吉はぎょっとして床の上へ起きあがった。一瞬なんともいえない淋しいものが胸の中を吹きぬけて行ったが、座敷の隅に雪江の風呂敷包みがあるのを見て、やっとほっとした。
雪江は間もなく洗面をすまし、髷をきれいになおして戻ってきた。
「おれはお前が逃げ出したかと思ったぜ」
「早く顔を洗っておいでなさいまし」
雪江は障子をあけて、さっさと布団をたたみはじめる。
「そんなこと、女中にさせりゃいいじゃないか」
「お隣は誰もいなかったんですね」
そんなことをいいながら、雪江は顔を赤くしていた。
大和屋の世話で、明神下の裏長屋へ二人で世帯を持ったのは、その翌日のことだった。

五

大吉は口に出してはいわなかったが、どうも雪江に逃げられそうな気がしてしようがなかった。
いっしょに暮してみると、雪江はひどく無口で、行儀のいい女だった。少しでもみだらがましい冗談を口にすると、頬を赤らめていやな顔をする。
そういう女だから、薄々は知っているこっちの前のだらしのない生活を、どうも許す気にはなれないのかも知れない。

それに、世帯を持ってからはなんとかして食って行かなければならないので、大吉は竹刀（しない）削（けず）りの内職をはじめていた。これは大吉の特技で、若いころ自分の竹刀は自分で作った。大吉の作る竹刀は先と、中と、手もとの削り方に独自の工夫があって、非常に使いいい。竹刀屋でも相当の手間（てま）をはらってくれるから、これさえつづけていれば夫婦二人の口は十分にすごせる。

　自分はそれでいいが、雪江は妻として、良人が一生竹刀削りでは満足できないのではないだろうか。

「おい、お前このごろどう思っているんだ。こんな生活はつまらないか」

　大吉は一度聞いてみたことがあった。

「なにがです」

　そういう雪江はそばでせっせと人仕事に精（せい）を出しているのだ。

「なにがって、おれが竹刀を削って、お前は人仕事をして、それでやっと口をすごしている。本当はこんな生活は詰まらないと思っているんじゃないのか」

「そんなことはありません。人に追いまわされて、逃げて歩く生活より、よっぽど安心ですわ」

「もうそれをいうな。おれはまじめになったんだからな。お前をしあわせにするためには、どんなことでもやろうと考えているんだ、いまに見ていてくれ」

「そんなにあせらなくたって、くる時にはきっといい日がきますから」

　口ではそういっているが、心から満足しているはずはない。

　一体どうすれば自分に雪江のいうようないい日がくるのか、いまの大吉には全く自信がないのである。

　なによりも心配になるのは、雪江が前の亭主の名をいまだに打ちあけないことだ。心の中では、あくまでも旗本の次男坊として、忘れかねているのかも知れない。

　手ごめにされてしまったから、しようがなくてこうしていっしょになっているようなものの、前の亭主をあきらめ切れずにいるとすれば、いつその気になってぷいと逃げて行ってしまうかわからない。

　それがあるから、大吉は一日も家があけられないのだ。当座は風呂屋（ふろや）へまでいっしょについて行こうとして、

「御近所へみっともないから」

　と、叱られたことさえある。

「雪江、おれはこれでもお前をずいぶん大切にしているつもりなんだがなあ」

「ありがたいと思っていますわ」

「本当か――」

「あなたは思ったより疑（うたが）い深いんですね」

「それだけおれはお前に惚（ほ）れているんだ。お前、どうしてもおれに前の人の名をいうのはいやか」

「またそれを――。あたくしはもうそんなこと思い出したくないんですから、そのことだけは二度と口にしないでください」
　きっと切り口上になってくる雪江なのだ。
「よし、わかったわかった」
　これ以上不機嫌になられてはこっちがたまらないので、つい機嫌を取ってしまうようになる。
　あれ以来大吉は、一度も福井町の家はたずねなかった。うっかりそんな真似をして、こっちの愛の巣へ火がついては大変だし、大吉もまた前のことは早くすっかり忘れてしまいたいのである。
　幸い相棒の岩鉄も、この隠れ家だけはさがしようがないと見えて、いまだに姿を見せないし、ともかくも半分は恋女房を見張りながら、どうやら堅気らしい生活が八、九、十、十一月とすぎて、今年も師走を迎えるようになった。
　その日は雪江が朝から少し具合が悪いというので、無理に床をのべて寝かせ、枕元を屏風で囲って、午もかなりすぎてから台所で粥を作ってやっていると、
「大の字、やっと見つけたぜ」
　意外にもひょっこりたずねてきたのは五カ月ぶりの岩鉄だった。
「やあ、岩鉄うじか。ちょっと待ってくれ、あいにく家内が病気でな。いますぐ外へ出るから」

　こっちは狼狽しながら、どぎまぎとそんな挨拶をすると、
「そうか、じゃ角で待っているから」
　さすがに岩鉄は察しよく、あっさりと路地を出て行った。
　大吉はできあがった粥に梅干をそえて、雪江の枕元へ持って行ってやり、
「ちょいと行ってくる。すぐに帰ってくるからな。なあに、おれはもう足を洗ったんだから、詰まらん心配はしなくたっていいんだ」
　と、顔色を見ながらおろおろすると、
「悪くありませんでしたかしら。せっかくいらしたのに、お茶もさしあげないで」
　雪江はいかにも大儀らしく、すまなそうにいう。
「いいんだいいんだ。どうせお前のまえじゃいいにくい話にきまっているんだし、――お前まさか、怒っちゃいないだろうな」
「そんなこと――。ただあぶない真似だけはおことわりしてくださいね。それに、あたくしひょっとすると」
　といいかけて、いつになくすがるような目になっているので、
「わかっている、ことわるとも、きっとことわってくる」
　こっちもはじめからその気なのだから、逃げるようにあたふたと家を出た。
　なによりも安心なのは、病気じゃまさか逃げ出すこともできないだろうということである。
　岩鉄は路地の角で、にやにやしながら待っていた。

「おい、よくここがわかったなあ」
「大の字、お前女房に惚れ切っているって本当か」
「うむ、おれには過ぎた女房なんだ。行儀のいい育ちなんだから、あんまり家を掻きまわすようなことはしないでくれ。たのんでおくぜ」
「のっけからおっしゃるぜ。その分じゃ毎晩壁越しに隣へさんざん聞かせているんだろう」
「ああそうか――。まさか貴公じゃあるまいし、それに家の奴は大きな声で話しかけても恥かしがって、怒るほうなんだ」
「ぬけぬけと聞かせやがる。まあいいや、立話もできねえ、あそこへ入ろう」
近くのそば屋へ、それが癖の肩を怒らせてさっさと入って行く岩鉄だった。
「貴公のほうはどうなんだ、相かわらず本所か」
「うむ、まあな」
「こんどはだいぶ長くつづいているようじゃないか」
「情にほだされるってやつかな、婆あの奴がひどく大切にしてくれやがるんで、おれもこの辺でそろそろ落着いてやろうかと考えているんだ」
「そりゃいい。この間の同朋町の時にはひどい目にあったからな。いつまであんな真似をしていたって、一生うだつはあがらない」
「そうだったな。あの時はひどい目にあわせやがった。福井町の家は今でも時々奴等に狙われているっていうぜ」

「そうか――、そいつは気をつけなくちゃいけねえなあ」
大吉は冷やりとせずにはいられない。たしかあの時は二三人思い切り叩き伏せているから、恨みが深いのだろう。
「時になあ大の字、今日はうちの婆あからちょいと厄介なことをたのまれちまって、腕を借りにきたんだが、こんどだけはぜひ一つたのむぜ」
「ふうむ、じつは家内はあぶない話はことわってくれっていっているんだがなあ」
「いいとも、こんどだけだ。これっきりでおれもあぶない仕事はやめる気なんだ。こんどのはうちの婆あから出た話なんで、こいつを聞いてやらねえと、おれは婆あの前で威張れなくなるんだ」
「一体どんな話だ」
「相生町二丁目に伊勢屋っていう大きな酒屋があるんだ。そこの一人娘が業平新三っていう御家人くずれの女たらしに引っかかってな、娘のほうがなんでも婿にしてくれってきかねえ。新三の狙いはむろん伊勢屋の財産だ。札つきの凄い野郎とわかっているから、なんとか五十両の手切れ金で話をつけてくれられないかと、うちの婆あが泣きつかれてきたんだ。あれでもうちの婆あにもまだ色気はあるんだな、鉄さんお前ここで男を立てておくれよ。あたしの鼻が高くなるんだからと、けしかけられて見ると、こんどのは筋のとおった話じゃあるし、おれもいやだとはいえなくなってな」
「で、どう話をつけようっていうんだね」

「なあに、いつもの手さ、その野郎はいま松坂町のお秋っていう女髪結いの家へ入りこんでいるんだ。おれが外へ呼び出して話をつけるから、いざとなったら大の字がうしろで睨みをきかせてくれりゃいいんだ」
「腕はできるのか、その野郎は」
「御徒町の門弟で、ちょいと腕は立つって話だ」
　岩鉄がそういうくらいだから、こいつは相当できそうだ。ことによると命がけになるかも知れないとは思ったが、岩鉄と今後手を切るには、それくらいの仕事をしておいてやらないと、義理がすまないような気もする。
「よし、やろう」
「やってくれるか」
「そのかわりこれっきりだぜ、おれは今後一切あぶない真似はしないって、女房に誓ってあるんだからな」
「わかったわかった。で、いつ行ってくれる」
「これからすぐ行こう。都合は悪いか」
「いや、おれのほうは早いほうがいいんだが、そっちはかみさんにことわってこなくてもいいのか」
「いやかまわぬ」
　なまじことわりに行って、そんな真似はいやですと出られると、大吉は断ち切れなくなる

恐れがあるのだ。
　外へ出るともう八つすぎで、町には寒い師走の空っ風が吹いていた。
「しかし、よくおれの巣がわかったなあ」
「蛇の道は蛇さ。柳原あたりで見かけたって話を小耳に挟んでいたんで、ことによると竹刀削りをやってやしないかと、柳原の竹刀屋をあたってみたんだ。ああ、あの御新造を大切にする浪人さんですねって、すぐに教えてくれたが、まさか大の字お前女房の腰のものまで洗ってやっているんじゃないだろうな」
「そんな真似をしようもんなら、二日も三日も口をきかねえ奴なんだ」
「なあんだ、じゃ、やったことがまるっきりないわけでもないんじゃねえか」
「そういうことになるかな」
　大吉はわらっているよりしようがなかった。

六

　女たらしの業平新三を呼び出すのに手間が取れて、そいつが岩鉄といっしょにむっつり川っぷちの原っぱへ出てきたのは、すでにあたりが黄昏れかけてきたころであった。
　空には風で洗われた三日月が、利鎌のように光り出していた。大吉はちらっと十年前の柳原土手の、味気ない三日月を思い出す。
　業平新三は茶羽二重の紋服をぞろりと着流した、年ごろ二十七八、優男ではないが、い

かにも旗本然としたいい男っぷりだった。

「岩鉄、身供に用というのはなんだ」

「おたがいに暮は忙しいから、手っ取り早く話をつけよう。新三うじ、五十両奮発するから、伊勢屋の娘から手をひいてくれぬか」

岩鉄があっさり切り出す。

「大方、そんなことだろうと思った。おい岩鉄、お前も女を食い物にしている男じゃねえか。詰まらぬお節介はせぬものだ」

「まあ、そうでもあろうが、こんどだけはおれの顔を立ててくれ。親たちに泣いてたのまれて見ると、おれも人の子だからな」

「置け――。おぬしと身共とでは貫禄が違いすぎるようだ。五十両などという端金に目をくれる身共だと思っているのか、見くびっちゃいけねえ」

冷たい目が頭からこっちを軽蔑し切っている。

「そうか。そうそっちが話がわからねえんなら、腕ずくということになるかな」

岩鉄がこいつ駄目だと見て、そろそろ尻をまくりにかかる。

「それも承知だ。相手はそっちの用心棒のほうか」

じろりと新三がこっちを睨んできた。こいつはたしかにできそうである。

「業平新三うじ、貴公はたしかこの春まで岡部にいたことがあるな」

大吉はなんだかそんな気がしたのだ。

「なにッ」

新三は誰だろうとこっちを見なおすようにしながら、

「お前は誰なんだ」

と、聞いてきた。もう雪江を騙して三十両を持ち逃げした奴に間違いない。

「わしは溝呂木大吉――、行くぞ」

憎い奴と思ったとたん、大吉は我にもなく抜刀していた。どうしても叩っ斬らなくては胸がおさまらないのだ。

「ふん――、来い」

相手もとっさに抜きあわせる。

あっ、この野郎、と思った。こっちは中途半端の修業だが、相手はたしかに免許以上の腕だ。

腕の足りないところは、いつも野放図なくそ度胸でおぎなってきたのだが、この男にはそれも通用しそうにない。

――なあんだ。

相手はこっちを見て、にやりと薄わらいをしたようだ。

――畜生、可愛い雪江の敵。

いや、こいつが生きている間は雪江は自分のものになり切れない、そんな嫉妬もある。

大吉の全身に冷汗が流れてきた。たとえ相討ちになっても、こいつだけは生かしておきた

くない。

冷酷な相手の剣尖(けんせん)が、ぴたりとこっちの喉(のど)へ吸いついて、しかし、いくらかためらっているようだ。こっちの棄身(すてみ)を感じたからだろう。

「雪江——、雪江」

思わず口走っていたようである。

「ふん——」

相手はたしかに鼻でわらったようだが、とたんに、

「わあッ」

のけ反(ぞ)るようになって、どすんとそこへ尻餅(しりもち)をついた。ふいにうしろから相手の背中へ匕首(あいくち)を突っかけた奴がある。

「あんた、堪忍(かんにん)して」

年増女が髪を振り乱して、いきなり新三にうしろから抱きついて行った。

「畜生——、お秋だな」

「勘忍して——、あたしはあんたを人に、奪(と)られたくなかった。死んで、いっしょに死んでおくれ」

女は新三にしがみついて、狂気のように頬ずりしている。

「ばかめ——。もう少しのところだったのに」

新三はかすかに呟(つぶや)きながら、苦痛にゆがんだ青い顔を月に向ける。

「だめらしいな——。畜生」

三日月がもうはっきり見えなかったのだろう。ごうっと空でからっ風が鳴っていた。

「大の字——」

岩鉄が大吉の袂(たもと)を引っぱって、ぐんぐん町のほうへ歩き出す。

「おい、今日の日当(にっとう)だ」

町へ出てから、小判を何枚か手に握らせてくれようとしたが、

「いいんだいいんだ」

大吉はそれを押し戻すようにして、

「また逢おう」

よろめくようにどんどん両国橋のほうへ駈け出した。

「雪江、まさかお前、逃げてやしないだろうな。すまん、おそくなっちまった、すまん」

大吉は焼きつくすように雪江が恋しい。なんとなく涙がこぼれてくる。

「雪江——、おれの雪江」

からっ風が頬に痛い。明神下はもうひと息だと思って、大吉は逸散(いっさん)に柳原土手を駈けていく。

凄いような三日月がいつまでもあとを追いかけていた。

恋がたき

うぬぼれ

「すこし古いと思うな、先生も」
例によって人見知りをしない久能（くのう）周造の声が、いきなり耳についた。
「あら、なぜです」
相手は菊枝らしい。汗を拭きにその井戸端へ出ようとした直太郎は、どきりとして袖垣のかげへ立ち止まっていた。晴れた秋の午下がり、一叢（むら）の萩（はぎ）が白く点々と足許に散りこぼれている。
「菊枝さんの前で、こんなことをいうと怒るかも知れんが」
「怒りませんわ、わたくし」
「では、正直にいいますがね、試合に愛娘（まなむすめ）をかける、どうも少し大時代じゃないかと思い

ますな」

「まあ――」

菊枝は洗濯をしているらしく、急に水の音が激しくなった。――立ち聞きは男らしくない、そう思いながら、直太郎はちょっと出て行く機会を失った形だ。いや、あまりにも無躾な周造の言葉に、やっぱり聞き耳を立てずにいられなかったのである。

「わたくし、父からそんなこと、なにも」

「無論拙者だって、直接うかがったわけではない、これは想像です。しかし、決して単なる想像ではない。その点は菊枝さんも同感だと思うな」

「――」

「われひと共に一番信頼のできる高弟に流名を譲って、この道場を任かせるということは、暗黙のうちに菊枝さんも含まれてのことだ。第一、試合によって後継者をきめるというのは昔式だ、剣技に勝った者が、必ずしも人格者であるかどうかわからん。しかも、その試合に愛娘までかける、いよいよ以って旧式だ、勝った者が必ずしも菊枝さんの気にいるとはかぎらんですからな」

「いいえ、わたくしのことでございましたら、父の申しつけにしたがいます」

「やれやれ」

「御不満でございましたら、お勝ちなさらなければよろしいではございませんか」

笑っているような気軽な言葉づかいである。

「いや、八百長はいけません。武道を辱かしめるものだ。ただし、万一拙者が試合に勝っても、それは菊枝さんがほしいためではない、拙者は天下に大きな野心があるのだ。これだけはどうかあしからず」

直太郎はそっと袖垣のところをはなれた。嶮しくなった顔色を二人に見られたくない負け惜しみがあったからだ。

が、どこへも持って行き場のない鬱憤が火のように渦巻いている。なによりも、菊枝があんなに親しく周造と口をきいているとは、思いもかけなかったのだ。

明日に迫った秋の試合が、長年野州雀の宮在にその人ありと知られた老剣客新井五郎左衛門信房の後継者を選ぶものであり、従って名誉あるその皆伝と道場をうけつぎ、それが周造のいうごとく一人娘菊枝をも含んでいることは、直太郎もよく承知していた。その直太郎にとって人も許し我もみとめるただ一人の競争者は久能周造だったのである。

直太郎は土地の郷士草川家に生れ、周造は草川家の世話で土着した渡り浪人の伜で、母はもと直太郎の家の小間使であった。だから幼いころは周造に対して、あたかも主人のごとく振舞った直太郎である、年も周造の方が一つ下であった。

それが少年期から青年になるにつれ、学問武芸同じ師についていっしょに育てられるうちに、周造は小柄ながらどこか肚の据った才気をあらわしてきて、いつの間にか直太郎のよき好敵手になっていた。直太郎は一こくな性格から、常に周造ごときに負けるものかと自信を強いて持ちつづけてきたが、そして周造は自家の立場をよく心得ていて必ず一歩譲っていた

が、どうかするとそのためにかえって、

（おれは本当にすべてにおいて、周造にかなわないのではないか）

そんな不安を感じさせられることが、決してすくなくはなかった。

ただ一つ、菊枝に対してだけは、完全に自信があった。腕前からいっても、三本に二本は、必ずとっている。老師が自分に対する期待、世間の噂、そしてわざと親しい口こそきかないようにしているが、折りにふれて菊枝の目にも動作にも、あきらかに或る感情を読みとっていたのだ。やっぱり自惚れにすぎなかったのだろうか。

冗談さえいいあっている今日の二人の態度には、自分の場合以上に許しあっているものを感じる。しかもその会話の一つ一つを吟味すれば、結婚は娘の意志に任かすべきであり、なあに、いざとなれば試合だっておれが勝つ、そう周造はいい、それを菊枝もみとめているように思えてならない。

（くそッ、叩きのめしてくれる、その上で菊枝の方はきっぱり断わってやろう）

それが悶々たる一夜が明けかけるころ、やっと得た直太郎の回答であった。

勝負

「直さん、どこか悪いのか、顔色がよくない」

顔を見るなり周造がきいた。よく光る敏感そうな目が、もうなにか探り出そうとしている。

「強敵だからな、よく眠れなかった」

直太郎はつとめて磊落を装った。男一匹、たかが娘一人のために悶々の一夜を明かしたと見抜かれるのは屈辱この上もない。

「冗談いいなさんな」

周造は妙な顔をしていた。

朝の挨拶に出ると、老人はじろりと顔色を見ただけだったが、

「どうかなさいまして」

廊下で会釈した菊枝は、びっくりしたように立ち止まった。腹が立つような初々しさである。

「いや、別に——」

素っ気なく道場へ出てきてしまったが、誰の目にも顔色のよくないのは目立つらしい。試合に気おされていると見られるのも癪だ。直太郎はひそかに控の間へ行って、ごろりと横になって見た。

眠れるかな、そう思っているうちに、本当に眠ってしまったらしい。目をさましたのは午近くだった。

「自信のある人は違いますな」

正直に買被ってくれる者もあり、事実寝不足は多少軽くなっていたが、一度うけた心の痛手はそんなことぐらいで到底拭い去られるものではなかった。自分の番が近づくにつれて、

不満だったら勝つなといっていた菊枝の言葉、勝ってもあなたがほしいためではないと無遠慮に答えていた周造の冗談めいた口ぶり、それらがすべて反語となっていく度か胸を抉り、今さらなんのための試合、勝ったところでどうなるのだと、あたかも菊枝一人を得んがための試合ででもあるような、そんな自棄な気持にさえなってくる、同時にまんまとしてやられていた宿命の競争者に対して、単なる嫉妬以上の敵愾心が鬱勃と燃え狂って、是が非でも叩きのめしてやらなければ、どうにも気がすまない。その上で菊枝はくれてやる、執拗にそんなことばかり思い詰めていた。

そして、いよいよ最後の時はきた。それはまた誰もが羨望と好奇心から、異常な関心を持ってきた待望の好試合でもあった。覇気に対する敏捷、名門に対して一介の素浪人、しかも美人を含む皆伝がかかっているのだから、傍観者にはこの上もない勝負であったに違いない。

直太郎は目が血走っているのを自分でも感じていた。抑えに抑えている鬱憤を、もう隠しきれなくなっていたのだ。竹刀をひいたとたんに、構えにも気合にもおのずと凄まじい殺気が爆発して、——おやというように見ているほうの者が、思わず息をのんだほど嶮しい空気につつまれた。

周造はと見ると、体格といい、身につけた稽古道具といい、至極見劣りのする粗末、小兵ながら、すこしも悪怯れず冷静水のごとく対峙している。

たかが田舎の道場とはいえ、一時は江戸で鳴らした中西門の高足、新井信房といえばいま

だに剣客仲間では、あああの腕力の強い先生かで通る名物老人、それが修行にかけては老来益々口やかましく、本格的に薫陶された老人自慢の愛弟子二人である。それが妙なことから殺気立って相対したのだから、双方そう簡単には動けないし、それだけに一層凄味が加わる。

（くそッ）

はじめから火のようになっている直太郎は、次第に我慢ができなくなってきた。いつも三本に二本は必ずとれる自信がある、それが今日は妙に手強いのだ。あくまでも冷静な面魂に、不敵な底力をさえ感じて、——いよいよ此奴本性をあらわしたかなと思うと、もういけない、貴様などに負けるものかという反撥心だけがむらむらっと全身を焼きつくして、

「とう」

だっと床板を蹴りながら、得意の面へ強引な一本、風を巻いて撃ちこむのへ、あたかもその出端を待っていたもののごとく、周造の竹刀が籠手へ同時に疾風となって切り返してきた。

形は相撃ながら、ぴしりっと骨までとおる激しさが身にこたえる。

（やられた）

そう思うと、もう直太郎はわずかに残る理性を吹飛ばして、嚇と逆上していた。今の一合で飛びちがった体勢をくるりと振り返りざま、

「や、や、やあッ」

竹刀を大上段にふりかぶって、当れば竹刀とはいえ目がくらんだであろう、まことに鬼気せまる気合一杯の出端(でばな)、

「それまで——」

信房の白扇がさっと二人の間へ割って入っていた。

決　意

(おれの負だ)

直太郎は家へ帰るなり、一室に閉じこもって、頭を打ち胸を掻きむしりながら、文字どおりのたうちまわった。初めの面はこっちが浅い、二度目の上段にも、周造は岩のごとく冷静に構えていた。騎虎(きこ)のいきおい、そのまま撃ちこめば見事胴切にされたろうことを明かに感じている。完全に負けたのだ。

とうとうあいつは本性をあらわした、ざまあ見ろと思っているに違いない。今は菊枝をどうするなどという、そんな小さな問題ではなかった。あいつに及ばない、それだけが無念である、おのれの不甲斐なさが口惜しい。

それに、試合は三本勝負の約束だった。なぜ先生は途中で引分けたのだろう。おれに花を持たせるためか、いやだ、そんな好意は死んでもうけたくない——それとも、おれが常軌(じょうき)を逸していた、そのために中止させたのかも知れない。ついにおれは未熟不鍛錬、肚(はら)の浅さ

まで見られてしまった。このままではどうしてもすまされない。

(江戸へ出よう、何年でも修行してやる、あいつがうちのめせる腕になるまで)

一度叩きのめしてやらなければ、男の意地が立たないのだ。

「直太郎、どうかおしかえ」

翌朝、母が心配して訊きにきた。

「どうもしません」

「だってお前、昨夜から御膳にもつかないじゃないか」

「眠いんです、放っておいて下さい」

直太郎は蒲団から顔を出さなかった。

「周造がちょっと逢いたいといってきているんだがね」

「今日は逢いたくないといって下さい」

様子を見にきたのだろう、遠慮しなくたって、皆伝でも菊枝でも勝手にもらうがいい。おれは江戸から帰る日まで、二度と貴様に逢いたくない。直太郎はそう肚をきめてしまった。

午ごろ女中が、先生から迎えの使がきたと取次いできた、直太郎は返事もしなかった。二度目には母がまた枕もとへ坐った。

「直太郎、いいかげんになさい、不平があったらなぜ男らしくはっきりいいません。不貞寝(ふてね)などは腐った女のすることですよ」

頭から一本やりこめられた。それに違いないのである。

「なにか御用ですか」
直太郎はむくりと起きなおった。
「道場へ行って、御用をうかがっておいでなさい、かりそめにも師と仰ぐ方から、二度も迎えの使者をうけるのは無礼です」
一度ひらきなおられると、父でさえ頭があがらなかったという利かない母である、怒らすと怖いし、それに少し腹もへっていた。
「すぐにうかがいます」
「そうなさい、——ああ、周造はよろしくといって帰りましたよ。なにか思い立つことがあって、しばらく江戸へ行ってくるのだといっていました」
「江戸へ——」
ぎくりとした。また先(せん)を越されたような気がする。
「なにしに行ったんだろう」
「だからお前、逢えばよかったのに」
或いはまだ老師のところにいるかも知れない。それにしても、勝った周造がどうして江戸へなど出る必要がある。おれに対する気兼ねか、それとも老師の計らいか。——それだけは聞かずにいられない、自分へのつまらぬ義理立てなら、断然ことわるまでだ。
「おいで遊ばしませ」
玄関へ出迎えたのは、高島田の瑞々(みずみず)しい菊枝である。珍しくよそゆきに改めて、つつまし

く体一杯恥らいをさえただよわせながら、顔もあげ得ないのだ。周造とはあんなに冗談口さえきいているくせに。
「周造はきていますか」
念のために聞いてみた。
「いいえ、あの、先ほどお帰りになりました」
稽古休みで、家中がひっそりとしていた。老師はあかるい秋の陽ざしが障子に冴える奥の居間で書見をしていた。
「先生、お迎えでしたそうで」
ろくに挨拶もせずに帰ってしまった、昨日の今日である、ちょっと具合が悪い。
「おお、きたか」
「昨日は失礼仕りました」
「うむ、どこか体の具合でも悪いか、冴えん顔色だのう」
いつもながら慈悲にみちた眼差である。
「いいえ、別に——」
直太郎はいよいよ気恥かしい。
「周造は江戸へ立ったそうですね」
「うむ、あれはそういう男だ。拙者のは活用剣ですと、昨夜も気焔(きえん)をあげておったが、剣に生きるより、その剣を国事に活かしたい、いわゆる憂国の士とでもいうか、じっとしていら

れぬ性分なのだな。畳の上では死ねぬぞというてやると、自分もそう思います、しかし先生、そういうお先っ走りが世の中にいなければ、なかなか尊攘の時勢はきません。先生の門下から一人ぐらいそんな変り種が出てもいいでしょうと、不敵に笑いおった」

愛弟子のその決心を半ば自慢したいような、老師のあたたかい口ぶりであった。

「では、江戸よりむしろ京都ですな」

嚇と体中の血が熱くなる。そういえば、天下に大きな野心があるんだと、あの時井戸端で菊枝に話していた。尊攘は彼の持論でもある。またしてもやられた感じであった。

率直にいえば、自分が勝手に嫉妬に狂い、一剣技の勝敗に拘泥している間に、周造はもっと大きく活きた舞台を理想とし、単に口先ばかりでなく、堂々と実行に移してしまった。自分の根性の小ささを、こうまではっきり見せられたこともない。

「そこで、この際耳に入れておきたいのは」

老師は改めて坐りなおった。

「ささやかながらわしが半生をかけてこれだけにした道場、これをお前にあずかって貰って、ついでに不肖の娘をめとってもらいたい。実はその相談に呼んだのだが、お前の意見はどうかな」

「先生、昨日の試合は手前の負です」

直太郎はきっぱりいって、老師の目を瞶めた。周造がいなくなったから、かわりに自分が選ばれる、そんな屈辱にはたえられないのである。

「負、そういえば昨日の面は少し浅いようでもあったな」

「三度目の面も恐らく駄目だったでしょう。負けたものが先生の跡をつぐ、それでは世間が承知しないと思います」

「いや昨日はいつもより不出来のようではあったが、わしは負とは思わんがのう」

「その不出来が大切な場合にのぞんで肚の足りない証拠です。それに結婚のことは菊枝さんの意志もありましょう」

「なに、菊枝ならもう承知している」

その承知も、父のいうことだから無理でもしたがうという式の承知にしかとれない。

「先生、せっかくのお言葉に我儘を申してはすまぬと存じますが、手前は両三年ほど江戸へ出て、この上の修行をしたいと肚をきめています。決して周造を真似るわけではなく、昨夜からさんざん考えてのこと――母へも先生からお口添えいただけないでしょうか」

直太郎は急に逆襲に出た。

「江戸へ――」

信房もさすがに驚いたらしい。思いつめているような若々しい顔を、しばらくじっと眺めていたが、

「そうか、よかろう。修行は若いうちだ、広く世間を見てくるのも薬になる、口添えもしてやろう」

案外あっさりと承知してくれた。なまじ止めても無駄と見抜いていたのかも知れぬ。

池田屋騒動の夜

思いついたら、矢も楯もたまらない。一途の性格である。しかも周造という好敵手に一歩先んじられているのだ、直太郎は翌日早々に故郷を飛び出して、江戸へ向った。

が、それは単に剣の修行だけが目的ではない、あくまで周造が競争相手だ。それでも一年ほどはおとなしく上野御徒町の伊庭道場にとどまって、心形刀流を学びながら機会を待ったが、ついに時はきた。

　幕府が旗本の二男三男から腕達者を募って見廻組を組織するにあたり、その客員に推薦され初めて京へのぼったのは元治元年の春、直太郎が故郷を出てから、足かけ三年目であった。無論直太郎の場合は倒幕佐幕とかいうはっきりとした主張があったわけではなく、京へ行けば周造に逢えるだろう、その周造を活きた舞台の上から、あっといわせてやりたい気持が多分に働いているのである。

　この見廻組は、上洛すると京都守護職たる会津の支配をうけ、間もなく、池田屋騒動に一役受持たされるようになった。主役は新選組で、これがあったために王政維新が一年おくれたとさえいわれる志士の大殺戮である。

　六月七日夜。長州肥後土佐その他脱藩の浪士が、三条小橋の池田屋へ集合して、恐るべき陰謀を画策していると探知した新選組では、近藤勇自ら一隊をひきいて夜十時、ふいに池田屋を囲んで夜襲をかけた。その結果、討取った者七人、疵を負った者四人、召捕二十三人におよんだという。

　当夜、木屋町から河原へかけて警戒の任にあたっていた見廻組に参加して、一行におくれた直太郎が一人、なにげなく材木置場の前を通りすぎようとして、気のせいかちらっと材木のかげへかくれた人影を見たような気がした。それはあたりをうかがおうとして立って、人の通るのにおどろいてまたかくれた、そんな風に思える瞬間的な影である。

　直太郎は念のために、いろいろな形に材木が積んである間を、用心しながら次第に奥へ歩いて行った。星空のむし暑い夜で、新しい木の香が生ぬるい夜気に重苦しく淀んでいた。

「あっ――」

　急に直太郎は飛びさがって、柄に手をかけた。もうのがれぬと観念したかふいに行く手へ立ち上がった人影が、刀を構えたのである。手負らしい。材木に背を持たせながら、喘いでいるのが肩にはずむ息づかいでわかった。

「誰だ」

　直太郎は少しも闘志がおこらない。相手が実際に辻斬りや強盗を働く不逞浪人ならとにかく、反対党の志士をさえ見れば無条件で殺戮をする見廻組の真相が、このごろやっとわかってきて、なにか不満に似たものを感じている直太郎であった。

　しかも敵は手負である。次第によってはこのまま見のがしてもいい気持で、まだ刀さえ抜いていなかった。

そういう態度を敏感に感じたらしく、じっと星あかりにこっちをすかして見ていた相手が、
「あ、直さん、――直さんじゃないか」
がくりと構えていた刀をおろした。
「なに、――おお、周造」
叫ぶのといっしょに、思わず駈けよっていた。
「逢いたかった、直さん」
周造は蒼白な顔を微笑に歪(ゆが)めながら、直太郎の腕の中でくずれるように膝をついてしまった。ぷんと血の匂いが鼻につく、相当重傷らしい。
「どうした、周造、――傷はどこだ」
「腹だ――なあに、今手当は自分でやったが、まあだめだろう」
「気の弱いことをいうな、――しっかりしろ」
「うむ、気はまだたしかだから大丈夫だ。なつかしいなあ。おれは知っていた。直さんが見廻組にいるのを」
意外なことをいう。周造は膝枕をさせられた顔を仰向けにして、しみじみと直太郎を見上げるのだ。
「知っていた――」
「うむ。新選組や見廻組が怖いから、こっちは始終気をつけるさ、一度逢って話したいと思っていた」

「池田屋から逃げてきたのか」
「うむ。敵と味方、――そんなことはどっちだっていいが、直さん、あんたどうして、おふくろ様を棄ててきたんだ。先生や菊枝さんをなぜ棄てたんだ」
「――」
激しい目をする。まるで詰問(きつもん)するような語気だ。
「今夜はいうぜ、直さん。おれは心配していた。こんなことになりやしないかと思って。正直にいってくれ、直さんは菊枝さんのことでおれを疑ったんだろう」
「いや、あの試合はおれの負けだ」
「試合――」
今となっては苦しい言訳である。
「負けたものが道場をつげるか、おれはいやだ」
「相かわらずだなあ。はっきり断わっておくが、おれはわざと負けたり、恋をゆずったりして、直さんの御機嫌なんかとったことは一度もないぜ。我儘なんだ、直さんのは。どこまでもおれに負けたくない、勝っていてもそのために人を疑い、自分を疑う。――本当は試合なんか、どっちだってよかったんだ。おふくろ様にも先生にも、菊枝さんにも、直さんが必要だった。必要な人間が必要なことをしてやる、それが生れてきた人間の責任じゃないか」
「――」
「帰ってやれよ、直さん。どうして素直な気持になれないんだろうなあ、菊枝さんの口から

本音を吐かせようっていうんなら、そりゃ無理だぜ。娘はなんでもない男には平気で冗談もいえるが、惚れた男は、まともに顔さえ見られない、女房にして下さいなんて、自分の口からいえるもんか」

別れた日、玄関まで見送ってきて一言も口はきかず、蒼ざめていた菊枝の姿がはっきりと瞼にうかぶ。――そうか、あれは嫌われたと思った娘心の必死の姿だったのか。

「もう、なんかいうことはなかったかな。そうだ、ぼんやりしてやがる。おれは直さんに一つだけ勝ってやろうと思った。思いきり尊攘に働くことだった。おれは働いた、おれだけの分を。――帰ってやれよ。直さん。直さんにゃおふくろ様がいる。家がある、菊枝さんがついている」

「どうした、周造。――おい、眠っちゃいかん、おい」

「うむ、みんないい人だった、なつかしいなあ。直さんとは喧嘩ばかりしていたが、よかった、逢えて。一番なつかしかったんだ、やっぱり喧嘩相手だからな」

「周造、目をあけろ、眠る奴があるか、馬鹿」

「いい、もういいよ、田舎の臭いがすらあ」

わずかに膝をまさぐって、びくりとその手が動かなくなった。

「周造――」

あわてて覗きこんだ顔がほの白く、微笑さえうかべて眠っているかに見える。

「馬鹿、死ぬ奴があるか、――馬鹿」

激しくその肩を揺さぶりながら、直太郎はもう意地も見得もなく、急に涙が迸り出た。

むしむしと風一つない星空の夜であった。

花嫁太平記

留守居役

藤翁は客を玄関まで見送ってから、むっつりと元の座敷へかえってきた。客の話が事実だとすると、伜は飛んでもない変り者ということになる。腹が立つというより、当惑した気持だった。

「どうかなさいましたか」

茶器を下げにきた妻が、顔色を見て不審そうに訊いた。

「大体お前がいかんのだ、たぬき婆め」

「たぬき、私が」

婆というにはまだ少し若すぎる四十前の妻は、びっくりして端麗(たんれい)な顔をあげた。年が十六七も違うので、良人は自分が老人の部へはいってから、時々妻を婆さん呼ばわりする。が、

いきなりたぬき婆と頭からやられたのは初めてだ。

「ほ、ほ、私がたぬき婆」

妻は可笑しかったと見えて、静かにわらった。

「それがたぬきだと申すのだ。あいつは貴様に似たんだ」

「藤太郎がですか――。藤太郎がどうかしたんでございますか」

妻は一向に動じない。その落着いた姿を見ていると、伜藤太郎はたしかにこの母親の気質をうけついでいるような気がしてきて、藤翁はひそかにため息が出た。

「どうかしたどころではない。伜が帰ったらすぐよこしなさい。怪しからん子だぬきだ」

藤翁はいいすててぷいと居間へ立った。実は客を送り出してからここへ坐っていることはなかったのである。うっかり坐ったのは、やっぱり戸惑いしているのだ。

(まさか、こんなことで心配させられようとは、思っても見なかったからな)

藤翁は隠居がしたいから役目を伜に譲ったのではない。江戸の留守居という役は、お互いに主家の交際を代表して同じ詰席の諸侯の留守居役が公用を達すので、慣れてしまえばなんでもないが、習慣をおぼえこむまでは相当骨が折れる。それに新参はなにかにつけて古参に追いまわされなければならない。そういう苦労は若いうちにさせてしまった方が身のためだと思ったから、最近家督をわたしたのだ。

留守居役は公用がすんだ後で、必ず宴会を開く。むしろ公用は従で、宴会の方が本職であるような観さえあって、新参にはこれがなかなか厄介である。諸事最古参の老輩が先達で、

これを大先生と称し、床の間の正面に坐る。大先生には一同師弟か主従のごとき礼をとらなければならない。以下席順は役付になった年の順で、服装は羽織袴だが、新参にかぎって麻裃紋付で末席へつく。時を見計らって、一々先輩の前へ出て盃を頂戴する例になっている。本当に飲んではたまらないが、そこは取持に出ている芸者の方が慣れていて、大抵酌の真似をして助けてくれる。

「どうだったな、今日の宴会は」

初めての時は世の親馬鹿のご多聞にもれず、藤翁は伜の帰りを待ちかねるようにして訊いてみた。

「はあ、思ったよりも退屈なものですね」

藤太郎は案外落着いてわらっていた。別に気疲れがした様子も見えない。元来が口数のすくないのっそりとした方で、親に対してもこっちから訊かなければ、自分の方から話しこむというようなことは滅多にない奴である。恐らく黙って人の話ばかり聞いていたのだろう。が、わらっているようなら、どうにかうまく行ったのだろうと思った。

「まあ辛抱しなけりゃいかん。新参のうちは誰でも窮屈なものだ。なあに、人と人との交際なのだから、そのうちには自然座持のこつがわかってくる。ただ人に憎まれないように、それだけは気をつけることだ」

なまじ小悧巧に立ちまわるより、新参のうちは少し茫としていて、人に笑われるくらいの方が愛嬌にもなって無事なのである。伜はその無事の方の組だろうと思っていた。

新参は一通り諸藩の留守居を廻勤することになっている。つまり就任の挨拶まわりだ。若党一人、草履取一人、合羽籠一人、馬の口取一人を従えて行く。一日そう何軒も廻るわけには行かぬから、当座は毎日江戸中を歩きまわらなければならない。これも根気よくやっているようだ。昨日は夕方帰ってくると、品川の茶屋から呼び出しがあって、すぐ駕籠で飛んで行った。こういう場合大抵その夜は帰れない。

疲れているだろうに、勤めとはいえご苦労だなと思っていると、珍しく宵をすぎるころ帰ってきた。

「よくこんな時分散会になったな」

滅多にない例なので訊いて見ると、

「はあ、手前が行ったころにはもうすみかけていました」

藤太郎はにこにこと邪気のない顔をしている。

「そうか。そりゃよかった。まあゆっくり休め」

明日はまた一日中歩きまわらなくてはならないのである。そう思って早く休ませたが、それがちっともよくなかったのである。実は伜め、えらいことをやっていたのだ。

面よごし

今日午すぎに、突然島原藩の留守居勝川民右衛門がたずねてきた。藤翁が勤務中特に親し

くしていた間柄で、人物も温厚な頼みになる男だ。

「早川さん、今日は御子息のことであがったのだが、——気を悪くしないで下さらんと困りますぞ」

「ほう、伜がなにか失策でも——。うかがいましょう。実は家督は譲ったものの、まだあのとおり若年者のこと、どんな様子か一度そこもとをたずねて訊いて見ようと思っていたところだ」

「御子息はまだなにも話しませんか」

「一向に——。あれはどうも無口の方でな」

「いや、お若いに似ず、なかなか肚は据わっていられる。その点はひそかに感服しています」

満更お世辞でもないらしい。が、後がいけなかった。無口でどこか肚が据わっていて、始終にこにこしている。が、その男らしさは、悪くいえば柔味がなくて、気にする者には妙に目ざわりになるらしい。

「つまり性が合わないといいますかな、我々はなんでもないのだが、知ってのとおり先生はああいう人柄だ、どうも気にさわったらしい」

帝鑑の間の大先達は、小田原藩の松田甚十郎という藤翁と同じ年輩の人物であった。世話にくだけていながら、一面傲岸なところがある。それも下手に出ていさえすればうまく納まってしまうのだが、藤太郎はそれをしなかった。といって、別に逆らうというほどのことはなかったのだが、どこか超然としているようなところが気にいらないのだろう。

二度目の宴会の時、盃を頂戴に出たが、松田はあたりの者と芝居の噂をしていて、なかなか盃をくれぬ。盃をもらわなければ次へ立つことができない。ここで藤太郎が、

「なにかお気にさわったことでもございましょうか。以後十分注意いたしますから、どうぞお盃を頂戴いたしとうございます」

こう下手に出て謝ってしまえば、その尾について必ず誰かが口添えをする。そこは物なれた苦労人が揃っているのだから、

「おお、これはとんと失念した。さあ一つ」

大先生も世話にくだけて、決してそれ以上恥をかかせることはしないのが普通である。

が、藤太郎は大先生の話を聞くでもなく聞かぬでもなく、いつまでもにこにことわらいながら坐っていたという。とうとう大先生の方が根負けしてしまって、

「なんでお手前は人の顔ばかり見て笑っているのか。無礼であろう、お退りなさい」

と、睨めつけた。藤太郎はちょっと呆気にとられていたが、そのまま一礼して自分の席へ帰ってしまった。

「お若いからしかたがないが、どうも困りました。棄ててもおけませんので、手前が中座して御子息を蔭へ呼び、何んと申しても新参のことなのだから、下手に出なければいけないと注意しましてな、一緒に先生の前へつれて出て詫びさせました。その日はそれですんだが、また昨夜です」

昨夜の席は品川の土蔵相模だったが、藤太郎が駈けつけた時にはもう大分酒がまわってい

た。

「たいへん遅参をいたしまして」

藤太郎はすぐ大先生の前へ両手をつかえた。無論この間のことを根に持っているというほどの深い意味はないだろうが、

「遅い、遅い。お手前などはまだ由良之助のばたばたをきめこむ役者ではない」

大先生は頭から浴びせかけた。いわゆる新参いじめである。――はい、つい花道でお軽にからまれまして、などと軽くかわすような器用さは藤太郎にはない。

「手前別に役者などをつとめたい気持はございません」

真正直にうけて、例のごとくにこにこわらっているのだ。取りようによっては、いかにもそんな悪洒落を口にして得意がっている相手を見下しているようにも見える。

「白痴め、誰が役者になれと申した。第一御手前のような無器用者に役者がつとまるか、どうして藤翁はお手前のようなぼんくらに後をつがせたのかな。御主家のいい面よごしだ」

酒気も手伝っていたのだろう、思い切った大先生の罵詈が飛んだ。

「私にはお役が勤まらぬといわれるのですか」

「ほう、お手前はそれでも一人前にお役をつとめている気か」

「先生、仮りにも侍がお役に立たぬ、そう折紙をつけられた場合は、どうせねばならぬものか、御承知でござろうな」

藤太郎の顔からすっと微笑が消えた。

「なにッ」
はっと見る間に、藤太郎は、前にあった膳を悠々と押しのけ、片膝立ちになって、左手が松田老人の胸倉をとった。右手がいつの間にかふところの短刀を抜き放っている。
「もう一度しかと承りたい。そこもとは幇間の真似をしなければ留守居役はつとまらぬ、さよう申されるのか、それとも拙者になにか侍の道に外れたことがあって、主人の面よごしと申されるのか、いずれでござる」
至極落着き払っての詰問である。そこに居あわせた男も女も、あっと気をのまれて声一つ立てられなかった。

親馬鹿

「かような次第でな、これはなんといっても松田先生の失言です。ご子息は返事一つで相手を刺し、自分も死ぬ肚をちゃんと据えている。どうして立派な態度でした。さすがに先生も急には返事ができない。また返事をさせてしまっては大変だし、満座の中で大先達に恥をかかせるわけにも行きません。不肖が仲裁役を買って出ました。——藤太郎どの、お手前の申分はよくわかるが、ここで即答を迫られるのは場所柄ちと過激にすぎるように存ずる。大先生のご返事は不肖が侍の一分にかけて、必ず後刻お取次いたすから、とにかくそのお刀は手前に一時お預け願いたい。こう申し入れると、案外ご子息も素直に、それでは仰せに従い、

これはご返事といっしょにしかとお預けいたします。ご一統さま、新参者とて場所柄もわきまえず、まことにご無礼いたしました。平にお許し下されたい。ていねいに挨拶をして、そのまま座を立たれた。昨夜はそれで散会です。当惑したのは返事を預けられた拙者でな、実はいま松田さんをたずねてきました。幸い先方も失言はよく認めている、いつでも詫びようと云ってくれました。そこでご相談にうかがったのだが、先方は詫びるといっても、これはただ詫びさせたのではご子息のために後がよくないのではないか、今後とも役目の上から長い交際をしなければならんのだ。そこで、ここはどうでも一つ父親としてあなたに顔を出してもらい、お互いによく知っている仲なのだから、仲人の顔を立てていただきたい、こう存じて罷り出た次第ですが、どんなものだろうな、早川さん」
つまりこっちからも伜をつれて出て、親として頭を下げてもらいたいというのだ。
「よくわかりました。まことに行き届いたお扱いで、いつもながらご厚情忝けない。とにかく伜にも篤と申し聞けた上、そこもとまで何分のご挨拶をいたすから」
そういってひとまず仲人に引取ってもらったところだ。
藤翁は呆れて物がいえないのである。自分の目にはまだほんの乳の香のぬけ切らぬ子供にしか見えないのだが、思い切った真似をする奴だ。それもいい、昨夜それだけのことをやっておきながら、一言もそれを親にいわぬ。今朝は平気で廻勤に出て行った。どこまで図太い変り者だろうと考えると、わが子ながら少し空恐ろしくもなるのだ。
（一体、どんな考えでいるのだろう。一つ頭から叱りつけてみるかな。親に無断で腹を切る

ような真似をそう度々やられてはたまらん）

かけがえのない一人息子なのだ。親の心も知らず、いかに分別のない若年とはいえ、あまりにも常識外れなのが腹立たしい。

（おれはもうあの年頃には、立派に親父の後をついでいたんだが）

藤翁は明け放した春の庭を眺めながら、いつまでも当惑していた。そして、急に気がついた。早く嫁をもらってやらなかったのが間違いだ。家庭の味がわかれば、そう無鉄砲(むてっぽう)はできなくなるものだ。

藤太郎が帰ってきたのは、やがて夕方近かった。

「ご用だそうですね」

母にいわれて、玄関からすぐに来たのだろう。麻裃のままの姿で、呆れるほど穏(おだや)かな顔をしている。

「ご用かではない。お前、昨夜品川でなにをやってきたんだ」

「ああ、勝川どのがお見えになったのですね」

「来たとも、来なくてどうする。お前は本当に昨夜、大先達を刺す気だったのか」

「はあ、このごろの留守居役は腐っています。無用の宴会に多額の冗費(じょうひ)をつかって、役者の噂、相撲(すもう)の話しか能がありません。あれではいけませんね」

「いけないと申してお前、そりゃ目にあまることはわしも知っている。が、若輩(じゃくはい)のお前が一人でむきになって見たところで、長い間の習慣なのだから、どうにもならん話ではないか」

「それはそうですが、思いついたことは先ず自分がやらなければ人はやりません。陋習(ろうしゅう)は早く破らないと、異人共に勝てぬ。いま大切なことはどうして異人共の武力から、国を守るかということだけじゃないでしょうか」

完全に藤翁の負であった。突飛(とっぴ)な理想論と片づけてしまえばそれまでだが、国内は外国条約をめぐって騒然たるものがあり、幕府は目下生麦事件の代償として、英国から十万磅(ポンド)の要求をつきつけられている。その要求貫徹のために英国東洋艦隊は江戸湾を圧して砲口をみな江戸へ向けているのだ。残念ながらそれに対する国の防備はといえば、皆無(かいむ)というにも等(ひと)しい。

そういう大きな心配をしている目から見れば、泰平の遺物たる留守居役の交際がいかに下らないものか、——藤太郎が退屈なものだといったのも無理はない。

「まあ、それはそれとして、勝川がいうには、先方も失言を認めて詫びるといっているそうだ。それについてはだな、なんといっても先方は大先達だ。まるっきり恥をかかせるわけにも行くまい。一応の礼儀として、わしに顔を出してくれぬか、つまりお前といっしょにその席へ出て、まあ挨拶をしてくれというのだな。せっかく仲裁に入った勝川の立場も考えてやらなければならんと、わしは思うのだが」

なんのことはない。一所懸命伜の機嫌をとることになってしまった。

「それでいいと思います。お父さんには申訳ありませんが、話さえわかれば手前はいつでも頭を下げます。実をいえばこんなことで死んではいられませんからね」

「そうだとも、話さえわかればいいんだ。そうしてくれれば、第一勝川がよろこぶだろう」
藤翁はほっとして、親馬鹿とはよくいったものだと、しみじみと考えさせられた。

先まわり

しかし、藤翁は伜の性質ではとても留守居はつとまらぬと見た。第一危険である。いつまた爆発するかも知れない心配で手放しておけないのだ。そこで和解の一席があった後、間もなく責任をとる形にして、伜を退役させてしまった。無役になるということは決して名誉ではなく、直接生活にもひびいてくるのだが、そんなことにはかえられなかった。
平気なのは藤太郎で、暇のできたのをいいことに、部屋住み時代の学問と武芸の修業を復活して、せっせと道場通いをしている。
（どこまで変っているのかわからん）
とにかく一日も早く嫁を持たせなくてはと、藤翁はひそかに物色し始めた。
ちょうど似合いのがある。同藩目付役滝本定右衛門の次女で、縹緻も人柄も不足はない、ただ娘としては少し薹が立ちすぎている。伜とは三つ違いの十九だ。しかし、ああいう伜には若い嫁よりかえって女として一通り分別のついた嫁の方が押えがきくのではないかと思った。
「藤太郎、嫁を貰え」
話をすすめてしまってから、厭だといい出されては困る。藤翁は用心して、頭からやって

見た。
「来るような娘がありますかね、どこの娘です、そんな物好きなのは」
それでも自分の評判はちゃんと知っているらしい。
「まだ先方へ話したわけじゃないが、滝本の娘がいいと思う。仲々しっかりしているようだ」
「まあ二三日考えさせて下さい」
その二三日が数日になって、先方でくれるなら貰ってもいいというのだ。気のかわらぬうちにと思ったので、藤翁は人だのみをせず、自分で出かけて行った。同藩のことでそう他人行儀にする必要もない間柄のことだ。
「どうだろう、突然不躾な話だが、お乃芙どのを伜の嫁にくれんだろうか」
「うむ、やってもいい。実はもう来る時分だと覚悟していたところだ」
案外あっさりとうなずいて、滝本老はにこりと笑った。
「覚悟とは――」
「この間伜が挨拶にきた。藤翁の前だがあれは成程少し変っているな」
「ほう」
藤翁は驚いて目を瞠るばかりである。
「わしをつかまえて言草が面白い。まだこちら様へお話はございますまいが、父は手前に御息女をもらわぬかと申します。こちら様がおことわりになるお心ならよろしいのですが、も

し考えて見ようという思召（おぼしめし）があるようでしたら、甚だ不躾（ぶしつけ）ですが、一度御息女にお目にかかっておいた方がいいと思いまして参上しました。どうだろうというのだ。わしは云ってやった。貴公は人の娘を試（ため）しにきたのかな。そうではございません。試されにきたのです。私は親共の目がねで選んでくれた嫁なら決して文句はいわぬつもりです。嫁にきてからこんなはずではなかったと、少しでも御息女が後悔するようでは、親共に歎きを見せますからと、大真面目なのだ、言い分が気に入ったから、娘にもそういいきかせて、実はもう見合ずみなのだ」

「呆れた奴だな。どうも自分の子だが、あれの考えていることはわしにはわからん」

藤翁は正直に歎息せずにはいられなかった。

「いいではないか、変っているといってもいうことやすることに間違いはない。立派なものだ。娘もその気でいるようだから祝言させてやろうではないか」

こうして藤太郎は間もなく乃芙を妻に迎えた。

乃芙は年だけにしっとりと落着いたいい嫁であった。夫婦仲も睦（むつ）じいようだし、こん度の結婚を、伜のために一番よろこんだのは、なんといっても姑（しゅうとめ）になった母親なのだから、こっちは心配ない。面白いのは姑が無口なところへ、嫁がまた口数のすくない方で、一日中ひっそりと二人で針仕事などをしている。

藤翁は当分大満足だった。それが秋ごろになって、伜は時々外泊してくるようになった。今までは決してそんなことはなかったのだから、まさか嫁をもらって女道楽でもあるまいと

は思う。それとも一風（ぷう）変った奴だから、案外人の逆を行きたがるのか、――いずれにしても怪しからんことである。第一、嫁が可哀そうだ。

「婆さん、このごろ伜はよく家を明けるようだな」

「それほどでもないようです」

「馬鹿なことをいいなさい。それほど明けられてたまるもんか。大体お前は甘いからいかん。嫁の身にもなって考えて見ろ」

「でも、乃芙にはよくわかっているようです。お母さま、ご心配なさらないで下さいと、わらっているんですから」

「それが甘いというのだ。誰が自分の口から亭主の道楽の意見をしてくれと、姑にいえるか。呆れた耄碌婆（もうろくばばあ）だ」

「ほ、ほ、道楽だなどとあなた、藤太郎は違います、あなたとは」

「勝手にせい、耄碌婆め。わしは知らんぞ」

しかし伜のことには敏感な妻がそういうのだから、まあ心配なかろう。もう少し黙って見ていようと、藤翁はいささか安心した。

頭を垂る

文久三年は実に多事な年であった。三月、将軍家茂の上洛（じょうらく）を機として攘夷（じょうい）の決定、主上

石清水の行幸、八月十九日の政変、七卿落、天誅組の敗北等、天下騒然たる内憂に加えて、英国償金問題、薩英戦争、長州の仏船砲撃等の外国問題があり、心ある者の目から見れば、一日々々と幕府は没落の一路をたどりつつあった。

が、事件の中心地たる京を遠く離れた江戸は、やがて例年のとおりと変らぬ年の暮を迎えた。

「藤翁、藤太郎が脱藩届を出した。知っているか」

暮も押詰った一日、迎えをうけて滝本の家をたずねると二人きりの部屋でいきなりこう頭から訊かれた。

「なにッ」

脱藩は昔から重罪ときめられている。脱藩に届を出す例などはない。しかし、浪士の間に尊攘の叫びが強くなって以来、天下に志をのばそうとする諸藩の士の間に、脱藩は近来流行のようになっている。大抵軽輩の士が多い。外様の間には幕府を憚って、藩が脱藩を黙認して策道させているところさえあるという。要するに、若い尊攘家にとって脱藩はもう常識になっているのだ。が、堂々と脱藩届を出した奴はまだあるまい。しかし松平家は親藩なのだ。藤翁にとって尊皇攘夷などということは、今まで遠い他藩の夢ぐらいにしか考えられなかったのである。

「いつのことだ、それは」

「今朝若党が家へ届けてきたそうだが、——藤太郎は家にいるのか」

「いや、昨夜は帰らなかったかも知れん」

実は一昨日の晩から帰らないのである。嫁の親の前だけに藤翁は冷汗を感じる。

「第一、脱藩届などという書式はない。これを見ろ、これはわしに宛てた詫び状なり、書置なりのつもりだろう」

一、脱藩届の事、

と前書して別行に、

一、拙者儀国事多端の折から誠に恐れ入り候得共この度脱藩仕候、御前態宜敷願上奉候

とある。月日、署名、宛名は御目付役滝本定右衛門殿となっている。

「怪しからん奴だ。ただこれだけか」

「これだけでたくさんじゃ。他に手紙を書くくらいなら親のそこ許にちゃんと断って行くだろう」

「うむ」

「御前態よろしくとは、後のことを、つまり親共のことをわしにたのむという意味だろう。当人はもう不逞浪人の仲間入りをした身だからというつもりで、わざと何事も世間を憚っているのだ。出来た奴だが、——少し出来すぎて、困ったのう」

「申訳ない」

滝本老は暗然たる面持である。

藤翁は顔があげられなかった。

「とにかく、こんな届は藩へは出さんがよかろう。出したところで通用はせぬ。指図するわけじゃないが、表面勘当の形式でもとらんと、家名が難しいだろう。まあ熟考して見てくれ」

娘のことは一言も口にしなかった。それだけに藤翁はいっそう辛い。後刻何分の返事をするといって、滝本家を辞したが、――伜を勘当すれば、誰か養子を立てなければ家名が立たぬ。嫁は当然親元へ返すべきだろう。

（なんという奴なのだ。わし等は親だから、不孝な子を持った因果とあきらめようもある。可哀そうに嫁の身になって見ればさぞ途方にくれることだろう）

考えただけでも胸が重い。国事多端の折から脱藩するなどと、親には一言の断りもなく、不逞浪人共の大言壮語にうかされて、――恐らくよく家を明けたのはそのためだったのだ。ついには親の首へ縄をつける奴だ。いや、それより腹が立つのは、二十二年の親の恩愛に黙って背いて行った強情さだ。子に裏切られたかと思うと実に情けない。

（不孝者め、――人でなしめ。そんな奴だとは思わなかった）

雪もよいの底冷えのする朝だった。

「お帰りなさいまし。――どうかなさいましたか」

と、出迎えた妻は顔色を見て、はっと胸を衝かれたようだ。二日帰らぬ伜に、なにかあったとすぐ直感したのだろう。

「乃芙をつれて来なさい」

藤翁はともすれば踉踉としたがる足元を踏みしめて、むっつりと居間へ帰った。炉の埋火をおこして炭を足しながら、その手がかすかにふるえているのに気がついて、思わずため息が出る。

妻に伴われてきた嫁が静かに端近へ坐った。初々しい丸髷が目に痛い。不吉な予感に胸が震えるのではあるまいか、じっと俯いた頬が白々と蒼い。少し窶れてさえ見える。

「冷えるようだ。火のそばへおより」

「はい」

「お乃芙、遠慮しないで」

妻がうながした。

釜がかすかに松風を立てはじめる。

「乃芙、藤太郎は脱藩したそうだ、そなたの父の手許まで脱藩届が出ている」

「まあ」

さっと顔色をかえたのは妻だった。

「そなた、何か思いあたることでもないのか」

「はい」

乃芙は膝に手をおいたまま、顔をあげようとしない。無論何か思いあたることはあるだろう。が、口の重い嫁に強いてそれをいわせたところで今更何になろう。

「親不孝な奴め、不逞浪人の仲間入りなどしおって、――勘当するほかはない。そなたの父の意見もそれだった。そこでな、親としてそなたにはまことに面目ないが、伜を勘当する以上、そなたもこれまでのことは身の不幸と諦めて、どうかひとまず親元へ引取ってくれぬか。さぞ辛かろうがたのみます」
「そんな、あなた、足元から鳥が立つように」
「お前は黙っていなさい、伜を不逞浪人にしたのは、わしにもお前にも責任があるのだ」
「あの、しばらくお待ち下さいまして」
乃芙はふっと立って居間を出て行った。その跫足に耳を澄ましながら、
「あれは、あれは、懐妊しているかも知れませんのに」
縋るような妻の顔である。
「なにッ、孫が」
藤翁は思わず目をみはった。そして、がくりとその目を炉へおとす、悲劇が一つ重なったのだ。雪になったらしくさらさらと窓に音がする。間もなく座にかえった乃芙は、
「お父さま。これを」
古びた書物を差出した。
「太平記だな」
「はい、その折ったところでございます」
「うむ」

巻第二十六、「正行参吉野事」の終り、
今度の軍に一足も不引、一処にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参って、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書連ねて、其の奥に、

返らじとかねて思えば梓弓
なき数にいる名をぞとどむる

と、一首の歌を書留め、逆修の為と覚しく、各鬢髪を切って仏殿に投入、其の日吉野を打出でて敵陣へとぞ向いける。
その返らじとの一首に朱点がうってある。
「これが――」
「乃芙がこちらへまいります前、太平記を読んだことがあるかと、それを貸して下さいました。そこを折って、朱点がいれてございます」
「うむ、たしか伜が一人で不意に見合いに押しかけて行った時のことか」
「はい、しばらく考えてから、わたくしやっとわかりました。乃芙はその時から今日のことを覚悟して嫁いでまいったのです。まいってから、別にそのことはうかがいもせず話したこともございませんが、こうなった時、自分にかかわって孝養をつくしてくれるか、出来なければ嫁に来るな、それがあの方のお胸だったと存じます。お父さま、良人は不逞浪人になったのではございません。ですから、不束ではございますけれど、どうかこの上とも、お側にお

いて下さいませ。このとおり、お願い、お願いいたします」
妻は泣きながらいざりよって行った。
「お乃芙、そなたは、まあ――そなたは」
そうだったのか。そこまで伜は深く考えていたのか。親にできなかったことを代ってしてくれる天晴れな奴、そして偉い嫁、――不覚の涙と共に頭が下がる。
「乃芙、忝けないぞ、では、そなた、こん度のことは聞いておったのか」
「はい。いよいよ時が来たようだと、たった一言、――脱藩届とかも、乃芙が今朝まであずかりまして」
「うむ、うむ、よく我慢した。さぞつらかったろう。――で伜は子供の、その生れるとかいう赤ん坊のことは」
「よろこんで、よろこんで、――お母さま」
ついに堪えかねて膝へ、声をしのんで泣き伏す嫁の肩を、妻は黙ってひしと抱きかかえる。
「もう勘当はやめた。誰に気がね遠慮がいるのだ。お暇を願えばそれでいい」
藤翁はしゃんと立って、西の小窓をあけた。粉雪が目もあやに霏々と舞い飛んでいる。その中へ、京へ京へと赤心を抱いて走る伜、――藤翁の胸はからりと晴れて、やがて深く深く頭を垂れていた。

五月雨供養

相合傘

「お縫さん、――お縫さんじゃないか」
影山健作は下谷車坂の角で、ふっと立ち止まった。一度やんで、今し方から急にまた降り出したびしょびしょ雨の中を、顔から肩へ風呂敷をかぶって、小褄を高だかとたくし上げ、小走りに濡れてくる娘、買物に出て降られたという無雑作な恰好だが、濡れてまつわる娘らしい裾から、しらじらとした脚が夕闇になまめかしい。
「あら――」
前屈みになっていたのが、びっくりしたように顔をあげて、
「お帰りなさいまし」
はっと小褄をおろし、かぶっていた風呂敷をとって会釈した。どぎまぎと耳朶まで真っ赧

になっている。

「お入り、――濡れる」

健作は傘をさしかけて、肩を竝べながら、赧くなったのはあながち、はしたない姿を見られたばかりではない、質物をおきにきた帰り、昨夜の今日だけに、それを恥らっているのではあるまいかと、いじらしかった。

「遠慮していると両方が濡れる」

「でも私、もうこんなに濡れていますから」

「詰まらぬ遠慮だ。それともお縫さん、相合傘は気がとがめるかな」

いやでも寄りそわなければならない狭い傘の中、健作はわざと気軽に笑った。

「そんな、私――」

お縫はそっと寄りそって、なんとなく身をかたくした。同じ屋根の下に暮らすようになって一年近く、こんな真似をするのは始めてである。そして、これが終りかも知れない。ほのかに甘い体温を感じながら、皮肉な運命だと健作は思う。

「ちょうどよかった。おふくろ様に心配させたくないから、道みち話しておこう」

西側は溝をへだてて上野の下寺につづき、山内には二千余の彰義隊が立籠り、近くどうしても一戦はまぬかれまいという噂があって、このあたり、ことに夜にかけて人通りが絶える。佗しい黄昏の雨が傘をうつだけで、若い二人の相合傘に半畳を入れる物好きもないから、話しておくにはちょうどいい機会であった。

「そういえば、おふくろ様、昨夜のこと何かいってなかったろうか」

「いいえ」

「じゃ、ほんとうに眠っておられたのかな」

「あのこと、まだ怒っておいでになりますの」

お縫は不安そうな顔をあげた。

「いや――」

怒っているのではない。じつはおのれの心に惧れるのだ。

健作がお縫母子と一つ屋根の下に住むようになったのは、ほんの偶然にしかすぎない。それは去年の春、下谷山崎町仙竜寺裏の今の長屋へ移って、四五日であった。

父の代から浪人していた健作は、その父を見送ると間もなく青雲の志を抱いて江戸へ出てきた。が立身などというものはそううまくどこにでも転がっている筈はなく、まして大政奉還の動乱最中の江戸である。仕官どころか、うっかりするとその日の食を得る道にさえ窮しそうだ。

やっと不経済な旅籠住いから長屋へ移ることを教えられて、さて移っては見たものの西も東も他人ばかりの江戸では、なにをしようにも皆目見当がつかぬ。

「旦那、そうして毎日家でごろごろしているところを見ると、かたき討ちでもなさそうだね」

隣家の大工留五郎に冷かされたのが縁で、――江戸には左官の下職で土捏ねという仕事が

あると聞かされた。土を捏ねて、本当の色が出るまでには三年かかるそうだが、そんなのは上普請の場合で、たいていのは体力さえあれば素人にでもできる。だから、大名屋敷の俗に三一（三両一人扶持）といわれる軽輩などが内職にやる。親方のところへ大小をあずけて、頬被りして行けばいいんだ。やって見る気なら世話をしようかといってくれた。

　とにかく背に腹はかえられぬ。なにも修業だし、青雲の志を得るまでの階段だと思えばいい、そう肚をきめて健作が黒門の左官屋甚蔵の家へ、目見得に連れて行って貰った日の帰途、上野山下で、

「ちょっと道をおたずねいたしとうございますが」

　いとも鄭重に呼び止めたのが、お縫母娘であった。

　武家の母娘とは、帯の間へ挾んだ仰々しい懐剣の袋ですぐわかったが、田舎者の健作でさえ、田舎者だなと思ったほどだから、母娘とも大きな風呂敷包を抱えて木綿物の見るからに、古風の旅袋であった。今から思えばこっちが田舎臭かったから、声がかけよかったのかも知れない。

秀才

「下谷山崎町仙竜寺裏へはどうまいったらよろしいのでございましょう、上野御山内下だと聞いてきましたのでございますが」

　勝ち気らしい四十年輩の母であった。その母の背に隠れるように身なり髪型こそ田舎者めくが、色白な見るからにういういしい娘が、目をあげ得ず、頬を染めているのである。

「拙者も江戸にはつい昨今で、ほかのところを聞かれたのではわかりませんが、仙竜寺裏だけは心得ています。これからその方面へ帰る者ですから、よろしければ御同道いたしましょう」

　その正直なのが、いく分相手を安心させたらしい。

「どうぞお願いいたします——つかぬことをお尋ねいたしますが、その仙竜寺裏に甲州の浪人で松下俊太郎と申す、ちょうどあなたさまと同じ年ごろの者が住居いたしておりますのを、御存じありますまいか」

「さあ、拙者は四五日前そこへ移った者でよくわかりませんが、隣家の大工留五郎という者なら知っているでしょう。長屋の古顔だといっていますから」

　途中再三風呂敷包を持ってさしあげようかと申し出たが、これはていよくことわられた。

　むろん昼間のことで、大留は稼ぎに出て留守だったが、女房の口から意外なことがわかった。松下俊太郎という浪人は、一年ばかり、今自分の住んでいる家を借りていた男で、一と月ほど前上方へ行くとかで、持物などすっかり道具屋へ売払って行った。その跡へ健作が越してきたのだという。

「上方はどこともおわかりにならないのでございましょうか」

「さあ、なにしろ誰ともあんまり口をきいたことがないもんですからね。身分が違うもんだ

から」

女房の口ぶりでは、好感は持たれていなかったらしい。

無口な娘は、ここでも母の背に隠れたきりで、一言も口はきかなかったが、その母娘の当惑したような顔は、事情は知らず、黙って見ているのに忍びぬものがあった。

「留五郎うじは知らんかな、おかみさん」

「多分知らないと思うんですけどね、うちはああいう素っ頓狂だから、どうかしらん」

では、とにかく帰りを待って見ては、——御迷惑でもそうさせて頂きましょうかと、ほんの仮りに草鞋を脱いで休むつもりだったのが、そのままになってしまうとは母娘にしても思いも及ばぬことだったろう。

夕方帰ってきた大留は、口数こそ多かったが、肝心なことはやっぱり何も知らなかった。

「あれで松下さんは、そりゃつきあいが広かったようでしたぜ。なんでも国事とかってことに奔走しているとかで、男っぷりは悪くねえし、身なりもきちんとしている。よく遊びもしていたようだ、滅多に家にゃ寝なかったようだからね」

そして、上方へいい口ができたから行くと、凄い元気のようだったというのである。その上方は京か大阪かいい口というのはなにか、むろん知らないのである。

昼間から気分が悪いといって、部屋の隅に横になっていたりした母親が、その話半ばに、真っ蒼な顔をしてふらふらと倒れかかった。失望に加えて旅の疲れが一度に出たのだろう。

いや、それが単なる失望ではなく、絶望と忿怒とであったことが、あとでわかった。慎しみ

深い母親が、といっても、母親がそれを打ち明けたのは病気が意外に重く、とても一と月や二た月では起きられまいと知られた時である。

松下俊太郎というのは、お縫の父山田民之進が、少年のころから引取って育てた遠縁の者であった。甲府在へ浪宅を構え、半農に帰して寺子の指南をしていた山田家は、決して貧しい暮しではなく、村の者から先生と尊敬されて、むしろ平和な楽しい生活だったのである。民之進も妻も、行く行くは一人娘のお縫に俊太郎をめあわせ、わずかではあるが家や田地を譲るつもりで、俊太郎を甲府の町へ通わせ、武士ひと通りの学問武芸は修業させた。

どっちかといえば、才気走っている俊太郎は、その学問にも武芸にも秀才といわれ、民之進は心ひそかに、或いは自分が夢見てついに果たせなかった仕官の道を得て、山田の家名を再興してくれるのではあるまいかと、そんな喜びを妻にもらしたこともあるそうである。

その民之進が急死したのは四年前、俊太郎が二十二歳お縫が十六の夏であった。母親は亡夫の百カ日がすみ次第、当然二人を一緒にして跡目をつがせるつもりであったが、その秋になって俊太郎が意外な大望を持ち出した。

「時勢は倒幕か佐幕か、京と江戸とに分れて激しく動揺しています。浪人が出世の機会を摑むのは、今をおいてありません。江戸へ出て存分に活躍して見たいと思いますから、せめて結婚は二十五歳になるまで待って下さい。江戸へ出て一生終りたくないのです」

若い者としては無理のない望みではあり、亡夫が深く信頼していた才能である。母親は娘のためにも、その才能を十分伸ばさせて見たい、出世はお互いのためだからと思った。それ

になんといっても金がものをいうのであろうと俊太郎を信じて疑わなかった。母親は、その時、わずかではあるが田地をすっかり金に替え、大半を出世の門出に持たせて送り出したのだという。

が、江戸へ出た俊太郎からは、次第に音信が絶え勝ちになり、去年の秋ごろからは、こっちの手紙にも満足な返事さえよこさない。それでも、さぞ多忙な日を送っているのだろうからと、自分を慰めていたが、この正月は娘も十九、俊太郎が二十五歳までといい出した約束の年である。江戸へ出て足かけ三年丸二年近く、もう先の見越しぐらいついているはずだし、そういつまでも娘を待たせておけない、――せめて仮祝言なりとしておいて貰いたいが、そっちの都合はどうかと問い合わせた手紙にまでついに返事がなかった。

いさかい

「娘がいやならいやでもいいのです。娘にとって、大切な一生の問題に、返事さえしないということがあるでしょうか。これだけはどうしても当人に逢って、はっきりさせておかなければと、娘をつれて出てきたのですが、――もう諦めました。あれだけは私どもの目がね違いだったのです。江戸へ出たら、急に田舎娘などいやになったのでしょう。体が快くなりしだい、娘をつれて故郷へ帰るつもりだから、迷惑でももうしばらく厄介をかけさせてください」

と、頼むのである。勝ち気らしく愚痴めいたことは一言も口にしない。が、亡夫の形見の田地田畑を手放してまで、信頼をかけていた俊太郎に、実際に裏切られたのだとすればそれは口ではいいつくせない大きな打撃だろう。

「そう諦めてしまうのは、早くはありませんかな。どんな事情で明日にも国許のほうから便りがまわされてこないとも限りません。まあ、気長く養生することです、――御承知のとおり、拙者はただ家を借りているというだけで、世帯道具一つ持たぬ呑気者ですから、その点は気兼ねなどせんで下さい」

事実、母娘がきてからひと通りの必需品を揃えてくれたので飯は娘が拵らえてくれる。従って働いて得た金は娘に預けておくから、それで足りるのか足りないのか、よく知らないし、部屋も四畳半のほうを母親に提供し、仕事から帰ってきて夜寝るだけ健作は、表の二畳で事が足りるのだ。形から見ても、実際からいっても、どっちが置いて貰っているのかわからないのである。

家事一切を一人で切り盛りしてくれるお縫は、母にきびしく躾けられてきたと見えて、高笑い一つしない慎しみ深い娘だった。

「毎日どこへお出かけになりますの」

こんな親しい口をきくようになったのは、ずっとあとになってからである。

「土捏ねというものに行きます」

どうもわからぬらしい顔をしているので、委しく説明してやると、

「江戸は広いんでございますね」

と、しきりに感心していた。

口数のすくないお縫は、病母に仕えてじつによく働く。がさつな裏長屋の生活には見られない行儀作法をそのまま崩さず、しかも、素直に近所の習慣にも従って行く。

「感心だね、影山さんはとんだ拾い物をしたよ」

拾い物のほうは余計だが、さすが口の煩いおかみさんたちも、悪口のいいようがなかったらしい。

（この娘のどこが気に入らんのかな）

健作はよく思った。松下という男の気持がわからないのである。むろん、娘が気に入らなくて恩義に背いたのか、国事に奔走しているというような話だから、今のところそんな一身上のことは振り返っていられないという肚なのか、他人が軽々に断ずべき問題ではないが、少なくともこの娘に冷淡であるということだけはたしかだ。

また思うのである。自分は青雲の志を容易に摑み得ず、いまだに土捏ねに甘んじているが、彼は同じ江戸のしかも同じ長屋に住んで、大留うじの言を信ずるならば、たちまち交遊をひろめて大いに活躍し、動乱の波に乗り志を得て上方へ雄飛したらしい。凡才と秀才とはおのずから見るところが違うのかも知れないと――。

こうして、奇しくも他人同士が一つ屋根の下に生活しながら、空しい一年の歳月が夢の間に過ぎた。空しいとは、秋にでもなったらと、それを唯一の希望にしていた母親の病気が少

しも快方に向わず、むしろこのごろでは死病ではないかとさえ思えるに到ったからである。

その空しいという言葉は、また健作にもいえる。この一年、時勢は大政奉還という驚天動地の大転換をきっかけに王政復古の大号令発布、鳥羽伏見の戦争、慶喜追討軍の東征、江戸城明渡しと、急転直下生きた歴史が鳴動してきたにもかかわらず、凡才健作は凡才らしくいまだに土捏ねから足が洗えないのである。

ひとりこの家で空しくなかったといえるのは、お縫が知らぬ間に江戸になれて、少しも貧に染まず、めっきり美しさを増したことぐらいのものだろうか。

そのお縫と、健作は昨夜はじめていさかいをしてしまったのだ。

世間では健作がとんだ拾い物をしたようにいって、このごろではべつに話題にさえしなくなったが、行儀正しい二人は、病の床に着いていても行儀正しい母親を前にして、冗談口一つきき合ったことはないのである。そのお縫が昨夜、母の眠っているのを見澄まして、

「あの御相談があるのですけど」

もう寝ようとしていた健作の蚊帳の外へ、そっと両手をつかえたのだ。

「なんです」

「母に聞かれては困りますの」

困るといっても襖一重である。幸い雨の音が強かったので、顔を突き合わせるようにして話す、それより仕方がなかった。それも蚊帳の内と外とである。

「私、奉公に出たいと思いますが、いけないでしょうか」

「なぜ――」

「一度母を良い医者にかけて見たいと思うのです」

お縫はしらじらとしてうなだれた。

呑気な健作でも、その一言でたいていは想像がつく、長い病気で貯えがつきたのだ。お縫が賃仕事に夜を更かし、いつの間にか質屋をおぼえたのも知っている。それが、このごろめっきりと衰えてきた病人の様子に、母一人娘一人、お縫がそう思うのも無理はないと思う。

もう一つ考えさせられることがあった。左官土捏ねは出職の中に入る。雨の日はたいてい仕事にならない。健作の稼ぎで家賃を払って、一家三人が食って行くのがやっとだ。それに今年になってことに四月から閏四月、よく雨がつづいて、出職の者は十日と稼ぎになる日がなく、――事実上健作は母親の貯えを食いこんでいたかも知れないと思う慚愧である。

「しかし、奉公と一口にいったって、そう金にはならんと思うが、第一、誰がおふくろ様の看病をする。夜はまあ、わしがいるからいいとして」

「あの一緒に引取ってもいいという人が」

さすがに顔をあげ得ない。

「いかん、――そりゃいかん」

健作ははっとして、頭から押えつけてしまった。自分にそんな権利のないことを思い出したのはあとのことで、その時はただ腹が立った。美しいがゆえに貧につけこんで娘を食い物にしようとする者がある。貧なるゆえに、それに甘んじようとする。どっちも腹が立ったのだ。

「でも、私の力では、それよりほかに――」

「いかん、あんた、そんなことをして明日にも許嫁の人が帰ってきたらどうするんだ」

「まあ――」

お縫は意外そうに目を見はった。濡れぬれとした黒髪を無雑作に櫛巻にして、洗い晒した浴衣地ながら、かつて着崩していたのを見かけたことのない襟をなぞえに、二十歳といえば身も心も、女になり切って、豊かな胸乳のあたり深沈たる感情に呼吸づきながら、

「私、いやです。あんな冷たい自分勝手な人、――あんまりでございます」

きっと目に強い憎悪の色が燃える。こんな意地強いお縫の姿を見るのも初めてであった。

「いやだって、約束なら、貞操は守っているべきだ。こん度めぐり逢った時、そんなことを楯に取られたら、一言も口がきけないではないか」

健作も意地であった。

「口なんかききません。私」

「いかんといったら、いかん。金はわしが作る」

「だって、なんの御縁もない、あなたに、そんな」

「なにッ」

すぐ目の前にある美しい顔を睨みつけながら、思わず声が高くなりそうになった。気がついて自制はしたが、鬱憤はおさまらぬ。

「一つ家に一年、同じ釜の飯を食っていながら、縁がないとはなんだ。貧乏がいやなら、あんた勝手に人の妾にでもなんにでもなれ、おふくろ様はわしが立派にお世話する。わしは金のために操を棄てるような腐った女は嫌いだ」
「あんまりです」
「金はきっと、明日作ってくる」
いい切って、健作はくるりと背を向けてしまった。
袂の中で、すすりあげている声が、しばらく聞えていたが、強情に見向いてもやらなかった。
金策の当ては全然ないではない。だから我知らず強くも出たのではあるが――、なぜそんなに腹が立ったのであろう、いささか興奮が冷めて、ふっとそこへ思いたった時健作は愕然たらざるを得なかった。

母のこころ

なによりも母娘を失うことが堪えられなかったのである。孤独の身に得た母娘、一年一緒に住んでいる間に、母は母として、娘は娘として、健作の心をゆたかに充たしていてくれた。
そういう心が、お縫に対しては、ことさらそれをはっきり考えたことはなかったが、いつの間にか深い恋になっていたことを、去るといわれた刹那、痛切に感じて爆発したのである。

いって見れば男の嫉妬なのであった。
（いかん、どんな事情があるにせよ許婚のある娘）
健作は深く自制した。
そして、当てのある金策というのは、――近く一戦を見越して彰義隊がしきりに浪人を集めている。日当は一両で支度金が出るという話であった。同じ土捏ね浪人であった男がすでに参加して、その男から誘われたのだから間違いはない。彰義隊が時勢の大局から見て、どんな立場にあるかそんなことはどっちでもいい、健作はただ金がほしかった。恋人のためにおのれの命を金にかえる。いや、世にも不幸な母娘のために、よろこんで危険に身をさらす、それは同時に、このまま一つ屋根の下にあっては心苦しい自分の身を始末するという上からも、適当な方法だと思ったのである。
健作はいま、その身を売ってきた帰りなのであった。が、これは自分の恋と同じく、決して母娘に知られてはならない秘密である。
「お縫さん、金は都合してきたよ」
健作はできるだけ明るくいった。
「ごめんなさい。私、後悔していますの」
「後悔している――」
「ええ、たとえ死んでも母が許してくれることではなし、あんなことといわないでおけばようございましたわ」

「しかし、一度いい医者に診せたい。そう考えるのは子として無理はない」
「でも、私に一人で出て行けって、――あんまりだと思いました」
「なんだ、あんたまだ怒ってるじゃないか」
「いいえ怒ってなど、――もったいないと思っていますわ。親身になって叱っていただいて」
珍しく口数の多いのは、喧嘩のあとのせいか、二人きりの相合傘が話しいいせいか。
「私、もうどんなに貧乏しても、お金のために腐った女にはなりません。一生懸命働いて、できるだけの看病をする。それが一番孝行の道だと思いました」
「それが本当だな。あのおふくろ様の気性では、きっとそのほうをよろこばれるんではないかい」
「母は、母は自分のことより、私のことばかり心配して」
急いで涙を拭くのである。
「故郷へ帰りたいだろうねえ」
「いいえ、故郷へは帰りたがりませんの、人になにかいわれるのが、いやなのですわ」
そうか、故郷を失い、希望を失い、娘の身を案じて死んで行かなければならない不幸な母――健作は暗然たらざるを得ない。
「お話があるって、なんでございますの」
「ああ、わしは明日から一二カ月稼ぎに行ってきます。その賃金を前借に及んできたんだ。そんなこと、おふくろ様の耳に入れたくない。話が出たら、ただ仕事が忙しいとだけいって

おいて下さい、――そう多額ではないが、約束の金、渡しておこう」
特に頼んで借りてきた五両金である。紙にくるんだままわたすと、うっかり受取って、
「出稼ぎって遠いところですか」
「いや、神奈川のほうの大きな寺だそうだ」
「でも――」
ふしぎそうに紙包を持ったまま、顔を見ている。土捏ねなどの賃金はたいてい知れたものなのだ。
「なに、いざとなればわしにだって知人はあるさ。心配しないで、孝行の足しに費って下さい――あぶないッ」
「――」
躓いてよろめく体を、思わず男の袖に捉まって支えて、そのままその袖を放そうとはせず、
「どうしても、そんな遠いところへ行かなくちゃいけませんの」
顔にも体にも一ぱいの情熱がみなぎるかに見える風情で――ざんざ降りの往来は暗くとっぷりと暮れかけていた。そこがもう仙竜寺裏への路地の曲り角である。
大留の女房がつけて行ったらしい、家には行燈に明るく灯が入っていた。
「おふくろ様、具合はどうです」
外出から帰れば、必ず一度枕もとへ坐るのが、いつからか健作の習慣になっている。そうされて嬉しそうな老母の顔を見るのが、人の子としてのおのれの楽しみでもあったからであ

る。

「ああお帰り、ひどい降りになって、お困りでしたろう」

蚊帳の中から、老母の目がいたわってくれる。もう顔に水腫（むくみ）がきてめっきり弱って見える。腎臓（じんぞう）とかで、難病ながら肉体的に苦痛を伴わないのが、当人にも傍（はた）の者にもまだしも楽であった。

「母さま、遅くなりました」

台所へまわり、足を拭いてきたお縫が両手をつかえる。

「お縫、ちょっと蚊帳（かや）を外して、起しておくれ」

それが寝たきりのこのごろの病人にとって、せめてもの気晴しなのである。

「すぐお薬の支度をしますから」

「いいえ、私はあとでいい、早く膳（ぜん）をさし上げなさい」

「はい、すぐでございますから」

お縫は急いで台所へ引き返して行く。

「夕方用足しになど出るものですから」

申訳なさそうな母の口ぶりである。

「いや、途中で一緒になりました。今夜は少しむすようですな」

ひどい蚊である。団扇（うちわ）を取ってそれとなく払うように風を送っていると、

「影山さん、こんな恰好で失礼ですけれど」

老母は改まって淋しい目をあげた。

「なんです。背中でも擦（さす）りましょうか」

「その御親切がうれしうございました。つい甘えて、こうして一年の余も御迷惑をかけてしまいましたが」

「なんの、お世話になったのはわしのほうですよ。風来坊が蛆（うじ）もわかさずに過させて貰ったんですからな」

「縁というものは不思議なものです」

しみじみと溜息をつくのだ。病には勝てぬ気の弱り、それもあるだろうが裏切られた無念さ、情なさ、こうして陋巷（ろうこう）の他人の中で朽（く）ちて行かねばならぬ不運が、胸に迫るのだろう。

「お縫が使いに出てから、私はしみじみと一人で考えさせられました。仙竜寺様の夕方のおつとめを聞きながら」

そのお縫は、台所でなにか刻みながら、やっぱり耳を澄ましているのであろう。

「私の病気は癒（なお）りません。いいえ、自分でわかります。私はもう愚痴（ぐち）をいわないことにしました。なにごとも天命、そう思えば楽に死んで行けます。世の中には錦（にしき）の蒲団をきせられていても悟れなければ、不幸に死んで行く者がある。貧しくとも、悟れば極楽往生（おうじょう）ができる。愚痴を忘れることだと思いました」

「――」

軽い庖丁の音が止んで、ふっとすすりあげているのが聞えた。

「ただ気にかかるのはあれのことです」
母親はその台所のほうへ目をやって、ちらっと悲痛にも似た顔をした。
「影山さん、御親切に甘えてお願いいたします。私が死ねばあれはどこにも頼る者のない不幸な娘、あなたに貰ってくれと無理は申しません。どうか力にだけはなってやって下さいまし。お人柄を見込んで、なにごともお任かせいたしますから、御迷惑でしょうが、どうぞお願いいたします」
信頼と哀願をこめて、娘を憐れむ親心、両手をさえつかえようとするのだ。
「あ、手をあげて下さい、その御念には及びません。御承知のとおりの風来坊で、あまり役には立たんでしょうが決して他人とは思っていないのですから、――急にまたそんな心細いことを、日ごろのおふくろ様にも似合わないではありませんか」
「いいえ、お願いするだけはしておきませんと、――苦労性になったのですね」
「横になったほうがお楽ではありませんか、手を貸しましょう」
痩せ衰えた体をそっと寝かしてやったが、――やっぱりそれが遺言だったとあとにして思い合わされた。

官軍斬り

翌朝は珍しく朝日が出た。
「眠っていられるようだから挨拶をしないで行くが、――医者とよく相談して、なるべく側を離れてはいかんな。使いは近所の者にでも頼めばいいのだから」
「いつごろお帰りになりますの」
「月半には一度様子を見にきましょう」
縋るようなまなざしを振り切って、健作は家を出た。一戦ともなれば、これが最後の別れになるかも知れないが、それでいいんだと思った。母親さえ許しているのだから、この上一つ屋根の下にいては必ず間違いを起す、松下というほうの話がはっきりしない以上これは良心が許さない。
健作は、こん度の世話人である十番隊の黒沢勝輔に連れられて、上野東台寒松院の彰義隊本営へ出頭、姓名を届け出で一先ず十番隊の客員に加えられることになった。
十番隊は谷中の善性寺に屯している。山下の料亭で昼食をすませ、ぶらぶら話しながら池の端から根津のほうへ出ようとすると、わあッという異様な絶叫である。
雨のあとのぎらぎらと輝く真昼の往来が、がらんと人影もなく、その真ん中で五人と三人が両方に分れて刀を抜合わせているのだ。三人のほうが彰義隊で相手は官軍である。
「助けろ」
酒気の入っていた黒沢は、いきなり下駄を脱いで駈け出した。
「加勢するぞ」
叫んで、ちょうど官兵の背後から飛びこむ形になったから、それまで双方睨み合ったまま

息詰まるように動けないでいたのが、はっと官軍のほうから動揺して、勢いを得た隊士が一斉（せい）に斬って出る。刃（やいば）の触（ふ）れる寒むざむとした音と、人の声とも思えぬ叫喚が一瞬入り乱れて、朽木（くちき）が倒れるように一人どっと前へのめって行った。官軍のほうである。そして一度乱れ立ったほうは、もう立ち直るべくもなく、官軍四人は三方へさっと身を翻（ひるがえ）して逃げ出した。

「わあッ」

彰義隊が勝ち誇（ほこ）って追撃する。が、やっぱり興奮しているのだ。黒沢をまじえて四人が四人、一団になって、団子坂のほうへ逃げる二人を追って走っている。

官軍の一人は素早く路地へ飛びこみ、残る一人が、これは隊長格らしい蒼白な顔はしているが、白刃を提（さ）げて走るまでもなく、大股に歩いてきた。そこの土塀の前に立って、健作は一伍一什（いちぶしじゅう）を眺めていたのである。隊士に加わった以上、一戦は辞（じ）すものではないが、官軍だから憎い、薩長だから斬らねばならぬ、そんな私怨は感じられぬ健作なのだ。が、相手はそこに立っている健作を見かけるとぎくりとしながら、

「貴公、彰義隊か――」

そのぎくりとしたのを取返しでもするように、横柄（おうへい）なきき方をした。

「さよう――」

こうなっては、そう答えざるを得ない、はっと相手は飛び退って、

「こいッ」

とっさに一刀を取り直すのを冷静な健作は柄（つか）に手をかけたまままじっと見つめた。敵の出端（でばな）

を抜討ちに斬って勝敗を一瞬に決する。いって見れば、激しい捨身（すてみ）の構えなのだ。

勝手が違うか、容易に斬って出られない。すでに前の闘いで多少疲れているところへ炎天に立っているのだ。額に脂汗（あぶらあせ）がういて、押えようとする呼吸が、ともすれば肩へ波打ってきている。勝負はもう時間の問題であった。

「おひきなさい、拙者は私怨は持ちません」

健作はすっと一歩退った。

「ここは上野に近い、貴公不利でしょう」

いつまた別の隊士が駈けつけてくるかも知れないのである。

「――」

相手はちょっと疑うように顔を見ていたが、こっちに全く敵意がないと見ると、ほっとしたようだった。そしてことさら負けたのではないということを示すよう、鍔音（つばおと）高く刀をおさめ、悠々と歩き去るのである。

（負け惜しみの強い男だ）

健作はおかしかった。

あとで聞くと、団子坂のほうへ逃げた二人はとうとうずたずたにされたそうで、喧嘩の原因はこっちを三人と侮（あなど）って、すれ違いながら官軍のほうが馬鹿といったのだそうである。

――健作が逃してやった男のことは、誰にもいわなかった。

彰義隊へ入ったのは四月の末で、山崎町とはつい目と鼻の間にいたのだが、健作は一度も

お縫母娘は訪ねなかった。なんといっても官軍を敵としているのである。迷惑がかかってはならないと思ったのだ。しかし、隊へ入ってから日当とも酒肴料ともつかず、金廻りは悪くなかったので、約束の月半にはせめて金だけは届けてやりたいと考えていた。

その月半の十五日が上野の戦争だったのである。

まごころ

夜来から雨つづきの風さえある日だった。官軍は十分に鉄砲を揃え一万余の兵で包囲したに対し、山内の彰義隊は会津へ出張中の者や、大砲の第一発に驚いて逃げた者などがあり、実際に戦ったのは千たらず、勝敗は全く問題にはならなかった。それでも、一日だけ持ちこたえて、夜になれば江戸市中にある遊軍が一度に官軍の背後を攪乱するであろうから、面白い戦ができるなどという噂もあったが、その日が持ちこたえられなかったのである。

午後になって、黒門口が破れると、三十六坊たちまち火の海となって、意気だけはあっても、銃卒に欠ける寄合い世帯が少しも命令が行き渡らず、あっちが危ない、こっちのほうが急だと、夢中に引きまわされているうちに総退却となってしまった。

(脆いものだなあ)

敗走する人波に揉まれて、雨中泥濘の道を三河島村まで押し流されていた健作は、しみじみと考えさせられた。鉄砲に対して、刀はなんの役にも立たない、もう刀を差して威張って

いた武士の世界は滅びたのだと思った。

いずれにしても、一朝にして敗軍の兵、賊徒の名を負わなければならぬ身となっては、江戸に落着いてはいられぬ。

健作は農家へ飛び込んで百姓に変装した。今はもう大小などに未練はない。一本の天秤棒を一風呂敷の握飯に替え戦火に近い親戚の安否を見舞いに行くと称して、夜を幸い一度仙竜寺裏の母娘をたずねることにした。当分逢えぬとなると、どうしても金を渡しておく必要があったのである。

浅草から坂本へ抜けるまでには、各所に官軍の関所ができ、小隊が巡回しているのにも幾組となく出逢った。警戒が厳重らしい。坂本が近くなるにつれて、立退いた家が多いらしく、町並はひっそりと暗く無気味であった。

(ことによると、どこかへ立退いているかも知れんな)

母娘二人きりである、砲声を真近に聞いては、じっとしていられないのが本当ではあるまいか、山崎町の路地へ入ってからは一層その不安が大きかった。どの家もたいてい暗くひっそりとしているのである。

「いてくれた」

その中にたった一軒、ちらっと灯のもれている自分の家を見かけて、健作は思わず今朝からの疲労を一度に忘れる思いであった。

雨がびしょびしょ軒を打っていた。

「お縫さん」
表の戸を叩いて呼んで見ると、
「はい」
すぐに立ってきたようだが、
「どなたさまでございましょうか」
戸の向うでお縫の声がきくのである。
「わしだ、——健作だ」
「あら——」
弾むように答え、桟を外す音がもどかしそうに聞えた。
「まあ、そのお姿——」
「戦争があったと聞いたもんだから」
素早くあたりを見廻しながら、驚いているお縫を押しこむように土間へ飛びこんで後ろの戸を締める。
ぷーんと香の匂いが鼻をうったのだ。
「おや——」
はっと立ちながら、お縫の顔を見ると、
「私、——私」
わっと泣き出しながら胸へ倒れこんでくるのだ。

「濡れる、——濡れるよ」
が、蓑の中へ顔を埋めるようにして嗚咽して止まない。
「そうか、——そうだったのか、可哀そうに」
健作はその双の肩を抱いて、暗然としてしまった。
なにかの箱を祭壇にして、白い位牌を飾っているのが見える。心ばかりのお盛物と花が手向けてあった。死んで間もないのであろう。それがあるから近所中逃げたのにたった一人残った。死者の霊は四十九日軒を去らぬという。去るに忍びなかったのだろう。
「仕方がない、な、死んだものは仕方がない。諦めてくれ、——不幸なおふくろ様だったね」
留守に死んで行くとは、なんという皮肉だろう。せめて死水だけでも取ってやりたかった。いいたいこともあったろうに。
「いつ亡くなったのだ」
「今日が、今日が初七日ですわ」
「お苦しみなされたか」
「いいえ、——あなたに、あなたによくお礼申し上げてくれと、お帰りをずい分待って」
「すまなかった、——さあ、お焼香をさせて頂こう。ここにこうしていても仕方がない」
「はい——洗水を持ってきますわ」
その間に蓑笠を取って、草鞋を脱いだ。小桶に水を汲んで縫が、黙ってしゃがんで、足を

洗ってくれる。健作はなすに任かせてしろじろとした襟足を見下ろしていた。
「あんた一人で困ったろう」
「ええ」
「わしはまた、どこかへ立退いているのではないかと、それを心配してきたんだが」
「初七日だというのに、お坊さんもきて貰えません。私悲しくて弾が落ちるなら、死んでもいいと思っていました。今着替えを出しますわ」
「いや、大変な恰好だけれど、許して貰って」
健作が位牌の前に坐った時である。
「ここだな――」
外で数人の足音が止まって、たしかにそんな声がしたと思うと、引明けるようにがらっと雨戸があいた。
「どなた――あッ」
まだ土間で跡の始末をしていたお縫が、驚愕したような声をあげる。
(きたな)
どこからつけられたかどこかに不審があったか知らないが、官軍の彰義隊狩りに違いない。
健作は全身を耳にしながら、わざと背を向けたまま線香を取りあげていた。
「縫ではないか」
相手のいうのを聞いて、おやっと思った。

「どうしたんだ、こんなところへ」
「――」
「いつ出てきたんだ」
「ここは去年の春まで、あなたのお住みになっていた家でございます」
静かではあるが、底意地ある冷たいお縫の声であった。
「そのあとへ、私、母と一緒に尋ねてまいりまして、ずっと住んでいます」
松下俊太郎らしい。健作は冷静に向き直った。説明すべきことは、一応説明するのが義務だと考えたからであるが、毛頭をつけてそこに立っている官軍の士官、顔を見合わせるなり、目をみはってしまった。根津で逃してやった男なのだ。
「縫、あれは――」
横柄に顎をしゃくってきく。
「良人でございます」
お縫が言下に挑戦するように答えた。
「良人――」
その目にはっきりと軽侮の色が動いて、冷淡な顔を再び健作に向けた。
「貴公、彰義隊の者だな」
鞭のような言葉だ。この男は勝ち誇っている、――少なくとも、母娘の者に対しては、そう大した関心は持っていなかった。青雲の志を得ることにのみ忙しかったか、国事のために

は家も妻子も忘れる、そういう自負があって敢えて冷淡であったのか、その少しもおのれに愧じていない横柄な態度に、健作は激しい怒りを感じた。こんな男に言訳もいいのがれもしたくない。

「さよう、彰義隊に関係のあるものです」

「すぐ屯所まで同行して貰おう」

「承知いたした」

無雑作に立ち上ろうとすると蒼白になっていたお縫が、

「お願いいたします」

急に小腰を屈めた。

「願い、――助けてくれというのかね」

「いいえ、着替えをする間だけ待って頂けませんでしょうか」

「そのくらいはいいだろう。早くするんだな」

すべてを悟ったらしいお縫は静かに立ち上って、押入れから帷子、襦袢、帯一と通りそれへ揃えた。物腰は取り乱していないが、必死に歯を食縛っている。これも負けまいと努力しているらしい。

「あの、失礼させて頂いて」

「うむ」

健作がお縫に手伝われて、手早く着替えをすますと、お縫は改めてそこへ両手をつかえた。

「あなた、数ならぬ私たち母娘のために、この一年余りのお心づくし、死んでも忘れません。母も亡くなるまで心から喜んでいました」

「泣くなお縫さん」

「泣きません、どうぞお別れする前にたった一言、母もそれだけを心配して行ったのでございます。不束者ですけれど、妻と呼んで行って下さいませ。お願い、お願いいたします」

そこに憎い男がいるからではないらしい。切なる心が言葉にも目にも一ぱいに溢れて、必死に見上げてくるのだ。

「おいで、――おふくろ様に安心して頂こう」

「はい」

位牌の前に坐り直す健作の横へ、お縫はひしと身を寄せて、――恐らく名ばかりの妻となるであろう。

が、自分の身を以って払った犠牲に、身を以って報いようとするいじらしい娘心、健作はしみじみとした豊かな人生を感じてお縫の求めるものもそれであったのではないだろうかと思った。

「あら――」

明るい燈明が、風にはたはたとゆらいでいた。

「どうした」

急にお縫が袖を摑むのである。

「いません」
「いない――」
　振り返って見ると、そこに立っていたはずの松下の姿はなく、明け放されただけの戸口の闇が黒ぐろと暗い。
「帰って行くのですわ」
　路地のぬかるみを踏んで去るらしい数人の足音が、ぴしゃぴしゃと耳について、やがて雨の音に消されて行った。がらんと廃墟（はいきょ）のような沈黙がのしかかってくる。
「さすがに恥じたのかな」
「そうでしょうか」
　じっと見合わしているお縫の頬に、ほのぼのと血の気が通ってきたと見る間に、瞼（まぶた）一ぱいに涙が溢（あふ）れ落ちて、もう見栄も意地もなかったのだろう、くずれるように健作の膝へ泣き伏してきたのであった。

明日の風

拾った男

　低い梅雨空から小糠雨（こぬかあめ）が灰色に煙って、駒形河岸は時刻より早く夕暮れかけていた。長雨つづきで赤土色に濁（にご）った隅田川は、手をのばせばすくえそうに水かさを増し、川幅ひろく満々と盛りあがっている。
　おや、まだ立っていると、おしまはそこまできて急に足を止めた。ぼんやりと腕組みをしながら川を眺めている男、さっき風呂へ行きがけに見た時もそうしていた。洗いざらしの印（しるし）半纏（ばんてん）股引草鞋がけ、背中まで泥っぱねをあげているのは終日歩きまわっていた証拠で、誰が見ても決して景気のいい後ろ姿ではない。疲れきってしかも空きっ腹を抱えて、なにか思案にくれているという恰好だ。
「ちょいと、お前さん」

自分がさんざん苦労して、人知れず思案にあまった経験が数々あるだけに、おしまはつい声をかけてしまった。

男はびっくりしたように振り返って、まじまじと顔を見ている。鳴海しぼりの派手な浴衣に細幅の博多帯、紺蛇の目をかざした小指には緋覆輪の糠袋をかけて、伸びのびとした肢体に爽やかな湯ほてりの香をみなぎらせているおしまだった。伝法なのは育ちだからしようがない。

「びっくりしたかえ。いい若いものがしっかりおしよ。そんなとこにいつまでも薄ぼんやりしていると、ついふらふらと死神にさそいこまれるよ」

「ああそうか」

男は苦笑した。頭から雨に濡れてすすけた顔色はしているが、面立ちは意外にもがっしりと線が太く、ことにおっとりと澄んだ瞳にこんな半纏着には見られない品がある。はてなとおしまは思った。身投げとまでは行かなくても、それに近いのろま男とばかり思いこんでいた。その見当違いもあったが、それよりこの顔はたしかどこかで見おぼえがあるのである。

「ずい分長い間立っていたけど、隅田川って、そんなに面白い」

「うむ」

「案外風流っ気があるのね。どこへ行くの、お前さん」

「さあな。――まあいい、飛んだ世話をかけた。ありがとう」

男はあいまいに口を濁して、なにげなく逃げて行きそうにする。

「お待ちよ、お前さんお腹が空いてるんじゃない」

おしまは体ごと素早く道をふさぎながら、大胆に顔を見あげた。まだ思い出せないが、なにか忘れてはならない顔だったように心をひかれるものがある。

「いや、せっかくだが」

「満腹っていう顔でもないようね。いっしょにおいでな、すぐそこなんだから」

「ありがとう、ほんとにいいんだ」

「女に恥をかかせるものじゃない。急ぐ旅でもなさそうだし、ひとの親切は素直にうけるものよ」

「そうか。親切を無にしちゃすまないな」

「行く、いっしょに……」

「お供しよう。正直にいうと腹が空いていないこともないんだ」

「お入りな、これも親切のうちよ」

相合傘にいれて、雨の河岸通りは近くに物好きな人目もなくていい塩梅と思う間もなく、ついそこの駒形堂のかげから官軍の巡邏隊がもうこっちへ曲ってきた。上野の彰義隊が敗れてまだ三日目、市中には見当り次第賊徒斬捨御免の布令がまわり、それを匿まったものも同罪とかいう話で、官軍は残党狩りに殺気立っている。おしまはおとなしく人家の軒下の方へ道をよけて立った。一隊の目はみんなこっちを見て、冷かし半分にわらって行く。中にはぺろりと赤い舌を出して行く剽軽者さえあったが、さすがに巡邏中だからそれ以上悪ふざけ

に出る者はなかった。

「飛んだ岡焼きね」

くすりとわらいながら、うながすように男の顔を見て、――ああこの人、ことによると彰義隊の残党かも知れない、ふっとそう気がついた。別にそんな気ぶりがあったからというのではない。さっきからの印象がどうも腹からの半纏着らしくない、お侍の顔だ、この人は、と思ったからである。

「それにしても、どこで逢った顔だろう」

おしまは思い出せそうで、まだ思い出せない。

踏倒し客

妙なことになったものだと、中出源次郎は思った。女はこの「たつみ」という小料理屋の女あるじらしく、裏木戸から台所口へ案内されて、そこの井戸で足を洗えといいつけ、自分はさっさと家へ入ってしまった。足を洗っていると、飯炊き婆さんらしいのが台所下駄を持ってきてくれて、台所わきのなんに使う部屋か薄暗いがらんとした六畳へつれこまれた。それっきりなんの音沙汰もない。もっとも今時分から料理屋は客が立てこんでくるのだろう。

源次郎は空きっ腹を抱えて、むせるような割烹の匂いに時々生唾をのみこみながら、高窓の下の壁へぼんやり気だるい体をもたせかけていた。考えても見なかったこんな場所に、こ

んな風にしている自分が全く不思議である。しかし、これは決して夢ではないのだ、戦に敗れた者が常に負わされる儼然たるむごい現実なのだ。

彰義隊は一昨日わずか半日にして、脆くも敗れ去った。それと同時に源次郎は旗本という地位も家も財産も失って、今は命さえ狙われるあわれな野良犬に転落していた。親戚一門さえ、残党を匿まった者は同罪という官軍の布告に惧れをなして、一夜の宿も貸してくれようとはしない。

行く先々で敬遠主義をとられたあげく、源次郎は昨夜おそくなって止むなく顔見知りの吉原の引手茶屋へあがった。そこでも落着く間はなかった。銚子を一本あけるかあけないうちに、もう官軍のお改めにあい、その場は女中の気転で押入れへ飛び込んでどうにか助かったが、とても危なくて泊ってはいられない。暗いうちにそこを逃げ出し、今日は朝から大して当てもなく市中をうろつきまわってきた。どこへ行っても碌な話は耳に入らない。本郷で脱走が二人斬られたとか、一人一両の相場で官軍の人夫が脱走を見つけに歩いているとか、――現に午ごろ根津の飯屋へ入ろうとすると一足先へ、縄のれんをくぐって行く二人連れの人夫が、おれはもう二両になったと話しているのがふと耳に入った。こいつは危ないと思ったので、それとなく素通りしてしまったが、そうなると落着いて蕎麦一杯食う気にもなれない。

それから思えば、ここは極楽だ。誰にも見咎められる心配はなく、黙って辛抱していれば、とにかく今夜の飯だけは振舞ってもらえるのである。

「板前さん、大変だよ」
ふっと若い女中が廊下を駈けてきて、源次郎の部屋からななめに見える料理場の台へ飛びつくように金切り声をあげた。
「大袈裟にいうぜ、また味噌椀でもひっくりかえしたんだろう」
「そうじゃない、その味噌椀の中からみみずが出たんで、お客さんが怒鳴り出したんですとさ」
「冗談いうねえ、わかった、また踏倒しだろう」
「官軍の人夫頭だとかいう二人連れですって、さんざん飲んだり食ったりした後で、図々しいったらありゃしない」
おしまは念入りに化粧をすませて、ひいき筋の座敷へは挨拶に出ることにきめている。やっとその座敷着に着がえ終ったところへ、受持ちのお松が蒼くなって知らせにきた。いわゆる深川の二枚証文という荒い稼業でさんざん苛まれてきて、男を男くさくも思っていないから、べつにそんなものは怖くも恐ろしくもないが、なんとか始末だけはしてやらなければならない。
「岩さん、聞いたかえ」
おしまはお松をつれて料理場へ出てきた。
「へえ、官軍の人夫ですってね」
「どうせまた踏倒しさ。主人を出せ、板前を呼んでこいって威張っているんだって、稼業で

なけりゃ啖呵を切ってやるんだけど、ほかにお客さんもあるし、しようがない、いっしょに行っておくれな」
「相手が悪うござんすね」
「商売物をただ食いしようっていうやつだもの、いいはずはないやね」
「そりゃそうですがね、同じ悪でも官軍のは泥くさい上にあくどい。勘定だけでなくて、いくらかにしようって腹ですぜ。頭をたのんだほうがよくはありませんか」
「癪にさわるねえ」
おしまは苛々しながら、ふっと六畳に待たせてある男の顔を見た。忘れていたわけではない。身じまいがすんだから居間へ招いて、聞いてみたいことはあるし、ゆっくり御馳走しようと思っていたのである。
「お前さん、待たせてすまないわね」
「いや、おれはかまわない。それよりおれでよかったら、口をきいて見てもいいよ」
源次郎としては、官軍の人夫と聞いてやっぱり憎いのだ。ここの店の者になって行く分には、まさか化の皮もあらわれまい。ちょっとからかって見てやりたい血気がうごく。
「大丈夫かえ、お前さん」
「うまく行かないようだったら、その間に頭を呼んでくるがいい、つなぎに一つやって見るから、店の印半纏を貸してもらいたいな」
みんなの顔が変な男だといわぬばかりに、呆れてこっちを眺めていた。

かけあい

表二階のとっつきの小座敷だった。お松に教えられて襖をあけると、やたらに鳴らしていた手がぴたりと止む。――おや、こいつらだったかと源次郎は意外な気がした。さんざん飲んで食って荒した膳の前に大あぐらで、せいぜい凄みをきかしている二人は、たしかに今日根津の飯屋の前で見かけた人夫共である。

「なんだ、手前は」

四十がらみの馬面をしたほうが、半纏を見て奉公人と思ったのだろう、いきなり頭から噛みついてきた。

「親方、どうぞお静かに願います。板前を手伝っていましたんで、こんな身形で失礼ですが、ちょっと御挨拶に出ました」

「手前ここの亭主か」

「はい」

「そうか、亭主ならこれを見ろ、手前んとこじゃ味噌椀の実にこんなみみずを食わせるのか、おい」

膳の上の味噌椀の蓋をとって、問題のみみずをわざわざ箸でつまんで見せる。一寸五分ほどもあるやつで、どう間違ってもそんな長いものを板前が見のがすはずはない。

「仔細は女中共からよくうかがいました。その御挨拶は後ほど、かならず御得心の行くよう取計らいます。ところで親方さん方は、御酒のほうはもうよろしいんでございますか」

源次郎は至極落着いて、さりげなくきく。

「なにをぬかしやがる、ひとを鮒あつかいにしておきやがって、こん度は泥鰌にする気だな。酒で殺そうったってその手にゃ乗るもんか」

「それでは御飯にいたしましょう。これから他さまへ行ってまたというのもなんですから、一膳おあがりなすっては」

「いやだよ。毒でも入れられた日にゃ命が助からねえ」

「いいえ、手前がここでお相伴をしてお毒味はいたします。それでも気味がお悪うござんすかねえ」

案外度胸のない人たちだといいたげな顔をして見せると、果たして連れの狸面のほうの男が乗ってきた。

「兄貴、食ってやろうじゃねえか。据膳食わぬは男の恥っていうぜ」

「そうか、据膳か。そんなら食ってやる、おれも男だ」

しかし断わっておくが、そんなことでみみずのほうは帳消しにならねえぞと、馬面はなかなか抜け目がない。

「おかみさんにそういってな、御飯を三人前、早くおしよ。それからもう灯を持ってきてもいい時分だね」

隅のほうに小さくなっていたお松が、妙な顔をしながらさがって行った。

間もなく新しい膳が運ばれ、座敷へは明るく灯が入った。するとなんと思ったか、女中にかわって給仕についたのはおしまである。人夫たちは急に肩をそびやかして、改めて強がり出したが、おしまはつんととり澄まして歯牙にもかけない。その意地強い中にもどこか身にしみついている妖しい艶めかしさは覆いきれず、欲気と色気はまた別物なのだろう、人夫たちは時々せっかくの虚勢も忘れてうっかり目を奪われている様子だった。お蔭で源次郎はゆっくりと三椀を喫し終る。空きっ腹にあまりがつがつと詰めこむのは後の活動にさわる。

「さあ、おかみさん勘定書を持ってきて貰おうか。みみずの御挨拶は御挨拶、勘定は勘定だからね」

源次郎はあっさり切り出した。

「そんなものいりません」

どうせ払いもしないのに、無駄だといわぬばかりである。

「いや、そうではない。御挨拶の中から勘定を差っ引いてなど考えるのは汚ない根性だ。第一、それじゃ親方さん方が金がなくてこんな弱い者いじめをしているようにとられる。かえって失礼というものだ。どこまでも御勘定は御勘定、御挨拶は御挨拶、そのほうが男らしくて誰が聞いてもきれいだ。ね親方さん、どんなものでございましょう」

「そりゃそのとおりだ。べらんめえ、金がねえから因縁をつけて歩く、おれたちはそんな三下奴とは違うんだ」

悪には悪だけの見得があるから面白い。馬面は腹掛の丼から小粒を一つ摑み出して、

「四の五のいうのも面倒くせえ、そら一分、つりがあったら女共にくれてやるかわりに、足りねえ分はそっちの損とあきらめろ、どうだこれで」

ぽんと膳の上へ投げ出した。

「恐れ入りました。こうなりゃあっしも男だ、一つ河岸をかえて立派に御挨拶をさせて貰います。さあ、お供いたしましょう」

すかさず源次郎が立ち上る。そうかと、つい釣りこまれて腰をうかせたが、念を押すことだけは忘れない。

「亭主、挨拶の仕方が気にいらねえと、ただじゃ帰さねえぞ」

「手前もたつみの源助、その御念には及びません」

とうとう二人を外へ連れ出してしまった。

河岸っぷち

おしまは男たちが表口から出て行くのを見とどけて、いそいで台所口から、はだしのままそっと脱け出した。

路地口まで出ると、ちょうど男たちは店の前の横丁を駒形河岸のほうへ並んで行くところである。塀に身を寄せるようにして、少しやり過し、片側の軒下、物かげを用心深くひろっ

て後を追う。

「おい、どこへ連れて行こうっていうんだ」

河岸っぷちへ出たところで、ひょいとしゃがみながら下駄の緒をなおしはじめた男に、一人が立ち止まってきいた。

「うむ、もうこの辺でいいだろう」

男は手についた泥を払いながら、立ち上って答える。

「なにッ」

二人はやっとなにか気がついたらしく、急に殺気立って身構えた。おしまは角の天水桶のかげへぴたりと身をひそめて息をのむ。

「別に驚かなくてもいいんだ。約束の御挨拶、裸のままで失礼さんだが、それ、うけとってくれ」

腹掛へ突っ込んだ手を気軽に二人の方へ出して、他意なさそうにいう。それでも黙って受けとって、急に馬面がわめき出した。

「たった一分、ふざけるねぇ。これが手前の挨拶というのか」

「まあそう大きな声を出しなさんな。たった一分でも黙って貰って帰りゃ、食った料理だけはただになる。こっちはそれだけ損をするんだが、せっかく仕組んだお茶番のみみず代だと思って、こんどだけは買ってやるのさ」

「なんだと、この野郎。黙って聞いていりゃいい気になって――」

「おっと、待て。そんな大声を立てると人がたかるぞ。自分たちの商売を考えて見ろ。人の首を売って罪な金を握りやがって、手前たちのその手にはたくさんの人の恨みの生血がこびりついているんだ。戸はしめていてもまだ宵の口、御近所はみんな起きていなさる。江戸っ子は彰義隊びいきだぜ。それが承知ならいくらでも喚け、怒鳴って見ろ」

相手はさすがにぐっと言葉に詰まって、思わず刀に手はかけたが、それさえ思い切って抜く力も失せたらしい。

「畜生、一杯食わしゃがったな、覚えてろ」

せめてもの捨てぜりふ、どっちからともなく急に駒形堂のほうへ駈け出した。

男はしばらくそれを見送るようにじっと突っ立っていたが、やがてくるりと川の方を向いて、右手を大きくふりあげ、ぐっと上体をそらせて反動をつけ、力一杯なにかを河心のほうへ投げつけた。つづけてまた一つ、――間をおいて、かすかに石の水に落ちるような音がどぼん、どぼんと二つ、遠く川面へかえってきた。

(あっ、石――)

おしまはそれと気がついて、体中が嚇と燃えあがった。さっき下駄の緒を直すふりをして拾った武器だろうが、もう疑う余地はない。あの時もやっぱり石だった。

十年前、初秋の澄んだ星空を松の枝越しに、おしまはこの世のものとも思われず茫然と見上げていた。手も足もがんじがらめに縛られ、猿轡をされて、同じ恰好の母と二人、松並木の根元へ俵のごとく投げ出されていたのだ。そばに街道駕籠が二挺、少し離れたところに

恐ろしい悪党たちが六人立ち話をしている。爽やかな松風と、虫の声と、きれいな星空、——つい昨夜の夢のようにはっきりと覚えている。

おしまはまだ十三であった。母が連れ子をして後妻に入っていた義父が急死同様にぽっくりなくなると、家がなまじ小田原でも中どころの料理茶屋だっただけに、悪い親類中が寄ってたかってほんのわずかな手切金で母を追い出してしまった。しかたなく生れ故郷の江戸へ帰る途中、女ばかりの旅はあぶないからと、店へ時々商(あきな)いにきて顔見知りの江戸の小間物屋がいっしょに行ってくれることになった。

朝、小田原を立って藤沢までは八里あまり、女子供の足には少し無理である。それをもう少し行けば藤沢だからと、騙(だま)され騙され歩くうちにいつか日が暮れ、こんどこそほんとうに一里足らずだ、よく歩きなすったとおだてられながら、その松並木へかかったころは、どうやら宵さえ過ぎていた。しかもそこにちゃんと別の男が駕籠まで二挺(ちょう)用意して待っていたのである、助けを呼ぶ声さえ三声とは許されなかった。

「それ、約束の金だ。渡したぜ、後でいざこざはねえだろうな」

待っていた女衒(ぜげん)が念を押した。

「たしかに受取ったよ。お互いに名も所もいわねえ悪党同士だ。後は煮て食おうと焼いて食おうと勝手にしてくんな」

小間物屋は、金をしまいながらわらった。

もう駄目だとおしまは思った。ふるえながら不自由な身をぴたりと母に寄せかけて行くと、

その母の体もやはりがたがたとふるえているのであった。鬼のような雲助が四人、ずかずかとこっちへ近づいてくる。

その時だった。どこからともなく礫(つぶて)がひゅうと空を切って、先頭の雲助があっと両手で顔をおおった。どうしたとびっくりした連れも、次の瞬間には胸を押えているし、頭を抱えて悲鳴をあげるやつ、喉を押えて仰反(のけぞ)るやつ、

「やつ、邪魔が入った。気をつけろ」

度胸よく道中差へ手をかけた女衒でさえ、たちまち胸、肩、眉間(みけん)を狙われてあっと尻餅をついた。しかも礫の雨は容赦(ようしゃ)なく正確に飛んで止まないので、天狗だあっと一人が夢中で叫んで逃げ出した。わあっと二人がそれにつづくと、残る三人もいたたまらない。後を振り返って見るやつさえなく、逸散(いっさん)に逃げて行く。

しばらくはひっそりと誰の姿もなかった。夜露にぬれた松風が冷えびえとしてきて、やっぱり天狗だったのかしらと、またしても怖くなりかけた時、

「やあ、ひどい目にあったね」

思いがけなくもすぐ側の松の木のかげから、いきなり声をかけられて、おしまは飛びあがるほどびっくりした。

紺がすりに小倉の袴、それはまだ美少年ともいいたいような廿歳(はたち)前の若侍だった。

(十年目で、とうとうその人にめぐり逢えた)

今、川に向って黙々と立っている男の後ろ姿を見つめながら、飛びついて行きたい心をじ

っと押えて、おしまはなぜかふっといいようのない悲しさに胸を閉されてしまった。

運命の賽

金で人を売る憎いやつ、せめて思い切り川の中へ叩っこんでやればよかったとも思い、いや、あれでいいんだ、生血のうらみと叱責してやった一言の方が、暴力以上に胸にこたえたはずだとも思い直したり、源次郎はしばらく暗い川面に向って沸りくる鬱憤をしずめていた。

やがてなに食わぬ顔をして店へ帰り、茶の間に待ちうけていた女に、話は無事についたからと報告すると、どうだえ当分家で働いて見る気はないかえという意外な申し出である。用心棒以上にはなんの役にも立つまいと思い、さあ、と一度は迷ったが、とにかく当分は官軍の目をのがれなくてはならぬ、その上でたとえ一命があっても、侍という身分は奪われてしまったのだから、どうでも今後は庶民の中へ溶けこんで裸一貫から人生を出直さなければならない。一時世を忍ぶ方便という卑屈な根性ではなく、新生への振り出しという気持になったので、よろしくたのみますと改めて頭を下げた。

名前は源助、身元引受人などありようはなく、これは女がくわしくも聞かず自分の遠縁の者だと勝手にきめてくれた。さて住込んで見ると用はいくらでもある。朝は台所の水くみから廊下拭き、午からは出前持ち、使い走り、その間には皿洗いもするし下足番も手伝う。夕方からはお燗番になったり帳場をたのまれたり、おかげで枕につくと余計な世の中の雑念な

どなに一つ考える間もなく、朝までぐっすり一眠りだった。つまり体さえ骨惜しみをせずに働かせていれば、至極のん気な毎日なのである。

が、それが五日とすぎ十日とたつうちに、案外のん気でばかりいられない事実がわかってきた。帳場へ坐ってだんだん帳尻を見て行くうちに、仕込みを任かされている板前の不正が自然とわかってくるし、女中は勘定をくすね、出前持ちは丼の数をごまかしている。まだあるはずの仕込みの品がいつの間にか足りなくなっているなどは毎日のことで、いくら女主人が勝気でも、年が若いし不言不語奉公人全部に共謀されてかかられてはとても力及ばない。女が遠縁の者ということにして、なるべく帳場へ坐らしておこうとする肚が、どうやら源次郎にものみこめてきた。従って奉公人たちからは、源次郎の存在が次第に煙ったくなってくる。それを知らぬでもなく知っているでもない顔つきで、源次郎はあくまで新米らしく小まめに明るく、誰にも誠意を見せてよく働いた。

そういう男と一つ屋根の下に寝起きするようになって、おしまの物おもいは日毎に深まるばかりである。男は自分があの時の小娘だとは、いまだに露ほども気がつかないようだ。無理もない、藤沢から江戸までの、日数にしてたった一日半の道づれだった。しかし、そのたった一日半の旅がおしまにはどうしても忘れられなかった。

美少年は肩へ手をかけてゆっくり竝んで歩いてくれながら、やさしく教えてくれた。

「長い人生にはまだまだいろんなことがある、もっと悲しいことや恐ろしいことがあるかも知れない。しかし心さえ正しければ、きっとまた誰かが助けてくれるさ。人間はいつも希望

を持って、なるべく悲しいことやいやなことは忘れて、生甲斐のある毎日をおくることだね」

そして、海の青い品川で、名前もはっきりとはいわず、こっちはとても名残り惜しかったが、美少年はただ明るくわらってくれただけで、美しい別れをした。

それからのおしまの半生はただ嶮しくなる一方だった。間もなく患いついた母をかかえて、深川という生地獄へ落ちたのが因果のはじまりである。貪婪飽くなき餓鬼共に寄ってたかって翻弄され、苛まれ、金の世の中が憎い、男ぐらい手前勝手で不正直で冷酷なものはないと知りつくしてくるにつけ、時々ふっと思い出すのはあの美少年のおもかげだった。

（早く助けにきてくれないかなあ）

はじめは半分本気で、やがてあばずれて男を男くさくも思わなくなる年ごろには、自分にもたった一度あった美しい夢として、いつの日にか助けにきてくれるのはあの若旦那だと、ひとりできめて自分をなぐさめていたのだからいじらしい。

その夢の男にせっかくこうしてめぐり逢いながら、なんという皮肉なのだろう、逢ってみてはじめてあまりにもけがれてしまった自分の体が悲しいのだ、名乗った後で、そんな女になっていたかとさげすまれるのが怖いのだ。

だが、男が帳場へ坐るようになってから、奉公人の働きぶりが目に見えて違ってきたことも認めずにはいられない。実際問題からも、男はだんだんこの店になくてはならない人間になっている。結局さっぱりと別れてしまうか、夫婦になってしまうか、おしまは女一生の運命の賽をふって見なくては生きていられないところまで思い詰めてきた。

月を越して六月の末、その年は四月に閏があったので、時候はもう残暑であった。死んだ母の祥月命日にあたる日、おしまは源助をつれて深川の正徳寺へ墓まいりに行くことにした。

なにも知らない源助は仕着せの上から「たつみ」の半纏をひっかけ、そんな恰好ももうすっかり身について、寺への供物の風呂敷包を持っておとなしくついてきた。船で永代の下総屋というなじみの船宿につけ、そこから正徳寺はほんの十丁足らずの道である。

「阿母さん、ことによると、今夜あたりあたしもそばへ行くようになるかも知れない」

墓の前に立っておしまはうっかり呟きながら、そんな気持にまでなっている自分に思わずぞっとした。

秋の盃

行きがけに支度をたのんでおいたので、下総屋へ帰ってくると、二階にちゃんと酒肴の用意ができていた。

「御苦労だったね、源さん、さあ精進おとしに一つ――」

まず男に盃をすすめて、自分も一つうけた。日盛りを歩くとまだ暑いが、こうして部屋でくつろいでいるともう爽やかな秋風を感じる。すぐ目の前の大川が簾越しにからっと明るく、深川通いの猪牙、昼遊びの屋根船、白い帆を張った荷船など、この辺はぐっと広くなる川幅一杯に賑わって、時には絃歌さえ水につたわってくる静けさだ。永代橋が絵のように澄んだ

青空にくっきりと浮いて見えた。

「おかみさん、どうかしましたか、なんだか顔色が少し蒼いようですぜ」

「潮の照り返しのせいだろう」

「そうですかね、もっともおかみさんは夏痩せする方の質（たち）らしいから」

憎らしい、あんなことをと、おしまはひそかに男を睨んだ。このごろ少し痩せて目ばかり熱ぼったくなっているのは、鏡を見るたびに知っている。誰のせいなのさ、こんな切（せつ）ない胸にさせているのは、といったってただ他愛のない恋娘のそれとは違う。あたしのは女の命をかけたぎりぎり一杯の真剣勝負なのだ。

「源さん、あたしの顔、ずっと前にどこかで見たおぼえない」

さあ、と男は平気でまともに目を合わせて、

「どうも思い出せませんね」

「そうかしら。あたしはよくおぼえてるんだけど。――まあおほしな、今日は飲みながら少し聞いてもらいたいことがあるんだから」

「いただきます、遠慮なく」

卑屈に追従（ついしょう）ひとついうでもなく、自惚れっ気が見えるでもなく、至極おっとりと盃を重ねて、やっぱり育ちが違うんだと思うにつけても、おしまはただ溜息が出るばかりだ。

「どうです、おかみさんも一つおあけなすっては」

「ありがと、じゃせっかくだから一つだけ。――源さん、お酒の力を借りていうと思われて

はいやだから、酔わないうちに思い切っていってしまうけど、お前さんあたしを女房に貰ってくれない。たつみの亭主に坐ってくれない」

じっと男の顔を見つめて、こんどこそほんとに真っ蒼になったのが自分でもわかった。

「からかっちゃいけませんよ」

男は、あっさり苦笑しただけだ。

「いいえ、本心。まあ聞くだけは聞いて下さい。もう知ってるだろうけど、あたしは元この土地へ出ていて、さんざん男のおもちゃにされ、体中しみだらけになっている女さ。源さんのような真面目な人のおかみさんになれる柄（がら）でないことはよく知っているけれど、あたしだって心まで金で売ったおぼえはないつもりなの、――昔或る人が教えてくれました、悲しいことやいやなことはなるべく早く忘れて、長い一生なんだから、人間はいつも希望を持っているがいいって。あたしだって少しは生甲斐のある女になりたい。昔を忘れてせめて心だけでも女らしいおかみさんになってみたい。源さんが帳場へ坐ってくれるようになってから、店の様子がすっかり変ってきました、家というものはやっぱりちゃんとした主人がいなければ駄目なものだ、そう思うにつけても、浮気や出来心なんかではなく、あたしは源さんを思いこむようになってしまったんです。虫がよすぎるかしら」

ここまで話してしまえば、いくらか気が楽になる。黙って盃をもてあそんで聞いている男に酌をしてやりながら、

「迷惑――源さん」

「せっかくだがおかみさん、あっしは兇状持ちです」
男はきっぱりと顔をあげた。さすがに真剣な目の色である。
「かまわない、女が一度この人と見込んで自分から口説いた男だもの」
「そりゃおかみさん、今の言葉と少し違うようですね。おかみさんは女の一生に生甲斐が持ちたいから身をかためたい、浮気や出来心ではないとおいいなすった。兇状持ちなんかを亭主にして幸福になれますか」
「そんな無理な、——女が自分から切り出しておいて、兇状持ちなら止めますなんて薄情な、それこそ浮気女になるじゃありませんか、いいえ、あたしはそのことも大抵わかっていた、だからさっきあたしは、ずっと前から源さんを知っている女だといっているんです」
「どうもわかりませんね。どこでお目にかかったことがあるんだろうか」
まんざら野暮一方の源次郎ではない、多少遊んだことはあるが、そんな女の中にはない顔だ。またこれだけの縹緻なら、滅多に見忘れることもないはずである。
「ちゃんと約束してくれたら話します」
「どうでも困るといったら——」
「死ぬでしょうよ、きっと」
女は淋しくわらいながら、もうすっかりいつもの落着きを取戻したらしく、頬にもほんのり血色が出て、後はあなた任かせといいたげな、どこか艶めきゆるんだ顔、姿だった。むろん冗談とも思えないが、死ぬというのを言葉どおり真にうけるほど甘い人間にもなり切れない。事実色恋どころか、きびしい現実を背負わされている源次郎である。

「おかみさん、ちょっと——」
襖の外から遠慮そうに呼ぶ女の声がした。
「いいんですよ、あけても」
「いいえ、ちょっとお顔を——」
「はいただ今——、源さんほんとに考えといてくれなくちゃいやですよ」
おしまは念を押して、気軽に立って行った。ちょっと強すぎる芳香から解放された形で、源次郎はうっとりと眩しい川面の秋に目を投げている。どこで逢った女だろうと、それだけが妙に気がかりだった。
間もなく帰ってきたおしまは口唇の色までかえていた。膝を突き合わせるように坐って、
「源さん死んで、——いっしょに死んで下さい」
いきなり手を取りながら顔をのぞきこむのである。
「どうかしましたか」
「官軍が、——あたしが悪かった。こんなところへつれ出したりして。この間の人夫が訴えたんです。お願い、いっしょに殺して。もうすっかり家は取巻かれているし、やっと頼んで支度する間だけ待ってもらってきたの」
「あわてちゃいけない」
源次郎はきたなと思った。今さら顔色をかえることもない。

「落着いてるわ、あたし。わらって死にますから、おかみさんにして下さいね」
「あんたが死ぬことはあるまい」
「あるわ。嫌われるのが辛かったからいわなかったけれど、あたしは一度藤沢の松並木で、阿母さんと、——あの時死んだと思えば、いいえ、あの時からのあなたなんだもの、かわいそうだと思っていっしょに死なせて下さい」
　今は恐怖も未練もない必死のおしまの顔だった。
「そうか、やっと思い出したよ。もう十年にもなるからねえ」
　思わずその肩へ手をかけて、
「よかろう、お嫁さんに貰うことにしよう」
「ほんと、——ほんとね」
　激しく見つめて嚇と燃える目に、涙があふれて、身も世もなく縋りついていた。
「まあ待て。そうあわてて死ぬことはなかろう。明日に希望を持とうじゃないか。せっかく約束をしたばかりだ、笑って見送ってもらいたいね、ちょうどここに盃はあるし」
　源次郎は無理に女を坐らせて、あくまでも冷静に膳の上の盃をとった。泣き濡れて歯をくいしばりながら、それでも気を取直して銚子をとるおしまの白い手に、しいんと秋が澄んでふるえていた。

光風社文庫

拾った女房／矢一筋

や 2-10

著者　山手樹一郎
発行者　深見悦司
発行　光風社出版株式会社
〒112-0005 東京都文京区水道 1-8-2
電話 03(5800)4451
発売　成美堂出版株式会社
〒112-8533 東京都文京区水道 1-8-2
電話 03(3814)4351
FAX 03(3814)4355
印刷　大盛印刷株式会社

ISBN4-415-08833-3

光風社文庫

- 八百八町春爛漫　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説①　昭和40年度
- 剣鬼らの饗宴　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説②　昭和41年度
- 浜町河岸夕化粧　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説③　昭和42年度
- 秘剣闇を斬る　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説④　昭和43年度
- 慕情深川しぐれ　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑤　昭和44年度
- 風の中の剣士　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑥　昭和45年度
- 血しぶき街道　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑦　昭和46年度
- おもかげ行燈　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑧　昭和47年度
- 躍る影法師　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑨　昭和48年度
- 剣光闇を裂く　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑩　昭和49年度
- 剣鬼無明斬り　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑪　昭和50年度
- ひらめく秘太刀　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑫　昭和51年度

光風社文庫

- 明暗廻り灯籠　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑬　昭和52年度
- 魔剣くずし秘聞　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑭　昭和53年度
- 夢がたり大川端　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑮　昭和54年度
- 必殺 天誅剣　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑯　昭和55年度
- 血汐花に涙降る　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑰　昭和56年度
- 剣俠しぐれ笠　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑱　昭和57年度
- 江戸恋い明け烏　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑲　昭和58年度
- 剣が哭く夜に哭く　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説⑳　昭和59年度
- 星明り夢街道　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説㉑　昭和60年度
- 鍔鳴り疾風剣　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説㉒　昭和61年度
- 剣よ月下に舞え　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説㉓　昭和62年度
- 花ごよみ夢一夜　日本文藝家協会 編　新選代表作時代小説㉔　昭和63年度

成美文庫

坂本龍馬
物語と史跡をたずねて
八尋舜右著

幕末動乱の変革期、雄大な発想と無類の行動力で新時代建設に邁進した若き志士龍馬の事蹟と生涯を活写。

吉田松陰
物語と史跡をたずねて
徳永真一郎著

入獄を繰り返し、ついには刑死した若き松陰。行動する教育者の思想と生涯に、偉大な先駆者像を見る。

新撰組
物語と史跡をたずねて
童門冬二著

人斬り集団と揶揄される新撰組を、純粋に思想に殉じた男達の集団と評価する著者の新撰組隊士への挽歌。

勝海舟
物語と史跡をたずねて
船戸安之著

幕臣でありながら幕藩体制を超越し、誠心日本を思いながら世界に目を向けていた好漢、勝海舟の生涯。

伊達政宗
物語と史跡をたずねて
竹中勇太郎著

信長、秀吉、家康とつづく中原の争乱記、奥羽の覇者も天下を望んでいた。独眼竜政宗、ここにあり。

織田信長
物語と史跡をたずねて
土橋治重著

戦乱の世を血しぶきを浴びながら駆けぬけた革命児信長。本能寺に散ったこの希代の英雄の人間像。

成美文庫

土方歳三
物語と史跡をたずねて
童門冬二著

農家の出身でありながら、誠に殉じ、京洛の巷に命を賭して戦って敗れた新撰組副長の波乱の生涯。

松尾芭蕉
物語と史跡をたずねて
嶋岡　晨著

俳句を芸術の域にまで高めた〝俳聖〟芭蕉の漂泊の生涯と「蕉風俳諧」の神髄に迫る。

徳川家康
物語と史跡をたずねて
神坂次郎著

苦難と忍耐が老獪な家康を生み、徳川三百年の治世を築いた。幼少期より天下統一まで苦闘の七十年。

赤穂浪士
物語と史跡をたずねて
船戸安之著

日本人のテーマともなる赤穂四十七士の討ち入り。あまたの巷説をふるいにかけ、史実に迫る物語。

西郷隆盛
物語と史跡をたずねて
童門冬二著

江戸無血開城を実現させ、新政府の中枢にありながら、非命に倒れた「えたいのしれない男」の人間像。

高杉晋作
物語と史跡をたずねて
八尋舜右著

快男子・高杉晋作の二十九年の生涯を、幕末の多彩な人間像とともに、描き、変革の時代を躍如とする。